

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第121集

志賀公園遺跡Ⅱ

2004

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

志賀公園遺跡は、名古屋市北区の志賀公園を中心とする区域に広がっています。付近は今でこそ静かな住宅街となっていますが、かつては製鉄所が建ち、重工業の中核の一つでした。

志賀公園遺跡の発掘調査は、製鉄所跡地の再開発に伴う調査として行われたもので、今回が当センターとしては2回目にあたります。調査地も街路を挟んで前回調査地の西隣に位置します。

前回の調査によって、志賀公園遺跡における人々の生活の跡は、弥生時代から現代まで連続と続いていることが明らかにされました。非常に内容の濃い、重要な成果が得られています。今回は、古墳時代の水田跡が新たな発見といえます。この地域の土地利用の変遷を研究する上で重要な手懸りになるものと思います。

最後になりましたが、志賀公園遺跡の発掘調査・整理報告を実施するにあたり、各方面の方々にご配慮賜り、また関係者および関係諸機関のご理解とご協力を頂きましたことに対して、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成16年8月

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 古 池 庸 男

例言

1. 本書は愛知県名古屋市中九区中丸町2丁目目所在する志賀公園遺跡（遺跡番号01-02015『愛知県遺跡分布図Ⅰ（尾張地区1994）』）の発掘調査報告書である。前回の調査（平成8（1996）年度から平成11（1999）年度まで）分については『志賀公園遺跡』として平成14年度に刊行済みである。よって、本書を『志賀公園遺跡Ⅱ』とする。
2. 発掘調査はアーバニア志賀公園住宅建設に伴う事前調査として、都市基盤整備公団より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成12（2000）年10月から平成13（2001）年3月までの6ヶ月間、調査面積は2,030㎡である。

現地調査は中野良法（調査研究員、現愛知県立大府東高等学校教諭）、木川正夫（調査研究員、現愛知県教育委員会）が担当し、調整を石黒立人（主査）が行った。

4. 調査にあたっては、愛知県埋蔵文化財センター運営協議会委員、同専門委員ならびに次の各関係機関のご指導とご協力を得た。（敬称略順不同）

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター、都市基盤整備公団中部支社、名古屋市教育委員会文化財保護室

5. 本報告書作成にかかる整理期間は平成15（2003）年6月から平成16（2004）年3月までの10ヶ月であり、石黒が担当した。なお、調査研究員：平野昌子、整理補助員：鈴木加代子・時田典子が諸作業にあたった。

6. 本書作成において、次の方々、関係機関のご教示・ご協力をいただいた。

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

7. 本書の編集は石黒が担当し、執筆分担を目次または文頭に示した。なお、愛知県立明和高等学校教諭森勇一氏より自然科学分野に対して指導および玉稿を賜った。

8. 発掘調査および本書で使用した方位は国土座標第Ⅶ系、高度はT.P.に準拠している。

10. 図版に掲載した遺物実測図は原則として1/4であり、その他は必要に応じてその都度示した。

11. 層序の記載は小山正忠・竹原秀雄編著1994『新版標準土色帖1994年度』（日本色研事業株式会社）を参考にした。

12. 遺構番号は原則として発掘調査時のそれを踏襲した。ただし、一部について記載の必要上から新たに遺構記号・番号を付与したが、調査資料原本および遺物の注記に変更はない。新旧の対照については本文中でもわかるようにした。

13. 発掘調査の記録類（調査日誌・実測図・写真等）は愛知県埋蔵文化財センター（愛知県教育サービスセンター）で、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター（愛知県教育委員会）で保管している。

本文目次

第1章 遺跡と調査の概要

- (1) 遺跡の位置と環境 1/ 石黒
- (2) 調査の経緯・概要 3/ 石黒
- (3) 調査日誌抄録 3/ 石黒

第2章 遺構の概要

- (1) 基本層序 4/ 石黒
- (2) 古墳時代の遺構 4/ 石黒
- (3) 古代の遺構 7/ 石黒
- (4) 中世・戦国の遺構 14/ 石黒

第3章 遺物の概要

- (1) 弥生時代以前の遺物 17/ 石黒
- (2) 古墳時代の遺物 17/ 石黒
- (3) 古代の遺物
- A. 概要 17/ 石黒
- B. 須恵器・土師器類 17/ 石黒
- C. 木製品 19/ 樋上

第4章 自然科学分析

- (1) 庄内川低地、志賀公園遺跡における
堆積環境 22/ 鬼頭
- (2) 志賀公園遺跡より出土した自然遺物
29/ 堀木・上田
- (3) 志賀公園遺跡産出の貝類化石
36/ 松岡
- (4) 箱状遺物の材質分析 37/ 佐藤
- (5) 志賀公園遺跡出土木製品の樹種同定
38/ 植田
- (6) 志賀公園遺跡から産出した昆虫化石
について 41/ 森・上田

第5章 総括

- (1) 中世・戦国の遺構群と景観 47/ 石黒
- (2) 古代の遺構群と景観 48/ 石黒
- (3) 弥生・古墳の遺構群と景観 49/ 石黒
- (4) 古代の木製品について 50/ 樋上

図版目次

遺構図

- 図版 1 調査区全体図 1/400
- 図版 2 調査区部分図(1)1/200
- 図版 3 調査区部分図(2)1/200
- 図版 4 調査区部分図(3)1/200
- 図版 5 個別遺構図 00A 区 SB・SD1/50
- 図版 6 個別遺構図 00A 区 SD・SK1/50
- 図版 7 個別遺構図 00A 区 SK・00B 区 SD1/50
- 図版 8 個別遺構図 00B 区 SD・SE・SK1/50
- 図版 9 個別遺構図 00B 区 SK1/50
- 図版 10 個別遺構図 00B 区 SX1/50
- 図版 11 個別遺構図 00B 区 SX・杭列 1/50
- 図版 12 00A 区壁面土層セクション 1/100
- 図版 13 00A 区・00B 区壁面土層セクション 1/100
- 図版 14 00A 区・00B 区層名一覧
- 図版 15 00C 区壁面土層セクション・層名一覧
- 図版 16 00A 区上層水田プラン(1)1/200
- 図版 17 00A 区上層水田プラン(2)1/200
- 図版 18 00A 区上層水田土層セクション 1/100
- 図版 19 00B 区下層水田プラン(1)1/200
- 図版 20 00B 区下層水田プラン(2)1/200
- 図版 21 00B 区下層水田土層セクション 1/100
- 図版 22 00B 区 NR03・04・杭列プラン 1/300
- 図版 23 00B 区 NR01 プラン 1/300
- 図版 24 00B 区 NR01・02 プラン 1/300
- 図版 25 00B 区 NR 遺物出土分布図(1)
- 図版 26 00B 区 NR 遺物出土分布図(2)
- 図版 27 00B 区 NR 遺物出土分布図(3)
- 図版 28 00B 区 NR 遺物出土分布図(4)
- 図版 29 00B 区 NR 遺物出土分布図(5)
- 図版 30 00B 区 NR 遺物出土分布図(6)
- 図版 31 00B 区 NR 遺物出土分布図(7)

遺物実測図 須恵器・陶磁器・土師器

- 図版 32 00A 区 SD01 他出土遺物
- 図版 33 00A 区 SD02 出土遺物
- 図版 34 SK・上層水田出土遺物
- 図版 35 00B 区 NR01 出土遺物(1)
- 図版 36 00B 区 NR01 出土遺物(2)
- 図版 37 00B 区 NR01 出土遺物(3)
- 図版 38 00B 区 NR01 出土遺物(4)
- 図版 39 00B 区 NR01 出土遺物(5)
- 図版 40 00B 区 NR01 出土遺物(6)

- 図版 41 00B 区 NR01 出土遺物(7)
- 図版 42 00B 区 NR01 出土遺物(8)
- 図版 43 00B 区 NR01 出土遺物(9)
- 図版 44 00B 区 NR01 出土遺物(10)
- 図版 45 00B 区 NR02 出土遺物(1)
- 図版 46 00B 区 NR02 出土遺物(2)
- 図版 47 00B 区 NR02 出土遺物(3)
- 図版 48 00B 区 NR02 出土遺物(4)
- 図版 49 00B 区 NR02 出土遺物(5)
- 図版 50 00B 区 NR02 出土遺物(6)
- 図版 51 00B 区 NR02(7)・NR03 出土遺物
- 図版 52 00B 区 SD02 ～ 06 出土遺物
- 図版 53 00B 区 SD04 出土遺物
- 図版 54 00B 区 SD12 出土遺物
- 図版 55 00B 区 SD13 ～ 17 出土遺物
- 図版 56 00B 区 SX 他出土遺物
- 図版 57 00B 区上層水田他出土遺物
- 図版 58 00C 区 NR01 出土遺物

遺物実測図 木製品

- 図版 59 古墳中期(1)
- 図版 60 古墳中期(2)
- 図版 61 古代(1) 斎串(1)
- 図版 62 古代(2) 斎串(2)
- 図版 63 古代(3) 掘削具(1)・工具
- 図版 64 古代(4) 掘削具(2)他
- 図版 65 古代(5) 農具(1)
- 図版 66 古代(6) 農具(2)・容器(1)
- 図版 67 古代(7) 容器(2)
- 図版 68 古代(8) 容器(3)
- 図版 69 古代(9) 下駄(1)
- 図版 70 古代(10) 下駄(2)
- 図版 71 古代(11) 雑具・運搬具
- 図版 72 古代(12) 杭(1)
- 図版 73 古代(13) 杭(2)
- 図版 74 古代(14) 杭(3)
- 図版 75 古代(15) 建築部材(1)
- 図版 76 古代(16) 板(1)
- 図版 77 古代(17) 板(2)・棒
- 図版 78 古代(18) 板(3)
- 図版 79 古代(19) 板(4)
- 図版 80 古代(20) 棒(1)
- 図版 81 古代(21) 棒(2)
- 図版 82 古代(22) 棒(3)
- 図版 83 古代(23) 丸太(1)
- 図版 84 古代(24) 丸太(2)

図版 85 古代(25) 残材／中世

遺構写真

図版 86 調査前風景

図版 87 00A 区上面全景

図版 88 00A 区上面中景・SD02・08 近景

図版 89 00A 区 SK292・SK305 近景

図版 90 00A 区水田全景

図版 91 00B 区上面全景

図版 92 00B 区上面全景・中景

図版 93 00B 区 NR02 遺物集積

図版 94 00B 区火葬跡

図版 95 00B 区水田全景

遺物写真

図版 96 00A 区 SD02 中世陶器

図版 97 00A 区 SD02 他中世陶器

図版 98 00A 区 NR01 須恵器

図版 99 00A 区 NR01 須恵器

図版 100 00A 区 NR01 須恵器

図版 101 00A 区 NR01 須恵器・土師器

図版 102 00B 区 NR02 須恵器

図版 103 00B 区 SD12・水田・00C 区 NR01 他

図版 104 木製品(1)掘削具

図版 105 木製品(2)農具

図版 106 木製品(3)

図 17 志賀公園遺跡 00A 区深掘結果を基にした古環境変遷模式図

図 18 志賀公園遺跡 00A 区深掘における堆積環境と堆積曲線

図 19 志賀公園遺跡 00B 区 T-03 セクション図

図 20 志賀公園遺跡出土の種子類・貝類

図 21 志賀公園遺跡箱状製品の FT-IR 分析結果

図 22 志賀公園遺跡で算出した昆虫化石の顕微鏡写真

図 23 地籍図と主要遺構の合成図(14 世紀後半から 16 世紀の景観)

図 24 中世・戦国遺構全体図

図 25 古代遺構全体図

図 26 古代の木製品器種組成比較グラフ

図 27 志賀公園遺跡 00A・B・C 区出土木製品時期別器種・樹種組成グラフ

表目次

表 1 調査区壁面土層セクション層名一覧

表 2 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果

表 3 志賀公園遺跡 00A 区深掘の放射性炭素年代測定結果

表 4 出土地点ごとの種子類一覧

表 5 志賀公園遺跡自然遺物一覧

表 6 骨一覧

表 7 貝類一覧

表 8 志賀公園遺跡 古代の器種別の検出樹種比較

表 9 志賀公園遺跡 古墳と中世の検出樹種比較

表 10 志賀公園遺跡から産出した昆虫化石(ブロック割り法)

表 11 志賀公園遺跡 (P-2 1 層) 水洗浮遊選別法

表 12 志賀公園遺跡 (P-2 4 層) 水洗浮遊選別法

挿図目次

図 1 名古屋市北部の地形区分

図 2 名古屋市北部における遺跡分布

図 3 調査区位置図 1/8000

図 4 下層水田プラン 1/400

図 5 上層水田プラン 1/400

図 6 00B 区南壁 NR (自然流路) 土層断面図

図 7 古代遺構全体図 1 期 1/400

図 8 古代遺構全体図 2 期 1/400

図 9 古代遺構全体図 3 期 1/400

図 10 古代遺構全体図 4 期 1/400

図 11 中世の建物跡と井戸跡配置図 1/200

図 12 井戸跡プラン・土層セクション 1/50

図 13 中世・戦国遺構全体図 1/400

図 14 志賀公園遺跡出土畜畜の形態分類

図 15 調査地点位置図

図 16 志賀公園遺跡 00A 区における深掘の柱状図

第1章 遺跡と調査の概要

(1) 遺跡の位置と環境

志賀公園遺跡は、愛知県名古屋市北区中丸町・平手町にひろがる、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡付近の現状は、志賀公園部分以外は都市部の市街地であり、往時の様子はまったく伺い知ることができない。

遺跡付近の標高は5～6mで、沖積平野の微高地に立地する。北方約1kmには庄内川と矢田川の合流部がある。

土地条件図や地籍図によれば、旧流路に相当する低地（図1の後背湿地・谷底平野）が把握でき、河川最下流部の氾濫地帯に位置していることがわ

かる。土地条件図は現地表からの観察であるために古くまでは測れないが、少なくとも現況においても志賀公園遺跡は平野の微高地（自然堤防）に立地していることがわかる。

実際、発掘調査では弥生時代から古代にかけて2～2.5mの堆積があったことが確認でき、急激な地表面の上昇があったことが明らかになった。現在でこそ庄内川は離れているが、往時は近接していたものと考えられる。

あるいは、下流部のデルタ地帯として、多くの流路が志賀公園遺跡に影響を与えていたであろう。

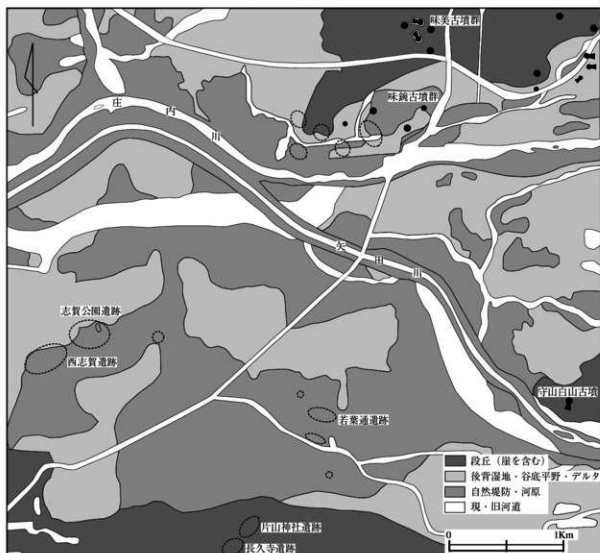


図1 名古屋市北部の地形区分

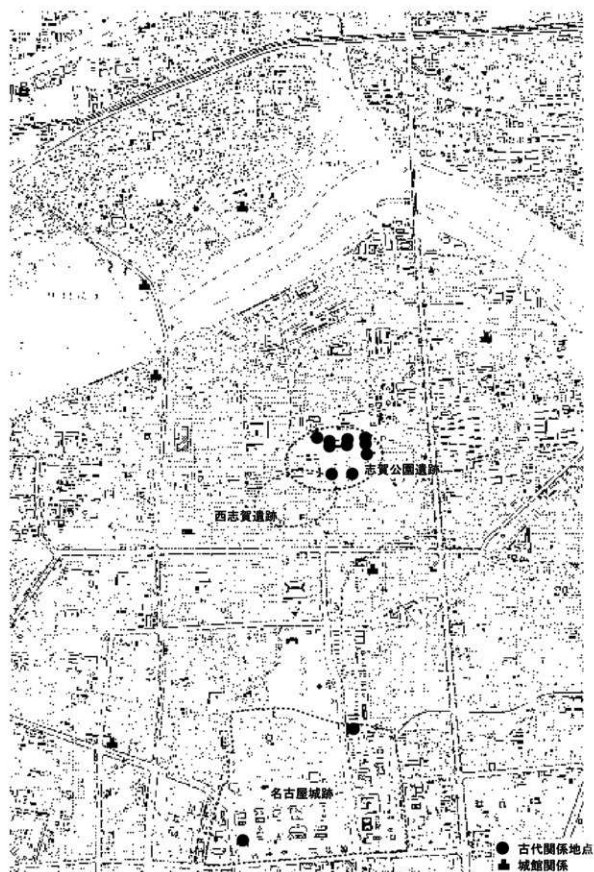


図2 名古屋市北部における遺跡分布

(2) 調査の経緯・概要

志賀公園遺跡にかかる当センターの発掘調査は、すでに1996年度から1998年度の3カ年14,200㎡が実施済みであり、報告書も2001年8月に刊行されている。

今回の調査は、前回と同様に都市基盤整備公園の集合住宅建設に伴う事前調査として実施されたものである。調査地は前回調査地の西隣の街区北半に位置し、地番は中丸町2丁目である。

調査区は面積が2,030㎡であり、主要部分と飛び地部分に分かれる。2,000㎡弱の主要部分は排土仮置場や作業スペースの確保の為に00A区(北側調査区)・00B区(南側調査区)の二つに区分して調査を実施した。

調査はまず重機で神戸製鋼工場跡地の整地層およびその下部の現代水田耕土を除去し、その後には作業員を投入して人力で行った。

上面は古代から中世まではほぼ同一面で調査ができた。下面は弥生時代から古墳時代の水田(上下層2面)であり、上面からの深さは2m前後であった。上面と下面の間には古代の河道があり、遺物を包含する部分については人力掘削を行い、下部では一部重機を使用した。

(3) 調査日誌抄録

- 10/16 00A区東側より上面表土剥ぎ開始。
- 10/19 トレンチ掘削。遺構検出。
- 10/24 遺構掘削開始。中世・古代の遺構が展開。
- 11/9 空撮。
- 11/13 下面表土剥ぎ開始。
- 11/16 NR01 検出・掘削。
- 11/22 上層水田検出。
- 12/4 下層水田検出。
- 12/15 埋戻し開始。
- 12/19 00B区表土剥ぎ開始。
- 12/25 トレンチ掘削
- 12/26 降雪のため作業中止。
- 12/27 ベルトコンベアー設置。年内作業終了。
- 1/9 遺構検出。
- 1/12 遺構掘削開始。
- 1/15 00C区表土剥ぎ開始。
- 1/16 00C区調査開始。以後断続的に作業。
- 1/25 00B区空撮。
- 1/31 NR01・02・03の人力掘削開始。
- 2/21 NR03・04を重機で掘削・清掃、写真撮影。
- 2/22 下面表土剥ぎ。上層水田検出。測量。
- 3/2 下層水田検出。測量。
- 3/12 00B区、00C区ともに調査終了。
- 3/13 埋戻し開始。
- 3/14 現地調査終了。



図3 調査区位置図 1/8000

第2章 遺構の概要

(1) 基本層序

調査地は、直前まで貸駐車場であったのでアスファルトが敷設されていた。その下は砂利層であり、その下部を神戸製鋼工場関係の整地層が覆っていた。

整地層の下は現代（昭和以前）の水田耕作土・床土層である。

それらを除去すると即座に古代から中世・戦国の遺構検出面である黄灰色シルト層があらわれる。ただ、NRを除く古代以後の遺構はいずれも浅く、現代の水田造成によって大きく削平されていたことがわかっている。

中世には庄内川沿いに畠が広がっていたことが荘園の記録等で知られているので、旧地表面にはかなり起伏があったと考えられるからである。また、NRの堆積作用も影響していたであろう。とくに00B区は古代末以後も長期にわたって浅い谷地形であったようだ。

古代から中世の遺構検出面を上面として、下面の遺構検出面（上層水田検出面）との間には2m前後の堆積層がある。

この堆積層は、下半部が植物遺体を多量に含む腐植土層、上半部が砂層を含む洪水層である。下半部は古墳時代、上半部は古代の自然流路（NR）まで継続する可能性がある。年代的には5世紀から6世紀までの幅をもつ。

下面は、上層水田と下層水田からなる。

上層水田は上述の腐植土層に覆われている。下層水田はその約30cm下部に位置し、弥生基盤層上面に形成されている。弥生基盤層は、黒色シルト層が上部を覆う黄灰色シルト層で、濃尾平野では一般的な様相である。

下層水田の時期について確たることは言えないが、比較的安定した地表面の傾斜を利用して水田が造成されたものであろう。

(2) 古墳時代の遺構

A. 下層水田（図4、図版16～18・90・95）

00A区では部分的にしか検出できなかったが、00B区では全面にわたって検出できた。

水田面標高は2.15m～2.4mであり、水田面は大きくみて北東から南西に傾斜する。

水田は褐灰色粘土上層の黒色から黒褐色の粘土を耕作土としている。

水田はいずれも小区画で、北部および西部で弧状に、南東部では直線的に展開する。大畦は確認できなかった。

水田からは弥生土器や石鏝も出土しているが、水田造成以前の遺物が混入した可能性もあり、帰属時期については濃尾平野で広域に水田が検出される古墳時代前期に相当すると判断する。

B. 上層水田（図5、図版19～21・90・95）

00A区・00B区とも良好に検出できた。

水田面標高は2.45m～2.6mであり、大畦で区画された単位で標高が揃う傾向をみせる。

水田は褐灰色粘土を耕作土及び畦畔とし、上部には厚さ40cmの植物遺体を多く含む腐植土層が堆積していた。

水田は小区画、中区画、大区画が検出できたが、大畦は大・中区画にともなう。中区画は調査区内で扇形を呈し、長辺約34m、短辺は約20mである。

区画の軸線は下層と異なり、全体が西に向って弧状をなす。地表面の起伏が変化したためであろう。

水田からの出土遺物には、00A区ST411のS字状口縁台付甕D類新段階の破片（50・51）、00B区ST613他の台付甕（図版57・437・438）から判断して、水田の時期は、松河戸Ⅱ式前半に開田、宇田Ⅰ式後半に放棄されたと考える。

なお、水田跡から甕が出土する例は門間沼遺跡・大毛池田遺跡等にあり、農作業に伴う現地炊飯の痕跡であろう。

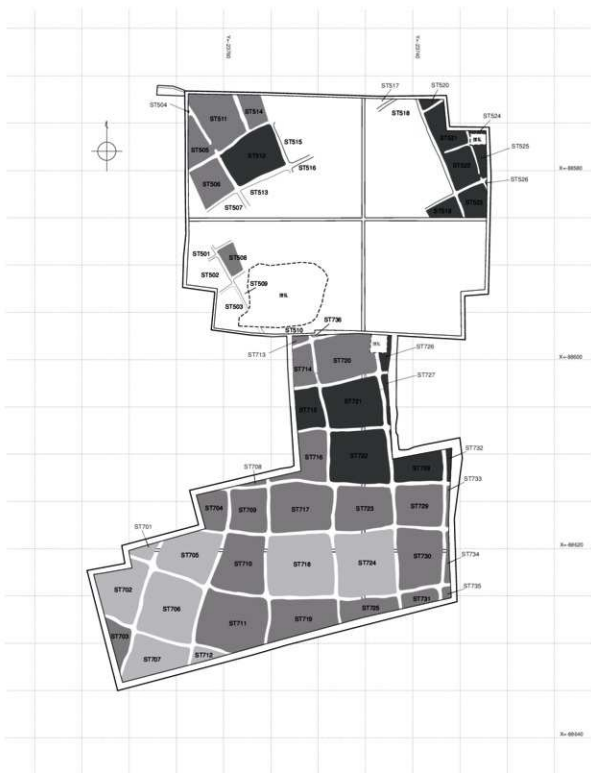


図4 下層水田プラン 1/400



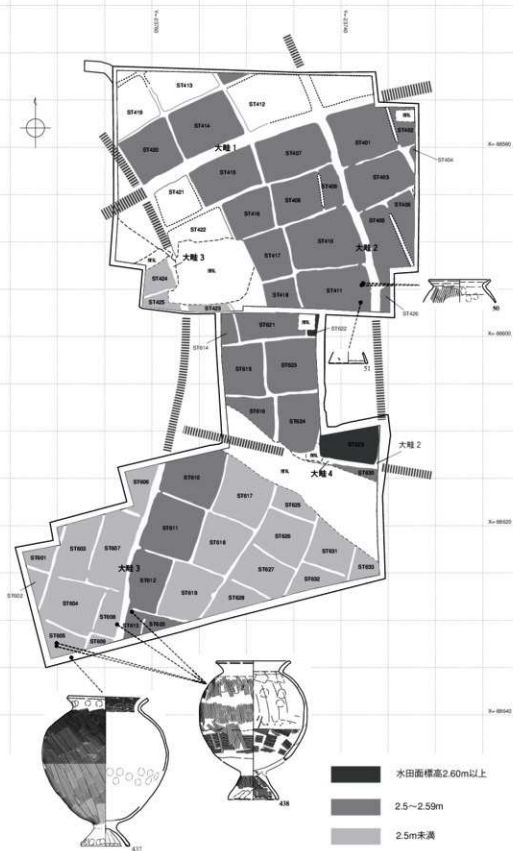


図5 上層水田プラン 1/400

(3) 古代の遺構

古代の遺構には堅穴建物・溝・土坑・自然流路(NR)などがある。ただいずれも後世の削平がいじりしく、上部の形状は不明な点が多い。

A. 堅穴建物 (図版 5・87)

00A 区のみから検出された。

掘形の深さは 5cm ~ 10cm しかなく、カマドが検出できたのは SB02 のみである。遺物の出土は全く無い。カマド (SK304) には炭化物が充満していたが、粘土など構築材は残存していなかった。いずれも柱穴は確認できなかった。

B. 溝

00A 区に限定してのべる。

SD01 (図版 5・87・88) 00A 区を北西・南東にはしる溝である。ほぼ自然流路と並行しているので無関係ではないだろう。自然流路に対して土手状の高まりがあり、その裾を画していた可能性がある。上層から O-53 期の灰陶器片が出土したが、下層は 7 世紀代まで遡るようであり、時期幅がある。溝の断面形は、下層は U 字形、上層は平坦で幅広かったようだ。古代を通して基本となる溝であり、何度も再掘削されたのであろう。

SD08・18・21 (図版 6・87・88) 検出面で 7cm ~ 20cm と浅く、SD21 は SD01 に切られ、SD08 は SD21 に切られる。SD08・21 は西端で中世の土坑に切られ西にのびていないが、ここで収束するのかどうかかわらない。西へのびるに紙や布で箱をつくり、それをを漆塗りで固めたものであることがわかった。SD18・SD21 は別の溝になっているが、つながる可能性が高い。SD08 を含めて SB04 の周囲をめぐる排水溝の可能性もある。

SD24・25・26 (図版 6・87・88) 重複する遺構すべてに切られる。検出面からの深さは 10cm ~ 25cm。自然流路や SD01 に並行し、基本的な軸線を共有する。SD24・25 は底面が平坦であり、断面逆台形の溝であったろう。

SD09・10・11・12・23 (図版 87・88) 東西南北の方格地割を窺わせる軸線をもつ。

SD12・23 は重複しているが、切り合い順序では間に土坑 (SK125) がはいるので、直接関係はない。

SD10 は底面が幅広い溝で、検出面からの深さは約 10cm である。断面は逆台形を呈するのであろう。西端で収束する。

SD09 はやや蛇行気味であり、同時期かどうかかわからない。

C. 自然流路 (図版 22 ~ 24)

自然流路とするが、それはあくまで堆積状況についてである。断面形状が安定しない NR01・02 を除き NR03・04 は規模が大きいとは言え、流路自体が人為掘削による人工水路の可能性を完全には否定できない。

NR01・02 自然流路の最終段階である。底面は平坦ではなく浅いので、人為的な改変は伺えない。全体にシルト質の堆積層で埋積しており、水流は停滞していたであろう。NR01 からは木製品が少量に出土した。また小規模な貝層も認められた。NR01 は 7 世紀のうちに埋没し、NR02 は 8 世紀以後も窪地状に残っていたようだ。

NR03・04・05 NR03 は下部に中粒砂や細粒砂が堆積し、活発な水流があったようだ。底面付近では 12 本の丸木杭列を確認した。太さは 4cm 前後で細く、用途は不明。ほぼ流路の方向に沿うが、土層断面に対応する堆積は確認できない。上部はシルト質で、水流は停滞していたと考えられる。

NR04 は兩岸の壁面が急傾斜で、壁面付近にはシルト質や粘土と砂の互層が堆積し、中央寄りに粗粒砂や中粒砂が堆積している。最初はそれほど水流がなく、後に水流が活発化したのであろう。

NR05 は土層断面から復元した流路であり、最古段階に属す。下部は砂層、上部は粘土・細粒砂・シルトの互層からなる。

これら流路は、基本的に当初は活発な水流があるが、後に停滞し堆積層の粒子が細密化する傾向が認められる。

D. 変遷

遺構の切り合い関係や軸線の対応関係から、都合 4 期に区分できる。

1 期 (図7) NR05・04/SB04/00A-SD08・00A-SD18・00A-SD21・00A-SD24・00A-SD25・00A-SD26 など。

SB04はSD10に切られているという調査所見であったが、軸線は3期でも問題ない。自然流路は最大規模であり、幅は30m以上ある。底面標高は2.7m前後であり、当時の地表面標高を堅牢建物の深さを考慮して4.7mとすれば、深さは2m程度ということになる。

前回の調査ではNR07下部から宇田 I 式期の堆積層が検出されたが、今回検出した上層水田が宇田 I 式期であること、さらに上層水田の上部を洪水層が覆っていることからみて、年代はそこまで

遡らないだろう。古くても7世紀前半代と考える。

2 期 (図8) NR03/SB01・02/00A-SD01・00A-SD09・00A-SD10・00A-SD11・00A-SD23 など。

SD01の掘削はNR03の水位上昇に対応したもののかもしれない。以北の溝は東西南北の方格の軸線をもち、SB01も同様である。NR03はほぼNR04に重複する。

3 期 (図9) NR01・02/SB03/00A-SD01・00B-SD10・00B-SD12・00B-SD17 など。

00A 区はSD01が継続し、SB03は軸線が合う。SD01とSD13がつながる確証はない。

00B 区ではNR01が多量の木製品や遺物をともなう埋没する。埋没後に同じ方向に溝が掘削さ

表1 調査区壁面土層セクション層名一覧

1 表土 (神戸製鋼建設時の土層) または埋没	81 2.594(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
2 2.594(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	82 2.594(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
3 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	83 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
4 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	84 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
5 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	85 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
6 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	86 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
7 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	87 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
8 2.594(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	88 2.594(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
9 2.594(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	89 2.594(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
10 2.594(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	90 2.594(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
11 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	91 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
12 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	92 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
13 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	93 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
14 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	94 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
15 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	95 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
16 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	96 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
17 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	97 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
18 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	98 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
19 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	99 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
20 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	100 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
21 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	101 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
22 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	102 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
23 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	103 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
24 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	104 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
25 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	105 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
26 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	106 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
27 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	107 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
28 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	108 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
29 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	109 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
30 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	110 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
31 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	111 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
32 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	112 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
33 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	113 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
34 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	114 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
35 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	115 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
36 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	116 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
37 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	117 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
38 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	118 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
39 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	119 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
40 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	120 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
41 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	121 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
42 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	122 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
43 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	123 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
44 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	124 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
45 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	125 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
46 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	126 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
47 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	127 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
48 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	128 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
49 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	129 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
50 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	130 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
51 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	131 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
52 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	132 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
53 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	133 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
54 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	134 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
55 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	135 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
56 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	136 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
57 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	137 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
58 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	138 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
59 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	139 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
60 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	140 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
61 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	141 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
62 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	142 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
63 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	143 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
64 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	144 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
65 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	145 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
66 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	146 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
67 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	147 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
68 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	148 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
69 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	149 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
70 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	150 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
71 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	151 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
72 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	152 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
73 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	153 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
74 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	154 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
75 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	155 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
76 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	156 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
77 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	157 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
78 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	158 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
79 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	159 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト
80 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト	160 10.994(02) 黄褐色粘土と少量の砂質シルト

れる。当時、流路跡が帯状の窪地になっていた可能性が高く、溝は排水のためであろう。ただ、SD17は形状からして流路の底面（侵食面）のような印象を受けるので、溝すべてが人工であったのかどうか、検討の余地がある。NR02は流路の最終段階である。初期にはNR01と併存し、合流していた可能性が高い。流路内には須恵器や土師器の集積があった。

4期（図10） 00A-SD01・00A-SD12・00B-SD11・

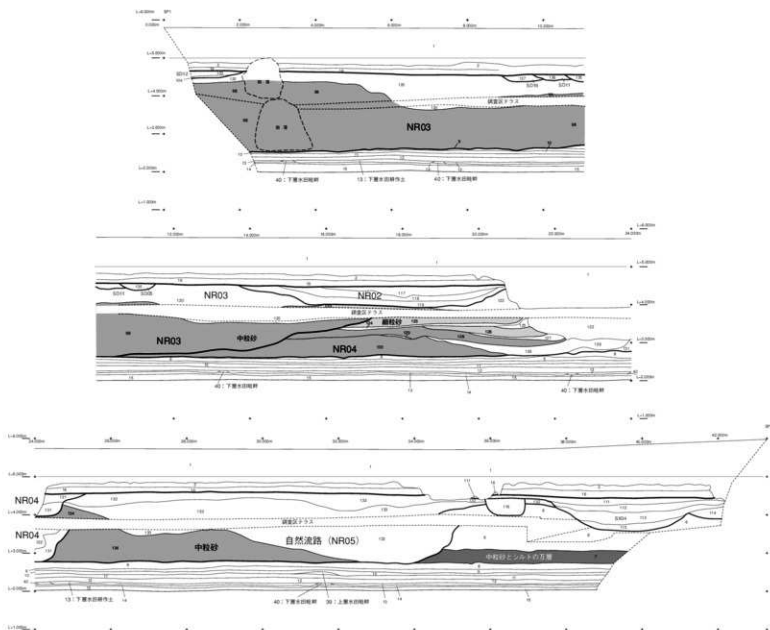
00B-SD15・00B-SD16など。

主要な遺構は溝のみである。

00A区のSD01は10世紀代まで存続している。

00B区ではNR01を横断して溝が掘削されているが、軸線は旧流路の方向から大きくずれるものではない。NR02は窪地状に残存していた可能性が高く、以後も窪地の状態が続いていたであろう。

図6 00B区南壁 NR（自然流路）土層断面図 1/50



Y=23790

Y=23790

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

Y=23720

Y=23720

X=88550

X=88560

X=88570

X=88580

X=88590

X=88600

X=88610

X=88620

X=88630

X=88640

X=88650

図7 古代遺構全体図1期 1/400



図8 古代遺構全体図2期 1/400



Y=23700

Y=23700

Y=23700

Y=23700

Y=23700

Y=23700

Y=23700

Y=23700

X=88550

X=88560

X=88570

X=88580

X=88590

X=88600

X=88610

X=88620

X=88630

X=88640

X=88650

図9 古代遺構全体図3期 1/400



Y--23730

Y--23730

Y--23730

Y--23730

Y--23730

Y--23740

Y--23730

Y--23730

X--88550

図10 古代遺構全体図 4期 1/400



(4) 中世・戦国の遺構

00A区は古代と同一面での検出である。柱穴については、古代の溝に重複して検出されているものがある一方で、古代の堅穴建物の柱穴の検出が困難である点からみて、多くは中世と考えると差し支えないだろう。00B区は、古代は自然流路に限られていたので、検出した遺構はそれ以後ということであるが、中世・戦国期での切り合いが認められた。池状遺構（SP01）を除き、14世紀後半～15世紀を中心とする遺構群であり、16世紀まで下らない。

A. 掘立柱建物（図11）

調査時点には認識していない。整理・報告の過程で掘立柱建物の可能性を考えられたので、ここに報告する。

SB06 1棟なのか2棟なのか判断に迷う。2棟なら、南に1間×2間の掘立柱建物、北に1間×1間の掘立柱建物となる。

SB07 長軸がSD03の方位に一致する切妻式の掘立柱建物である。

SB08 2間×2間の掘立柱建物である。

B. 井戸（図12、図版89）

SE01:00A-SK206 構築物はなく抜き取られていた。

SE02:00A-SK292 SE03を潰してSE02が構築されている。上部は抜き取られていた。

SE03:00A-SK305 SE03には曲物の内側に接して竹が打ち込まれ、曲物が固定されていた。

SE04:00B-SE02である。曲物の最下部が残存するのみである。

C. 火葬跡（図版94）

いずれも00B区で検出された。

火葬跡1 SK02である。SD13に直交する方向に向く舟形土坑である。内部から炭化物や人骨片が出土した。

火葬跡2 SK01。SK02と同様の方位である。

火葬跡3 SK102である。他とは軸線が異なり、また拳大の礫が遺存していた。骨片はなく、炭化木片、炭化物が多量に出土した。

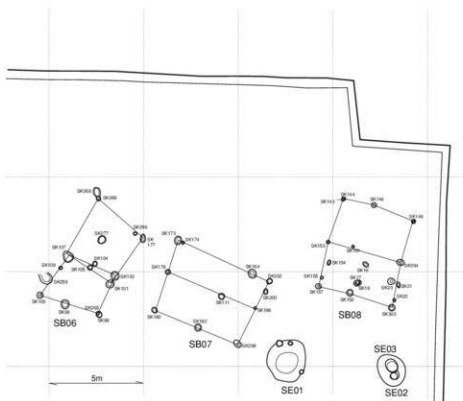


図11 中世の建物跡と井戸跡配置図 1/200

D. 墓坑群(図13、図版91・92)

平面が方形を呈する土坑が集中する箇所があり、いくつかの埋土に「中世方形土坑」と同様の斑土がみられたので墓坑群(SZ01・02)とした。とくに墓坑群2では重複して設けられた3基(西からSK69、SK67、SK68)のうち東側の2基の埋土に斑土が認められた。こうした群集的な配置は朝日遺跡や西上免遺跡でも確認されている。

E. 溝

00A-SD02(図版7・88) 下部は薬研堀状を呈し、上部は幅広く再掘削されている。薬研堀部分は幅約1m、深さ0.5m、上部は底面幅が2.5m以上あり、上端では大規模なものであったろう。

00A-SD03(図版7) 建物群や井戸群を区画している溝だが、検出面では深さ10cmほどしか遺存していなかった。

00B-SD5・6・13(図版7・8) 軸線をそろえて並ぶ溝である。SD5・6は断面逆台形で、検出面で幅1.6～1.8m、深さは50cmと比較的規模が大きい。SD06からは漆碗が出土した。SD13は断面がU字形であり、上部の堆積層は斑状を呈し、人為的に埋められたようだ。底面標高はSD5、SD6、SD13の順で浅くなっている。

F. 池状遺構

SP01:00A-SE01 径約10m、深さ約1mの大規模なものである。南側がNR01に重複して掘削されており、地下水の湧出が考慮されたと考えられる。13世紀後半の灰軸系陶器が出土しており、中世でも年代的に先行し、かつ孤立する。生活関連の井戸というより、畠作にともなう施設:池もしくは溜井の可能性が高いと考える。なお、馬の歯が出土している。

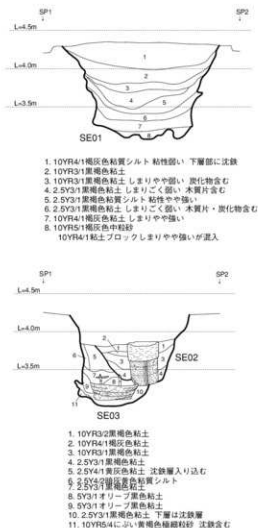
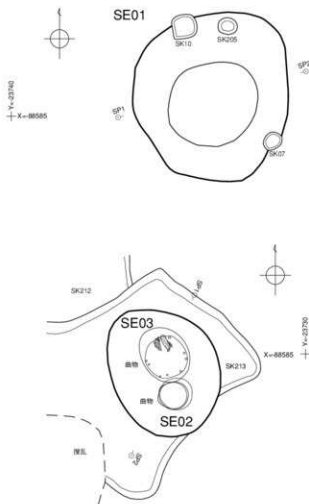


図12 井戸跡プラン・土層セクション 1/50

Y-23780

Y-23780

Y-23770

Y-23760

Y-23750

Y-23740

Y-23730

Y-23720

X-88580

X-88560

X-88570

X-88580

X-88590

X-88600

X-88610

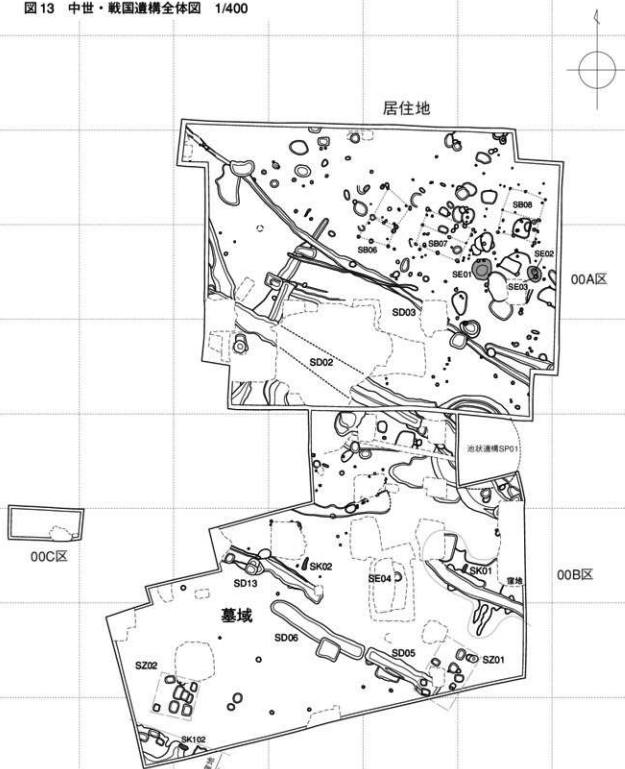
X-88620

X-88630

X-88640

X-88650

図13 中世・戦国遺構全体図 1/400



第3章 遺物の概要

(1) 弥生時代以前の遺物

図示していないが、下層水田から非常に風化した弥生土器片が出土している。頸部に刺突紋がめぐり器壁も薄い。含まれている砂礫は大きい、中期後葉であろう。

下呂石の石礫は3点、これも下層水田から出土している。無茎2点、有茎五角形1点である。水田造成以前の土地利用に関係するものかもしれない。

(2) 古墳時代の遺物

上層水田および古代の流路から出土した土師器・須恵器を掲載した。

全形がわかる台付甕2点(図版57-437・438)は宇田Ⅰ式に属し、どちらも上層水田から出土した。また、S字状口縁台付甕D類(図版34-50)も00A区上層水田から出土している。

NR03からは松戸Ⅰ式から宇田Ⅰ式までの遺物が出土している。底面標高は2.6m前後なので、一部上層水田を削って遺物が混入した可能性もあるが、松戸Ⅰ式の遺物は上流側の包含層からの混入であろう。

(3) 古代の遺物

A. 概要

古代の遺物は、NR01・02から土器類や木製品がまとまって出土した他は、目立った遺構はない。やはり後世の削平が著しいためであろうか、堆積層が削られてしまった可能性が高い。

そのために、7世紀代の遺物は豊富だが、それ以降はほぼ皆無となっている。

B. 須恵器・土師器類

00A-SD01 (図版32)

1は大型甕、2は中型甕である。3は提瓶で、肩部の把手はない。上層からは灰釉陶器・皿(9世紀後半～10世紀)が出土したので、当該期までは窪地状を呈していたのであろう。

また、下層からは返り蓋が1点出土した。返り

蓋は今回の調査で唯一点である。

00B-SD12 (図版54)

須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯、平瓶、甕、把手付鍋がある。

無蓋高杯382は脚部に凸レンズ形の透孔がある。把手付鍋は図面の中央部分が片口状になっている。把手は挿入式である。

土師器には、伊勢系把手付鍋、伊勢系甕がある。の把手は挿入式である。7世紀後半。

00B-SD15 (図版55)

杯H、広口壺、甕がある。392は身が浅く、受け部も扁平になっている。甕の把手は貼付け式である。7世紀後半から8世紀初頭。

00B-SD17 (図版55)

須恵器には、無蓋高杯、甕、横瓶、土師器には伊勢系甕がある。Ⅳ期古段階。

無蓋高杯400は2段透孔で、口縁端部内面が小さく凹面をなす。7世紀後半。

00A・00B-NR01

3層・5層からの出土が多い。1層は検出時における最上層で、以下下部の層位となる。

1層(図版35) 須恵器には、杯H蓋、杯H、横瓶、無蓋高杯、甕、大型甕がある。

蓋62には摘みが付く可能性がある。7世紀後半。

3層(図版36・37) 須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯、大型浅鉢、堤瓶、甕、鍋、広口壺、大型広口壺、長頸瓶、鉢F、鉢、甕がある。

無蓋高杯61は口縁部が外折し、透孔は2段・2方向である。鍋95の把手は挿入式である。

土師器には濃尾系甕と伊勢系甕があり、濃尾系が優勢である。7世紀後半。

4層(図版38) 須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯、半環把手付浅鉢、甕、大型甕がある。

土師器には、甕、濃尾系甕がある。7世紀後半。

5層(図版39～41) 須恵器には、杯H蓋、杯H、台付碗、平瓶、甕、鉢、大型広口壺、甕、甕がある。

杯H蓋137は上面観が楕円形に変形している。無蓋高杯151には波状紋がめぐる。153も大型で突帯は鋭い。同155～160は脚部に透孔が無く、155～

162は杯部外面の区画が、突帯、段、沈線、屈折となり、口縁端部は157～162が小さく外折する。

台付椀は3方向に透孔をもつ。168は片口状をなす。台付椀であろうか。173は底部と側面にいわゆる窯印と異なる線刻が施されている。

甕179は口縁部外面に崩れた波状紋がめぐる。

土師器には、伊勢系把手付鍋、濃尾系甕、伊勢系甕がある。把手は挿入式である。

伊勢系甕195は長胴で、胴部が中央からわずかに下がり、円形の焼成後穿孔がある。7世紀後半。6層(図版41) 須恵器の杯H蓋、広口壺、甕がある。

そのほか、201は土師器の甕、202は1層・2層にまたがって破片が出土した大型甕、203は1層・5層・6層にまたがって出土した甕、204～206は1層・3層・5層、207～209は4層・5層にまたがって出土した。多少古相を含みつつも、7世紀後半に埋没が進んだといえよう。

また次のNR02と接合したものがあるが、NR01との合流を示す資料である。

00B-NR02

1層(図版45) 須恵器には杯H蓋杯H、無蓋高杯、堤瓶、平瓶、甕、広口壺、杯B蓋(摘み蓋)、長頸瓶、大型甕、甕がある。7世紀後半にまじって8世紀以降の資料が出土している。

表2 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代	
				暦年代校正値	1 σ 暦年代範囲
PLD-2462 (AMS)	木片 (ナナカマド属) 82 (枕)	-28.8	1,585 ± 25	cal AD 435	cal AD 430 - 440 (14.3%) cal AD 450 - 465 (24.2%) cal AD 485 - 530 (61.4%)
PLD-2463 (AMS)	木片 (ヒノキ) 100 (建築材)	-25.9	1,515 ± 25	cal AD 545 cal AD 550 cal AD 555	cal AD 540 - 600 (100%)
PLD-2464 (AMS)	木片 (アカガシ亜属) 30 (ナズビ形曲柄平瓶)	-27.5	1,525 ± 25	cal AD 540	cal AD 470 - 480 (10.1%) cal AD 530 - 600 (85.0%)
PLD-2465 (AMS)	木片 (エノキ属) 161 (丸太半截)	-28.3	1,395 ± 25	cal AD 655	cal AD 640 - 665 (94.6%)
PLD-2466 (AMS)	木片 (アカガシ亜属) 1 (曲柄二又瓶頸部)	-26.8	1,655 ± 25	cal AD 410	cal AD 360 - 370 (11.2%) cal AD 380 - 425 (88.8%)
PLD-2467 (AMS)	木片 (ヤナギ属) 4 (枕)	-27.1	1,655 ± 25	cal AD 410	cal AD 355 - 370 (13.9%) cal AD 380 - 425 (86.1%)
PLD-2468 (AMS)	木片 (クワ属) 71 (菅負子)	-29.2	1,405 ± 25	cal AD 650	cal AD 620 - 630 (17.3%) cal AD 640 - 660 (82.7%)

※ 実施機関：(株) バレオ・ラボ 報告者：山形秀樹

土師器には、伊勢系甕、畿内系土師皿がある。

本来の自然流路の深さがどの程度プラスされるのかわからないが、自然状態の埋没であるから上部にはさらに新しい時期の遺物が含まれていた可能性は高い。

2層(図版48) 須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯、堤瓶、甕、鉢、甕、大型甕、甕がある。甕の把手は挿入式。

265の脚部には枝重状の線刻がある。

土師器には伊勢系把手付鍋、濃尾系甕、伊勢系甕がある。把手はすべて挿入式である。7世紀後半。

遺物集積(図版93)として出土したものは、須恵器：甕1点、杯H9点、高杯2点、堤瓶1点、土師器甕2点他、である。

3層(図版51) 須恵器には、杯H蓋、杯H、無蓋高杯がある。土師器には伊勢系甕、製塩土器3類の脚部がある。7世紀後半。

00C-NR01 (図版58)

大きくは00B-NR01・02と同一流路であろうが、層位の対応関係は明確ではない。

3層 杯H、甕、甕がある。7世紀後半。

4層 杯H蓋、杯H、無蓋高杯、鉢F、鉢がある。7世紀後半。

5層 杯Hがある。7世紀後半。

C. 木製品

志賀公園遺跡からは、弥生中期後半から中世にかけての木製品が多数出土している。このうち、前回の報告書では186点を掲載し、今回の報告書では新たに140点を掲載する。今回報告分では、弥生中期後半に属する木製品はなく、また、古代の木製品も東山50～岩崎17号窯式期（前回報告分のNR07下層黒色土層に相当）に限られる。木製品が出土した調査区は00A・B・C区である。その大半は00B・C区で検出した古代の自然流路NR01（前報告書ではNR07）からの出土で、このほか、古墳中期は水田面および検出Ⅲ・トレンチで、古代は土坑・溝・検出Ⅱ、中世は井戸と土坑からの出土である。以下、前報告書にならって、まず古墳中期・古代・中世の三時期に分け、それぞれ器種ごとに記述をおこなっていくこととする。

なお、今回報告分の木製品のうち、古墳中期・古代の計7点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した（表2）。

a. 古墳中期：松戸Ⅱ～宇田Ⅰ式期（図版59・60）

00B区から8点の木製品が出土している。3・4が水田、8が南トレンチからの出土で、その他はすべて検出Ⅲである。

1は曲柄二又鍬の刃部。軸部から肩部にかけて欠損しているため、軸部の形態が伊勢湾型かナスビ形かの判別は不能である。刃部幅は上半部が広く、下端にかけてすぼまる。アカガシ亜属の柾目材をもちいる。AMS法による放射性炭素年代測定値はcal AD 410（暦年代較正值）である。2は両端に突起部をつくり出した有挾板で、全面が炭化している。残存長は30.8cmで、厚さが1.9cmあり、紡織具の腰当あるいは糸巻の可能性が高い。樹種はスギ。3・4は杭。3はST606（上層水田）出土で、アスナロの芯持材を使用。4はST702（下層水田）からの出土でヤナギ属の芯持材をもちいる。4のAMS測定値も1と同じくcal AD 410（暦年代較正值）である。5～7は板。うち、5・7は丸太を半割した材である。6は厚さ0.8cmの薄板。8は板から製品を取ったあとに残るいわゆる残材（端材）である。これらの材の存在から、古墳中期には本遺跡において、木製品の製作がおこなわれていたこ

とがわかる。樹種は5がムクノキ、6・8がヒノキで、7はヒサカキである。

b. 古代：東山50～岩崎17号窯式期

古代の木製品は162点で、うち39点は00B・C区のNR01から出土している。NR01の木製品出土層位は第2層から第6層までであるが、土器の所属時期に大きな差はないので、一括してあつかう。NR01出土土器の所属時期は東山50号窯式期から岩崎17号窯式期におよぶが、主体は東山50号窯式期で、前回報告分のNR07下層黒色土層よりはやや古くなる可能性がある。祭祀具、掘削具、農具、工具、容器、下駄、運搬具、雑具、杭、建築部材、板、棒、丸太、残材の順に記述する。

i) 祭祀具（図版61・62） 祭祀具には斎串（斎串状木製品を含む）とミニチュアの木錘（木錘形）があり、前回報告分のNR07黒色土層から多数出土した馬形は、今回の調査では1点も認められない。9～28が斎串である。斎串の形態分類は前回の報告書に準拠する（図14）。

9～11は頭部が主頭（Ⅰ型）で、10・11は側縁に切り込みをもたないⅠa類、9は両側縁にそれぞれ2ヶ所以上（左23、右24ヶ所）上からの切り込みを施すⅠc2類に属する。12～15は方形頭で幅が3cm未満のⅡa1類、16～18は方形頭で幅が3cmを超えるⅡa2類に属する。19～26は頭部を欠損する幅狭のタイプで、27・28は頭部欠損の幅広タイプ。樹種は10がモミ属で、それ以外はすべてヒノキ。29は平面形を木錘（渡辺誠氏の分類によるⅠYb型（渡辺1981））に似せてつくったミニチュアの形代で、樹種はクワ属。

ii) 掘削具（図版63・64） 30はナスビ形曲柄平鍬

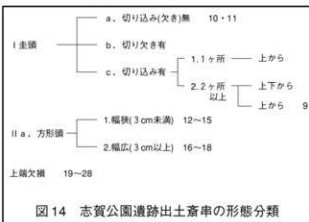


図14 志賀公園遺跡出土斎串の形態分類

で、約半分を欠損する。軸部上半には方形柄孔があり、刃部にはU字形鉄刃を装着するために段がつけられている。笠部の突起は著しく退化し、肩部はゆるやかなナデ肩を呈する。樹種はアカガシ亜属の柾目材。AMS法による暦年較正值はcal AD540である。31は一本づくりの四又鋤で、32はその刃部の破片だが、31とは別個体。前回の報告書ではこの31の身部のみが出土し、伊勢湾型曲柄四又鋤と報告した(図版205-43)が、本稿において、これも一本四又鋤と訂正しておく。樹種は31がクスギ節で、32はアカガシ亜属。

iii) 農具(図版65・66) 33は鎌柄の基部とおもわれる。樹種はクワ属。34は堅杵で、合田茂伸氏の分類(合田1988)では、握部に節帯をもたず、搦き部が円柱状をなすCⅠ類に属する。搦き部の端部は平坦で、表面粉碎機能をもつ「みかん掘り」とよばれるタイプの臼で使用されたと考えられる。樹種はクスギ節。35～37は木鉢で、35は渡辺分類のⅠYf型で、36がⅠYd型、37はⅠYb型である。樹種は35が広葉樹、36はクワ属で、37がアスナロ。38は大足(杵型田下駄)の横板で、樹種はヒノキ。

iv) 工具(図版63) 39は斧柄の未成品で、台部のみ遺存している。樹種はサカキ。40は木材を分割する際などにもちいるクサビとおもわれる。樹種はアカガシ亜属。

v) 容器(図版66～68) 43～52は円形の曲物底(蓋)板で、46のみ側板が完存している。『木器集成図録 近畿原始篇』(奈良国立文化財研究所1993)の分類によると、44・46・52は側板を目釘で留めるF類、43は側板を底板に乗せるだけのE類で、他はすべて底板の周縁部を一段薄くし、穿孔して側板を板皮で留めるD類に属する。43・44は直径が15cm未満の小型品で、他は直径15～20cmの中型品である。53～55は平面が楕円形ないしは長方形を呈する大型の曲物底板(折敷)である。うち、55は前述の分類ではD類にあたる。樹種は44がスギで、それ以外はすべてヒノキ。

41・42は2個1対で曲物の側板に巻き込んでもちいる把手である(山田1997)。両者ともに今回出土した円形の曲物用としては大きすぎることから、53～55のような大型の曲物に用いられた可能性が高い。樹種はいずれもヒノキ。

56はコップ状の刳物容器。3分の2以上を欠損しており、全体の形状は不明だが、欠損部分に直立する柄がつく縦杓子とおもわれる。樹種はケヤキをもちいる。57は方形の刳物容器(槽)の破片と考えられる。樹種はヒノキ。58はユウガオ属(ヒョウタン or ユウガオ)の破片で、容器として利用された可能性がある。

vi) 下駄(図版69・70) すべて連歯下駄で、59～66は右足用、67・68は左足用。『木器集成図録 近畿古代篇』(奈良国立文化財研究所1985)による分類では、59・67がBⅠd型式(B:前歯を左右いずれかに片寄せ、後歯を後歯の前にあけたもので、I:台の両側から少し内寄りから歯をつくり、前・後歯ともに側面からみて外開きにつくりだすもので、d:前後の端を弧形にするが、前幅より後幅をせまくするもの)、63・64・66がBⅠ型式、60・61・62がBⅡd型式(Ⅱ:台と同じ幅で、縦断面が台形ないしは方形の歯がつくもの)、69がBⅡe型式(c:平面形が小判形)、68・65がBⅡ型式となる。樹種は67のみがコウヤマキで、他はすべてヒノキ。

vii) 運搬具(図版71) 71は背負子で、『木器集成図録 近畿原始篇』によると、縦の杵木の中央から荷受けの爪木(腕木)が枝分かれする、有爪型に属する。杵木は上・下端ともに横棧を紐結合するための突起をつくりだし、爪木の中央にも横棧をホゾ結合するための穿孔をほどく。杵木の全長は45.7cmで、爪木の長さは14.5cmと、かなり小型の部類にはいる。樹種はクワ属。AMS法による暦年較正值はcal AD650である。

viii) 雑具(図版71) 72は火鑽臼。両端が欠損しており、8ヶ所の火鑽穴が認められる。樹種はヒノキ。73～77は一般に燃えさしとよばれる、一方の端が炭化している小型の棒状品で、火鑽杵の可能性が高い。樹種は74がヒノキで、他はアカマツ。

78は建築部材など別材を結合する際にもちいる栓と考えられる。加工痕を明瞭にとどめることから、未成品の可能性が高い。樹種はサカキ。79も栓状の形態のものだが、用途は不明。樹種はヒノキ。

ix) 杭(図版72～74) 80～95は杭。すべて芯持材で、樹皮を残すものも多い。このうち、80・81には上端付近に横架材と組み合わせるための挟りが

はいり、80は全長3.5cmと長く、何らかの構築物の部材である可能性が考えられる。86～95はNR01の底で確認された土坑状の落ち込みに打ち込まれており、所属時期はNR01よりも古い。樹種は80・81がサカキ、82がナシ亜科、83・86～90・94がクスギ節、85・87・91～93・95がコナラ節、84がクワ属、85がアスナロで、NR01より下の土坑出土の杭にはクスギ節・コナラ節がもちいられている。82のAMS法による暦年較正值はcal AD 435である。

x) 建築部材 (図版75) 96～102は建築部材の可能性が高い穿孔板。96・97は幅10cm前後、長さ80cm以上の板で、長辺の片側のみに一定間隔で穿孔をほどこす。96は残存する側の短辺を丸く仕上げ、97は両側の短辺にホゾをつくりだす。使用部位は不明だが、横架材としてもちいたとおもわれる。樹種は96がスギで97はヒノキ。98・99は複数の部材を結合するための留め具。樹種はいずれもヒノキ。100はヒノキの角柱の一端に貫通の方形孔を穿つ。100・102は方形の穿孔をほどこした長方形の板。十分な厚みをもつことから建築部材に分類した。樹種はいずれもヒノキ。100のAMS法による暦年較正值はcal AD 545/550/555である。107はヒノキをもちいた全長54.4cm、幅7.4cmの大型の有挟板で、片面のみ炭化する。建物の壁あるいは床材の可能性がある。

xi) 板 (図版75～79) 103～106は用途不明の穿孔板で、樹種はすべてヒノキ。108・109は有挟板でヒノキをもちいる。110・111は不整形の板で、樹種は111がヒノキ。110はヘラの未成品の可能性もある。樹種はヒノキ。112はヒノキの薄板で、四周を隅丸方形に丁寧に面取りする。113～137は特に製品ないしは何かの部材ではない、加工途中の板材で、分割したままの面を残すものや、加工痕をとどめるものが多い。樹種は113がシノキ属、114がケヤキ、115がモミ属、130がスギで、その他はすべてヒノキ。

xii) 棒 (図版80～83) 140は図面上の上端に突起を、下端付近に方形の穿孔をほどこした棒で、ヒノキの芯持材。全長は132.5cmである。138は残存長68.3cmを測るヒノキ製の有頭棒で、下端は欠損している。139は片側 (図面上の下端) に出ホゾをつくりだし、上端付近は断面を長方形に整形し、方

形の小孔をあけた棒。140と同様に、何かの部材だが、用途は不明。樹種はサカキ。141は両端に挟りをほどこした棒。142は下端をとがらせ、上端付近に横方向の溝を刻んだ棒。樹種はいずれもヒノキ。143～160は端部付近に挟りや突起をもたない棒。樹種は155がスギ、89がケヤキ、106がコウヤマキ、70がヒノキ科、159がマキ属、160がヤブツバキで、他はヒノキ。

xiii) 丸太 (図版83・84) 161はエノキ属の丸太を半截したもので、用途は不明。AMS法による暦年較正值はcal AD 655である。162はエノキ属の枝分かれ部分を残した丸太で、下端は炭化しており、本来は建物の柱であった可能性もある。163～165は直径8～9cmの丸太で、いずれも炭化した痕跡が残る。樹種は163がコナラ節、107がヒノキ、165がアスナロ。

xiv) 残材 (図版85) 166～172は原材から製品をつくりだす際にできる残材で、いずれも金属製の工具による加工痕を明瞭にとどめる。樹種は172がコウヤマキ、173がアカマツで、他はすべてヒノキである。

c. 中世 (図版85)

174～177は中世の木製品。174は両端付近に挟りをほどこした板。175・176は曲物底板で、型式は側板を底板に乗せるだけのE類に属する。177は杭。樹種は177がクスギ節で、他はヒノキ。

文献

- 渡辺 誠 1981 「もじり編み用木製鐘の考古資料について」『考古学雑誌』66-4。
合田茂伸 1988 「弥生時代の杵と臼」『網干善教先生華甲記念考古論集』。
奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』
奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』
山田昌久 1997 「考古資料の曲げ物研究を器具研究にするために」『人類誌集報1997』東京都立大学考古学報告2

第4章 自然科学分析

(1) 庄内川低地、志賀公園遺跡における堆積環境

鬼頭 剛*

はじめに

名古屋市北部、庄内川・矢田川と熱田台地との間に広がる庄内川低地にある名古屋市北区中丸町の志賀公園遺跡では、1996～1998年に行なった調査結果が既に報告されている(永井編 2001)今回、2000年に実施された調査区において地下層序を観察する機会を得た。その層序解析と放射性炭素年代測定から新たな知見が得られたので報告する。

A. 試料および分析方法

調査地周辺における現在の詳細な等高線図作成のため、財団法人名古屋市都市整備公社発行の1/5,000「用途地域指定図」にプロットされた標高値を用い、等高線図を作成した(図1)。等高線図上には服部編(1996)、川添(2000)、永井編(2001)、愛知県史編さん委員会編(2002)、伊藤(2003)を参考にして、調査地周辺の主要な縄文時代遺跡をプロットした。

志賀公園遺跡の地下層序解析のため、00A区南端において遺構検出面からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、層序断面図の作成と放射性炭素年代測定の試料を採取した。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定に有効な植物片や土壌を9試料採取した(図2)。また、庄内川沖積低地の地下層序解析のため、都市基盤整備公団と愛知県建設技術研究所から調査地周辺のボーリング・データを得た。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。分析方法は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定

された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社バレー・ラボ(Code No.: PLD)に依頼した。

B. 分析結果

a. 調査地周辺の等高線図

一般に沖積低地では、低地部の単位面積内における高度差が小さく低平なため、例えば、国土地理院発行の地形図(1/25,000や1/10,000)には低地面の等高線が描かれていない。また、調査地点である庄内川低地の場合、国土地理院発行地盤高図「濃尾平野」には沖積低地面に1mごとの等高線が描かれているものの、考古遺跡を解析するのに適当な精度とは言い難い。そのため筆者は、より詳細な等高線図を得るため財団法人名古屋市都市整備公社発行の1/5,000「用途地域指定図」を用い、等高線図を作成した(図15)。なお、等高線間隔は標高5mまでが0.5m、標高5～10mまでは1m、標高10m以上では2mである。

図15の南側にみられる標高8m以上で示される等高線間隔が狭い部分は急傾斜であり、急崖を形成する。この標高8m以上には更新統上部層である熱田層が分布し、熱田台地と呼ばれる、この台地上に長久寺遺跡や片山神社遺跡といった縄文時代遺跡が立地するのがわかる。

庄内川・矢田川と熱田台地との間にひろがる庄内川低地には、低平ながらも東西方向にのびる2つの尾根部と4つの谷部が読みとれる。尾根部は名古屋市北区山代町(標高5.0m)から志賀公園遺跡のある北区中丸町や平手町を通り、西区鳥見町(標高3.5m)までと、北区名城二丁目(標高5.0m)から西区城西四丁目を通り、西区天神山町(標高3.0m)までである。谷部は南側(熱田台地側)から北へ向かって、北区大杉一丁目(標高6.0m)から西区城西三丁目(標高3.0m)にいたる熱田台地

*当センター調査研究員



図15 調査地点位置図

黒丸●は調査地点と周辺の主な遺跡を示す。

1. 志賀公園遺跡 2. 西志賀遺跡 3. 名古屋城天守閣貝塚 4. 長久寺遺跡 5. 片山神社遺跡

等高線(m)は財団法人名古屋都市整備公社発行の「用途地域指定図(1/5000)」の標高値を基に作成。等高線間隔は標高5mまでは0.5m、標高5～10mまでは1m、標高10m以上は2m。



図16 志賀公園遺跡00A区における深掘の柱状図

矢印は放射性炭素年代測定の試料採取層準を示す。

北縁に沿うものや、北区柳原二丁目（標高5.0m）から西区上古屋二丁目（標高3.0m）までにも確認される。また、北区元志賀町（標高5.0m）から西区万代町（標高3.0m）までと、北区鳩岡町（標高5.0m）から西区新福寺町（標高3.0m）までにも確認される。志賀公園遺跡や西志賀遺跡は、名古屋市北区山代町（標高5.0m）から西区鳥見町（標高3.5m）までに認められる尾根部の上に位置することがわかる。

b. 志賀公園遺跡の深掘層序

志賀公園遺跡00A区南端においてバックホーにより地表面（標高5.50m）から深度約6.5mまでの地下層序断面を得た（図16）。下位層より、標高-1.10～-0.90mまでは細礫の混じる極粗粒砂層からなる。標高-1.10mで湧水したため、それよりも下位層は確認できなかった。標高0.90～2.60mは全体に黒褐色を呈する塊状・均質な粘土層よりなる。本粘土層最下部の標高0.90～1.10mまでには未分解の植物片が集積した部分がみられる。標高2.60～3.30mは長径10mmの中礫を含む極粗粒砂層からなり、平板状斜層理が明瞭に発達する。淘汰は悪い。下位の粘土層との境界は明瞭であり、側方へはほぼ水平に連続する。本砂層はまれに植物遺体を含む。標高3.30～4.25mは灰色や明褐色を呈する粘土層からなり、本層下部では砂粒子や中礫の含まれる層準がみられる。上部は塊状・均質である。植物の根跡などの生物活動の影響をうけており、土器片といった考古遺物の分散がみられる。標高4.25～4.29mには明褐色なシルト層からなる薄層である。標高4.29～5.50mは現代の人工的な盛り土となる。

c. 放射性炭素年代測定

深掘層序断面から計9試料の放射性炭素年代値を得た（表3）。もっとも古い値は標高0.90～2.60mでみられる黒褐色粘土層最下部の未分解植物集積層準から採取した木片（標高0.96m）で、4785、4770、4610、4595、4580 cal yrs BP(PLD-2328)を示した。もっとも若い年代値では標高3.47mの褐色粘土層から採取した植物片で1325、1310 cal yrs BP(PLD-2334)であった。

C 考察

a. 深掘層序に記録される堆積環境

深掘層序断面はその粒度組成から、標高0.90mを境として下位の粗粒堆積物と上位の細粒堆積物が卓越する層相に大きく分けられる。下位の粗粒堆積物では、標高-1.10～-0.90mに細礫の混じる極粗粒砂層が認められた。庄内川低地におけるこのような粗粒堆積物の分布について、住宅・都市整備公団が今回の調査地点と同じ名古屋市北区中丸町三丁目で実施したボーリング資料（B-1）では、標高-10.75～-3.25mに標準貫入試験のN値が20～50以上の中粒～粗粒砂を基質とする細礫～中礫層が堆積し、その上（標高-3.25～-2.55m）を細粒砂層から細礫～中礫層に示る上方粗粒化・層厚化傾向を示す粗粒堆積物がみられる。また、愛知県建設技術研究所のボーリング・データベースによると、調査地点の北側約1.3kmの名古屋市北区中切町（No.52366752002）では、標高-9.19～-3.75mのN値50以上を示す砂礫層を覆って、下位のシルト層から上位の砂礫層にいたる堆積物（標高-3.75～-1.50）がみられる。調査地点の北側約0.5kmの北区金城町（No.52366742036）でも標高-7.10～-5.80mにN値50以上の砂礫層があり、細粒砂層から砂礫層にいたる堆積物（標高-5.80～-1.45m）が覆っている。また、調査地点の南側約1kmの北区田端二丁目（No.52366732005）でも標高-7.61～-2.76mにN値40～50以上を示す砂礫層とそれを覆う細粒砂層から中粒砂層にいたる堆積物（標高-2.76～-3.14m）が認められる。

このように、庄内川低地の地下にはN値50以上の礫層と、その上を覆って上方粗粒化・層厚化傾向を示す粗粒堆積物が側方への連続性よく分布する。ところで、濃尾平野の上部更新統～完新統は上部更新統である熱田層を不整合に覆い、更新統最上部の第一礫層および濃尾層と、完新統の南陽層とに区分される（古川1972、松澤・嘉藤1954）。さらに南陽層は下位より中部粘土層、上部砂層、最上部粘土層に細分される。また、自然地理学的には完新統の最上部粘土層を沖積陸成層ともよぶ（井関1956、海津1979）。これらのうち南陽層の上部砂層は、三角州の前置層として堆

積した堆積物であり、三角州の海側への前進にもなって堆積した砂質堆積物であるとされている(井関1956, 海津1979)。先にのべたボーリング資料から、庄内川低地地下のN値50以上を示す礫層は第一礫層にあたる。その礫層を覆う粗粒堆積物は濃尾層または上部砂層にあたるが、礫層を覆う粗粒堆積物が、側方への連続性が良好で、かつ上方粗粒化・層厚化傾向を示すことから、三角州上部の三角州前置層を形成する堆積物であると推定でき、上部砂層に対比できると考えられる。三角州最上部は頂置層とよばれ、河川の流路や河口州の粗粒物、潮汐低地の砂泥物からなる。深掘層序断面でみられる標高-1.10~0.90mの細礫の混じる極粗粒砂層は、三角州頂置層を形成する河川流路や河口口の堆積物であると考えられる。この砂層の堆積年代について、極粗粒砂層を覆う直上の黒褐色粘土層が4580 cal yrs BP(PLD-2328)を示したことから、極粗粒砂層は約4600年よりも前に堆積していたことがわかる。

深掘層序断面の標高0.90~4.25mには粘土層からなる細粒堆積物が確認された。これは南陽層の最上部粘土層にあたり、その層相から氾濫原堆積物である。本層下部(標高0.96m)で4580 cal yrs BP(PLD-2328)、上部(標高3.47m)で1310 cal yrs BP(PLD-2334)の年代値が得られた。このことから、調査地点では約4500年前以降から氾濫原であったことがわかる。

標高2.60~3.30mには層厚約70cmの極粗粒砂層がみられた。明瞭な平板状斜層理が観察されることから、本砂層は河川流路のポイント・バー堆積物である。一般に、平板状斜層理の確認される砂層の層厚は河川流路の古水深にほぼ等しい。調査地点の河川流路は少なくとも70cm以上の水深であったことがわかる。砂層中の標高2.93mからは種実が採取され、その暦年代較正值は1410 cal yrs BP(PLD-2333)であった。砂層直下の粘土層(標高2.56m)は1415 cal yrs BP(PLD-2332)であり、およそ1400年前のごく短い間に砂層の埋積が進んだことがわかる。

以上の結果を模式的にまとめたものを図17に示す。志賀公園遺跡の調査地点では約4600年よりも前には三角州頂置面の河川流路、約4600年から

現在までは主に粘土粒子が堆積する氾濫原であった。また、約1400年前以降のごく短時間にはポイント・バーを形成する河川が調査地点を流下していたことがわかった。また、等高線図の読図により、現在の庄内川低地には、詳細な時代は不明であるものの、庄内川・矢田川の主流あるいはそれらの分岐流路と考えられる複数の河川が存在が指摘される。

b. 庄内川低地における堆積速度

志賀公園遺跡における深掘層序断面の層序解析の結果から、三角州頂置面の河川流路から氾濫原へといたる堆積環境の変化がとらえられた。ここでは調査地点での堆積速度について検討を加える。暦年代較正值を横軸に、標高を縦軸にとり、年代値と年代測定した試料の採取標高をプロットした(図18)。プロットした値を滑らかな曲線で結んだものは堆積曲線とよばれる(Masuda and Ito1999, 増田2000)。なお、堆積曲線を描くにあたり1σで示される暦年代較正值が複数算出される場合には、もっとも若い値をプロットした。また、圧密は考慮していない。

深掘層序断面の堆積曲線を概観すると、上位層の標高3.91mの2125 cal yrs BP(PLD-2335)、標高4.18mの1535 cal yrs BP(PLD-2336)の年代値は、明らかに堆積曲線からはずれてプロットされる。これらは二次的に堆積した試料であるといえる。

堆積物の上方への累積変化量を $\Delta h(\text{mm})$ 、時間変化量を $\Delta t(\text{year})$ とすると堆積速度は $\Delta h / \Delta t (\text{mm/y})$ で求められる。深掘層序断面最下位層の標高-1.10~0.90mの極粗粒砂層からは年代測定に有効な試料が得られなかったため、具体的な堆積速度は求められない。しかし、礫の混じる極粗粒砂であることから水理学的なエネルギーは高く、堆積速度は速かったと予想される。この極粗粒砂層の上に氾濫原堆積物の粘土層が堆積する。極粗粒砂層直上の粘土層下部(標高0.96~1.72m)では1.2mm/yであるが、中部(標高1.72~1.92m)では0.2mm/y、標高1.92~2.26mでも0.2mm/yと、調査地点ではもっとも遅い値となる。堆積速度がもっとも遅くなる層準では考古学的に水田跡(標高2.0m付近)が推定されるとともに、弥生時代中

表3 志賀公園遺跡 00A区深掘の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年代較正値 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP)	Code No.
0.96	木分解植物片集積層	木片(枝)	4130 \pm 35	-28.6	4785, 4770, 4610, 4595, 4580	4645-4570(53.3%)	PLD-2328(AMS)
1.72	黒褐色粘土層	土壌	3660 \pm 35	-19.6	3980, 3935	4080-4030(40.5%)	PLD-2329(AMS)
1.92	黒褐色粘土層	土壌	2830 \pm 30	-20.6	2945, 2935, 2925	2955-2915(52.1%)	PLD-2330(AMS)
2.26	黒褐色粘土層	炭化物	1640 \pm 30	-24.8	1530	1570-1515(82.3%)	PLD-2331(AMS)
2.56	木分解植物片集積層	葉	1545 \pm 30	-27.4	1415	1490-1430(56.2%)	PLD-2332(AMS)
2.93	細粒泥じり極粗粒砂層	種子 (アキガシ亜属穀斗)	1535 \pm 30	-26.3	1410	1420-1355(64.7%)	PLD-2333(AMS)
3.47	褐色腐植泥じり粘土層	植物片 (種子類の葉)	1435 \pm 30	-26.9	1325, 1310	1345-1305(100%)	PLD-2334(AMS)
3.91	灰褐色粘土層	土壌	2145 \pm 30	-25.9	2145, 2140, 2125	2150-2100(62.2%)	PLD-2335(AMS)
4.18	赤褐色粘土層	土壌	1650 \pm 30	-24.2	1535	1570-1520(88.8%)	PLD-2336(AMS)

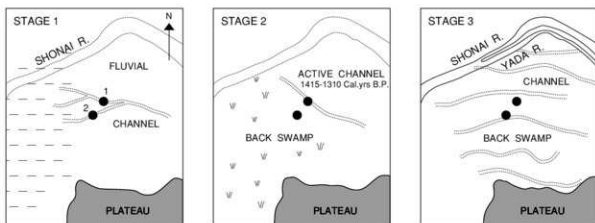


図17 志賀公園遺跡 00A区深掘結果を基にした古環境変遷模式図

黒丸●は遺跡を示す。1. 志賀公園遺跡, 2. 西志賀遺跡

STAGE1は約4600年前以前(破線は海～汽水域)、STAGE2は約4000～1300年前、STAGE3は近・現代(推定される河道跡: 年代は不明)。

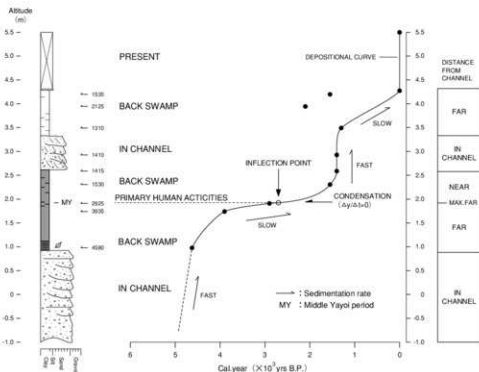


図18 志賀公園遺跡 00A区深掘における堆積環境と堆積曲線

期の土器片が10点ほど出土している(木川 2001)。また、その層準よりも下位層からは考古遺物がまったく確認されなかった。調査地点における初源的な人為活動は相対年代の弥生時代中期頃であり、それは標高2.0mに記録されていることになる。初源的な人為活動を記録する層準と、堆積曲線で示される堆積速度のことも遅くなる層準とが明瞭な対応関係を示すことがわかる。ところで、堆積速度と化石密集層の関係について、堆積速度が大きければ化石は希釈され、小さければ濃縮が生じる(Kidwell 1986・1991, Kidwell and Bosence 1991)。堆積速度と化石密集層とは逆相関の関係になる。志賀公園遺跡では土器片が出土する層準と堆積速度がもっとも遅くなる層準とが一致することから、本層準において考古遺物の濃集が生じたことがわかる。また、人為活動が行なわれた証拠から、本層準では離水しており、堆積物の供給が一時的に休止したことを示す。すなわち、堆積速度($\Delta h/\Delta t$)が0であったことがわかる。いっぽう、堆積速度の遅い層準よりも上位の標高2.26~2.56mの粘土層では2.6mm/yと速くなることから、標高2.0mを境にして速度変化が生じており、変曲点が存在するといえる。

標高2.56~2.93mにおける極粗粒砂層の堆積速度は74mm/yを示した。増田(2000)は日本における河川堆積システムの累積速度についてまとめ、河川流路堆積物の堆積速度は5~10mm/yの値をとるとした。今回得られた74mm/yという値は、それと比較して7倍ほど大きく、たいへん速いことがわかる。庄内川は名古屋市内を流れる河川の中でも堆積物供給量の多い河川として知られ、例えば、1787年(天明7年)には頻発する洪水を軽減させるため、庄内川の西側に新川を掘削している(井関1994、大平1998)。このような堆積物供給量が多い原因について、自然地理学者の井関(1994)は人為的要因をもとに説明した。それは、庄内川上流域の三河山地は窯業地帯であり、薪材として森林が伐採されたことにより、山地から大量の土砂が庄内川に供給されたとするものである。極粗粒砂層中の年代値(標高2.93m)は1410 cal yrs BP (PLD-2333)を示した。庄内川・矢田川の上流には窯業生産を示す古窯跡が群をなし、7世紀後半こ

ろからの美濃窯、5世紀前半から14世紀ころまでの猿投窯、11世紀初頭からの瀬戸窯が知られている(加藤1992)。得られた放射性炭素年代値は考古学的に提示される窯業生産遺跡の相対年代と対応している。今後、庄内川低地域での調査が増加すれば、さらに確かな証拠として提示できよう。

標高2.56~2.93mの極粗粒砂層の堆積以降、その上位には細粒堆積物が累積するが、標高3.47~2.93mで5.4mm/y、ほぼ現代(標高3.47~4.29m)までで0.6mm/yとゆっくりした堆積へと変化する。以上のように、調査地点の堆積速度は、下位層から標高2.0m付近にかけて徐々に遅くなり、標高2.0~3.5mにかけて速く、標高3.5~4.5mにかけて再び遅くなった。このような堆積(累積)パターンが生じる原因のひとつとして、庄内川低地を流下する活動的流路が蛇行あるいは転位する際の、流路の側方移動と流路からの距離との関係によって説明できる(図18)。

庄内川低地は名古屋市という大都市圏をつくる低地として重要であるにも関わらず、完新統上部に関しては地質学的、自然地理学のおよび考古学的にも極めてデータが少ない。今後、新たな調査地点の増加に期待したい。

謝辞

本論を作成するにあたり、放射性炭素年代測定では株式会社バレー・ラボ東海支店の山形秀樹氏にお世話になった。愛知県建設技術研究所の滝本守氏、都市基盤整備公団の由見慎一氏には名古屋市北区地域のボーリング・データを供与していただいた。愛知県立明和高等学校の森 勇一氏と愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の石黒立人氏には分析結果に対するご助言・ご批判を賜った。図面の整理では愛知県埋蔵文化財センター元研究補助員の尾崎和美氏・上田恭子氏、トレース作業では研究補助員の山口典子氏、試料の整理・保管では元整理補助員の服部恵子氏・宇佐美美幸氏・山口きみ代氏、整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- 愛知県史編さん委員会編 2002『愛知県史 資料編 1 旧石器・縄文』考古1、愛知県、p 818。
- 古川博恭 1972「濃尾平野の沖積層」『濃尾平野の研究 その1 -』地質学論集、7、p 39-59。
- 服部哲也編 1996『西志賀遺跡 - 発掘調査の概要』名古屋市教育委員会、p29。
- 井関弘太郎 1956「日本周辺の陸棚と沖積統基底面との関係について」『名古屋大学文学部研究論集』14、p85-102。
- 井関弘太郎 1994「新川の役割・凄まじかった庄内川」『東海叢書 24 車窓の風景科学』- 名鉄名古屋本線編、名古屋鉄道株式会社、p 50-58。
- 伊藤正人 2003「縄文時代の名古屋 - 地形変遷と遺跡立地」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』5、p1-16。
- 加藤安信 1992「a 古窯跡」『東海の自然史』財団法人東海財団、p348-357。
- 川添和暁 2000「愛知県の縄文遺跡（1）一尾張北部地域について」『研究紀要』第1号、愛知県埋蔵文化財センター、p1-8。
- Kidwell, S. M., 1986, Models for fossil concentrations: paleobiologic implications, *Paleobiology*, 12, 6-24.
- Kidwell, S. M., 1991, The stratigraphy of shell concentrations, In Allison, P. A. and Briggs, D. E. G., eds., *Taphonomy. Releasing the data locked in the fossil record*, Plenum Press, New York, 211-290.
- Kidwell, S. M. and Bosence, D. W. J., 1991, Taphonomy and time-averaging of marine shelly faunas, In Allison, P. A. and Briggs, D. E. G., *Taphonomy. Releasing the data locked in the fossil record*, Plenum Press, New York, 151-209.
- 木川正夫 2001「志賀公園遺跡」『平成12年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター、p8-9。
- 松澤 勲・嘉藤良次郎 1954『名護屋付近の地質』同地質図、愛知県、p35。
- Masuda, F. and Ito, M., 1999, Contributions to sequence stratigraphy from the Quaternary studies in Japan, *The Quat. Res. (Daiyonki-Kenkyu)*, 38, 3, 184-193.
- 増田富士雄 2000「堆積曲線から求める堆積年代と累重速度」『月刊 地球』22、3、p191-197。
- 永井宏幸編 2001『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第90集 志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、p182。
- 大平明夫 1998「1 沖積低地の地形環境」『新修名古屋市史』新修名古屋市史編集委員会編、8、p20-30。
- 海津正倫 1979「更新世末期以降における沖積低地の古地理」『地理評論』52、p199-208。

(2) 志賀公園遺跡より出土した自然遺物

堀木真美子*・上田恭子**・森 勇一**

はじめに

名古屋市北区に位置する志賀公園遺跡は、弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である。弥生時代中期の頃は主に水田跡が検出され、古墳時代中期では水田跡の検出に加え木製鍾が出土している。飛鳥時代から古代にかけては溝や堅穴住居跡が検出されている。中世になると、井戸や櫓列、火葬施設等が検出されている。

今回分析を行った試料は、00B 区 の自然流路 NR01 および 00B 区 SX01、SD02、SE01 などの遺構から出土した自然遺物である。遺物の種類は、種子類、貝類、骨類である。今回同定作業を進める過程において、ハマグリと殻と殻の間に固結した状態で砂質堆積物が残存しているのを確認した。そこでこの砂質堆積物より珪藻化石を抽出し、貝類が人為的に破壊されたものか、出土地点で生息していたものなのかの推測を試みた。

A. 種子類

a. 試料

種子類が出土した地点は、00B 区 および 00C 区 にまたがって検出された自然流路 NR01 の第 2 層、第 3 層、第 5 層、00B 区 NR03、00B 区 T-03 である。

同定結果を表 4 に示す。また同定された種類毎にまとめたものを表 5 に示す。

・エゴノキ属 *Styrax* 核

長径 6～10mm、短径約 7mm、厚さ約 5mm の卵状をなす。長軸方向に 1～3 条の溝が確認できる。基部は切断され楕円に近い平面形を呈する。

・オニバス *Euryale ferox* Salisb. 果実

長径 4～8mm 程度の球形。表面に模様はなくなめらかである。1mm 程度の口状の穴があり、その隣に長径 1mm、短径 0.5mm 程度の楕円のくぼみを有する。

・クマヤナギ属 *Berchemia* 核

長径 4～5mm、短径 3mm、厚さ 1mm 程度の一

端がく字状に欠けた角丸の長方形をなす。長軸方向に 1 本の条溝がある。

・スギ (*Clyptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don もしくはヒノキ科 CHAMAECYPARICEAE 毬果

長さ 10mm、幅 13mm、厚さ 7mm 程度の扇状をなす。スギもしくはヒノキ科の毬果の一部と思われる。果鱗の一部が残存。

・ヒョウタン *Lagenaria leucantha* Rosby. var. *gourda* Makino 種子

長径 15mm、短径 6mm、厚さ 1～2mm。辺部に 2 本の黒色の線がある。基部の両端に 2 つの凸部がある。

・ブドウ属 *Vitis* 種子

長径 5mm、短径 3mm、厚さ 1～2mm。水滴状をなす。

・マツ属 *Pinus* 毬果

長径 35mm、短径 23mm、厚さ 15mm。一部破損している。鱗片の先端部は菱形をなす。

・モモ *Prunus persica* (Linn.) Batsch. 核

長径 20～30mm、幅 15～20mm、厚さ 18mm 程度。表面の溝が連続するものが多く、モモと同定した。一部破損しているものもある。

b. 考察

エゴノキ属が 509 点と最も多く、NR01 第 3 層にまとまって出土している。これら多量のエゴノキ属の種子の中には、果皮の一部と思われる薄膜状のものをつけたものも数点確認された。現在、植樹されたエゴノキの樹下を観察すると種子を見つけることができるが、その場合、薄膜状のものを残存している個体を見つけることはない。つまり、今回出土したエゴノキ属の種子で果皮と思われる薄膜状のものを残すものは、水中に落下しそのまま堆積層中に取り込まれたのではないと思われる。

また NR01 第 3 層については、オニバスが 23 点とエゴノキに次いで多く、ほかにクマヤナギ属、モモ等となっている。オニバスが水生植物であることから、NR01 の第 3 層が堆積する頃には淀んだ水が存在していた可能性が考えられる。

エゴノキ属については、大量に出土していることから、果実に含まれるサポニンを利用した漁

* 当センター調査研究員

** 愛知県立明和高校

表4 出土地点ごとの種子類一覧

和名	学名	NR01			NR03	T-03	合 計
		第2層	第3層	第5層			
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	3 (1)	506(8)				509 (9)
オニバス	<i>Euryale ferox</i> Salisb.		23				23
クマヤナギ属	<i>Berchemia</i>		2				2
スギもしくはヒノキ科 (種属)	<i>Cyrtomeria japonica</i> (Linn. fil.) D.Don or <i>Chamaecypariceae</i>						1
ショウタン	<i>Lagerflora leucantha</i> Rosby. var. <i>gouda</i> Makino		1				1
ブドウ属	<i>Vitis</i>		1				1
マツ属 (種属)	<i>Pinus</i>		1		1		2
モモ	<i>Prunus persica</i> (Linn.) Batsch.		3(2)	4		1(1)	8 (3)
		3(1)	538(10)	4	1	1(1)	547 (12)

撈の可能性も考えられる。が、単に NR01 の周辺 (上流部もふくむ) にエゴノキ属が生えていた可能性も否定できない。

B. 骨

a. 試料

00B 区 NR01 第5層より魚骨が2点出土している。

00A 区南トレンチ、SD10、00B 区 SX01 から不明骨片が多数出土している。白色化して表面にひび割れていることなどから火葬骨と考えられる。種類については、大きさや形状からヒトの可能性がある。

00A 区 SE01、SD02 からは大型の草食獣の臼歯の破片が出土している。破損がひどく種の同定はできなかった。

C. 貝類

a. 試料

00B 区 NR01 第5層の同一地点から、7種の貝類が出土している。マガキ、ハマグリ、ヤマトシジミ、オキシジミ、ウミナナ、不明二枚貝、不明巻貝である。

・マガキ *Crassostrea gigas* THUNBERG

40mm 程度の破片。波状の形状からマガキとする。生息域は内湾で鹹度の低い浅海帯の岩礁底。

・ハマグリ *Meretrix luxoria* [RODING]

殻頂部が残存するもので、右殻19個、左殻18個を確認。

殻長は30～55mm。生息域は、淡水が流れ込む内湾の潮間帯から上部浅海帯の砂底。

・ヤマトシジミ *Corbicula japonica* PRIME

殻頂部が残存するもので、右殻47個、左殻47個。

殻長は20～30mm。生息域は汽水域の砂泥底。

・オキシジミ *Cylinia orientalis* SOWERBY

35mm程度の円形をなす。右殻のみ2点確認。生息域は内湾や内湾奥部の浅海帯もしくは潮間帯の泥底。

・ウミナナ *Batillaria multiformis* (LISCHKE)

殻高35mm程度。殻口部が残存する個数は27。頂部のみの個体も1点確認された。生息域は海岸および河口の泥底。

・不明二枚貝

黒色の表面部分が30～50mm程度の破片として残存。

・不明巻貝

頂部のみ残存。

b. 考察

今回出土した貝類について、その生息域を見てみると内湾から浅海帯の砂底に棲息するハマグリやオキシジミ、河口部から潮間帯に棲息するウミナナやマガキ、淡水から汽水域に棲息するヤマトシジミと多種多様な生息域であることがわかる。またその生息域が多種類であることから、貝類すべてが人為的に遺跡内に持ち込まれたものと考えられがちである。

ここで、貝類が出土した志賀公園遺跡00B区および00C区にまたがる自然流路NR01の環境について考察してみる。貝類が包含されていたNR01第5層の標高を見てみると、堆積物の上面で標高4.2m、底部で3.5mである。7C後半の海水面が現在のものより2m程度高いと仮定しても、試料を採取した自然流路内に淡水もしくは汽水が存在した可能性が考えられる。この場合、ハマグリやオキシジミ、マガキ、ウミナナはこの地点で棲息していた可能性は考えられないことから、確実に人

為的な行為の結果といえる。

しかし、自然流路内に淡水もしくは汽水が存在していたと仮定するならば、ヤマトシジミは同地点で棲息していたと思われる。また今回の試料において、ヤマトシジミの左右の殻数が同数であることから、試料採取地点周辺で棲息していたものが偶然、人為的な貝類とともに取り上げられた可能性が考えられる。

そこで今回ハマグリ（の殻の間に）に残存していた堆積物より珪藻化石を抽出し、貝類が堆積した当時の環境の復元を試みた。

D. 珪藻分析

a. 分析方法

自然流路 NR01（第5層）において見つかった

ハマグリ *Meretrix lusoria*（殻長55mm）の左殻2枚の間に残存した試料について珪藻分析を行った。

分析方法は森（2000）にしたがって実施した。その概略は以下のとおりである。

- ① 採取した試料 1g をトルビーカーにとり、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸する。
- ② 岩片除去の後、水洗を4～5回繰り返しながら、遠心分離を行う。
- ③ 分離した試料を希釈し、カバーガラスに滴下し、ホットプレート上で乾燥させる。
- ④ 封入剤をスライドガラス上にのせ、③のカバーガラスをかぶせる。
- ⑤ アルコールランプで焼き付ける。

検鏡は、1,000 倍の光学顕微鏡を用いて行った。

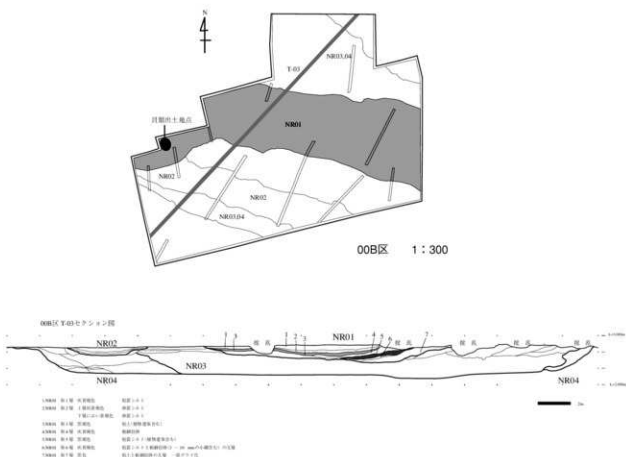


図 19 志賀公園遺跡 00B 区 T-03 セクション図

通常、検鏡は1プレパラートにつき200個体になるまで計数を行うが、今回は珪藻殻の破片が多数であったため、その中で同定可能な珪藻について述べる。

検出された珪藻は *Thalassionema nitzschioides* と *Denticulopsis lauta* の両分類群が過半を占め、その他 *Achnanthes hauxiana*、*Fragilaria ulna*、*Rhaphoneis surirella*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula tokyoensis*、*Coscinodiscus* sp.、*Cyclotella* sp.、*Thalassiosira* sp. などであった。

b. 考察

今回の分析結果より、以下の2点について検討を試みた。

- ・試料中の珪藻化石の示す時代がハマグリと生息時期と直接符合するものであるか否か。
- ・試料中に含まれる珪藻殻の生息環境が、ハマグリと示す生態と一致するものであるか否か。

まず、時代について検討する。本試料からは殻長や殻壁、表面の条線などの観察結果から *D. lauta* に同定される珪藻類が多数検出された。*D. lauta* は、新生代第三紀の中期中新世～後期中新世を示す標準化石である（小泉 1976）。なお、本種の生息は、塩分濃度の高い海域を指標する浮遊性珪藻であり、また本分類群は新生代第三紀中新世の堆積物を特徴づける二次化石（金谷 1970）としても知られている。ハマグリを採取した自然流路 NR01（第5層）の示す時代は7C後半であるため、*D. lauta* を含む堆積物は、何らかの理由で再堆積したものであると考えられる。*D. lauta* は岐阜県南東部の瑞浪市および多治見市周辺に分布する瑞浪層群に多く含まれている（森 2000）。志賀公園遺跡の北部には、庄内川および矢田川があり、古墳時代においても、多くの堆積物をもたらしていたものと考えられる。現在、庄内川は岐阜県恵那市の夕立山を源流とし、瑞浪層群が広く分布する地域を削剥する。一方、矢田川は猿投山北部を源流とし、主に東海層群の分布域を流れている。分析試料中に *D. lauta* が含まれていたことから、今回の試料は、矢田川よりも庄内川の影響を強く受けていたと思われる。

次に環境について述べる。*T. nitzschioides* は、

外洋～内湾において浮遊生活を営む珪藻であることが知られている（小杉 1988）。一方、この試料を含むハマグリは、内湾の底泥を生活圏とする二枚貝である（吉良 1989）。このため、ハマグリとその殻中に残存した分析試料との間には生活圏に差異が認められる。

珪藻化石の検鏡結果は、前述のとおり、ハマグリとの相関性に乏しい *D. lauta* と *T. nitzschioides* が多くを占めた。また、検出された珪藻化石は破片が多く、完形で検出された珪藻化石は、殻が丈夫であるため残存した *D. lauta* のみであったと考えてよい。ハマグリと生息環境と同様の環境を示す珪藻が本試料中に存在しなかったことから、ハマグリは現地性のものではなく、人の手を介するなど、なんらかの方法で運ばれたものであることが推測される。

以上により、本試料は時代および生息環境双方において、ハマグリと直接相関を示すものではないと考える。

E. まとめ

今回、志賀公園遺跡 00B 区および 00C 区より出土した種子類、骨類、貝類の同定を行った。

その結果、NR01 第3層からは、果皮と思われる薄膜状のものをつけたままのエゴノキ属の核が多量に出土するとともに、水生植物のオニバスの果実も出土した。このことから第3層が堆積する頃には、NR01 内には停水域があったと推定した。

また NR01 の第5層においては、ハマグリやオキシジミ、ウミナ、ヤマトシジミなど多様な生息域を示す貝類が同一地点より出土した。この貝類のうちハマグリと生息域の間に残存していた堆積物を用いて、珪藻分析を行った。その結果、堆積物中には *D. lauta* という新生代第三紀中新世の堆積層に含まれる珪藻化石や *T. nitzschioides* など外洋～内湾において浮遊生活を営む珪藻の破片ばかりが多く含まれていた。このことから、貝類が含まれていた自然流路 NR01 第5層は明らかに二次堆積物であると判断された。もしも、ヤマトシジミなどが生息できるような環境であったと仮定するならば、珪藻分析においてそれらの水域を示す珪藻化石が多量に検出されるべきである。しか

表5 志賀公園遺跡自然遺物一覧

種子	調査区	グリッド	遺構番号	層序	種名	個数(破片)
Xp-01	00B2	VIC3h	T-03		モモ	1 (1)
Xp-02	00B2	VIC5f	NR03		マツ属(球果)	1
Xp-03	00C2	VIC3a	NR01	第2層	エゴノキ属	3 (1)
Xp-04	00B2	VIC3j	NR01	第5層	モモ	1
Xp-05	00B2	VIC3h	NR01	第5層	モモ	1
Xp-06	00B2	VIC3i	NR01	第5層	モモ	2
Xp-07	00B2	VIC5k	NR01	第3層	モモ	1
Xp-08	00B2	VIC4i	NR01	第3層	モモ	1
Xp-09	00C2	VIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	3
Xp-10	00C2	VIC3b	NR01	第3層	エゴノキ属	13
Xp-11	00C2	VIC3b	NR01	第3層	エゴノキ属	9
Xp-12	00C2	VIC3b	NR01	第3層	オニバス	10
Xp-13	00C2	VIC3b	NR01	第3層	木片	1
Xp-14	00C2	VIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	17
Xp-15	00C2	VIC3c	NR01	第3層	オニバス	1
Xp-16	00C2	VIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	1
Xp-17	00C2	VIC3b	NR01	第3層	エゴノキ属	27
Xp-18	00C2	VIC3b	NR01	第3層	オニバス	5
Xp-19	00C2	VIC3b	NR01	第3層	オニバス	2
Xp-20	00C2	VIC3b	NR01	第3層	不明	1
Xp-21	00C2	VIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	12
Xp-22	00C2	VIC3c	NR01	第3層	オニバス	1
Xp-23	00C2	VIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	337 (7)
Xp-24	00C2	VIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	10
Xp-25	00C2	VIC3c	NR01	第3層	オニバス	3
Xp-26	00C2	VIC3c	NR01	第3層	不明	1
Xp-27	00C2	VIC3c	NR01	第3層	木片	-
Xp-28	00C2	VIC3c	NR01	第3層	クマヤナギ属	2
Xp-29	00C2	VIC3c	NR01	第3層	ブドウ属	-
Xp-30	00C2	VIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	67 (1)
Xp-31	00C2	VIC3c	NR01	第3層	モモ	(1)
Xp-32	00C2	VIC3c	NR01	第3層	ヒョウタン	1
Xp-33	00C2	VIC3c	NR01	第3層	木片等	-
Xp-34	00C2	VIC3c	NR01	第3層	エゴノキ属	10
Xp-35	00C2	VIC3c	NR01	第3層	オニバス	1
Xp-36	00C2	VIC3c	NR01	第3層	スギもしくはヒノキ科(球果)	1
Xp-37	00C2	VIC3c	NR01	第3層	マツ属(球果)	1
Xp-38	00C2	VIC3c	NR01	第3層	モモ	1

表6 骨一覧

調査区	グリッド	遺構番号	層序	種名	個数
Xb-01	00B2	VIC4e	NR01	第5層 魚骨	2
Xb-02	00A	VIC1f	南トレンチ	不明骨片	
Xb-03	00A	VIC15j	SD10	不明骨片	
Xb-04	00B	VIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-05	00B	VIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-06	00B	VIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-07	00B	VIC2i	SX01	第3層 不明骨片	
Xb-08	00B	VIC2i	SX01	第3層 不明骨片	
Xb-09	00B	VIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-10	00B	VIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-11	00B	VIC2i	SX01	不明骨片	
Xb-12	00B	VIC2i	SX01	第3層 不明骨片	
Xb-13	00B	VIC2i	SX01	第3層 不明骨片	
Xb-14	00A	VIC20i	SE01	不明鹿骨(歯)	
Xb-15	00A	VIC20j	SD02	不明鹿骨(歯)	

表7 貝類一覧

調査区	グリッド	遺構番号	層序	種名	左右	個数
Xs-01	00B2	VIC4e	NR01	第5層 不明二枚貝	不明	1
Xs-02	00B2	VIC4e	NR01	第5層 カキ	不明	1
Xs-03	00B2	VIC4e	NR01	第5層 オキナギミ	右	2
Xs-04	00B2	VIC4e	NR01	第5層 ウミエナ	破片(口数)	26 (27)
Xs-05	00B2	VIC4e	NR01	第5層 不明有貝	螺部	1
Xs-06	00B2	VIC4e	NR01	第5層 シジミ	右	47
Xs-07	00B2	VIC4e	NR01	第5層 シジミ	左	47
Xs-08	00B2	VIC4e	NR01	第5層 ハマグリ	右	19

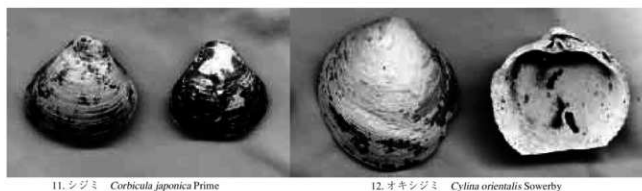
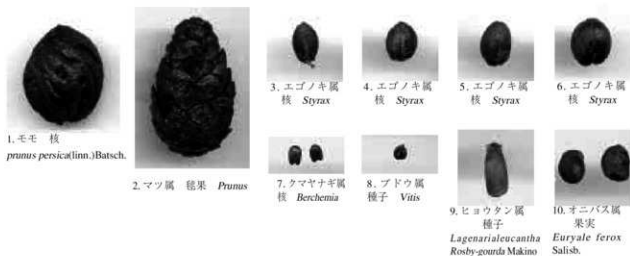
し、今回の試料においては、このような仮定を裏付けるものは検出されなかったことから、出土したヤマトシジミなどの貝類は、人為的な行為によって同地点にもたらされたものであると推測された。

これまで、偶発的に採取された自然遺物は古環境を示す材料にはならないと考えてきたが、条件によっては古環境を復元するのに役立つ情報を引き出せることが判明した。今後、自然遺物の取り扱い方を見直していくきっかけにしていきたい。

文献

- 磯貝文男・柴田松太郎・真野勝友編 1993 『地学ハンドブックシリーズ7 貝化石のしらべかた』地学団体研究会、p146。
- 金谷太郎 1970 『秋田県男鹿半島の中新世珪藻化石1（女川層下部）』日本化石集第10集、築地書館、p10-60。
- 吉良哲男 1989 『原色日本貝類図鑑』保育社、240pp
- 小杉正人 1998 『珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用』第四紀研究vol.27、p1-20。
- 小泉 格 1976 『8.珪藻』『微古生物学』朝倉書店、p138-221。
- 森 忍 2000 『第3章 珪藻』『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社、p43-77。
- 森 勇一 2000 『第3章 珪藻』『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社、p43-77。

図20 志賀公園遺跡出土の種子類・貝類



(3) 志賀公園遺跡産出の貝類化石

松岡敬二*

名古屋市北区中丸町二丁目の志賀公園遺跡から産出した貝類化石を報告する。貝類化石は、2000年度調査区C区の南壁面から2001年3月12日に採集されたものである。産出層準は、遺跡南壁面に露出する最下位層の22層で、オリブ黒色粘土質シルト層である。採集された標本は、一括して「Ⅱ KS00C、P-2、1層、010312」のラベルがつけられ、19個のプラスチック容器にエタノールを含む脱脂綿に挟んで保管されている。1個の容器には、1から数個体を含んでいる。採集された貝類化石は、全体的に保存が悪く、殻皮の一部残ったものや殻の一部が残ったものである。貝類化石を含む22層はオリブ黒色粘土質シルト層とされているが、化石の周囲の堆積物は砂質部分もありやや粗粒である。

貝類化石のうち、属まで決定できたのがシジミ属の化石だけである。シジミ属の1種 *Corbicula* sp. は、黒色の殻皮だけが残るものと、黒色の殻皮と石灰質の殻が酸化鉄に置換したものがある。殻皮に輪肋は認められる。しかし、鋸歯部が破損しており、種の同定には至らなかった。その他に数種の貝殻片は、殻質の状態から海産種のものであると考えられる。これらは、石灰質の殻が酸化鉄に置換しているが、いずれも断片的なものと、殻の表面著しく溶融しており、同定に耐えるものはなかった。

貝類化石の産出状況や保存状態から、現地性のもとは含まれていないと判断した。一番保存状態のよかったシジミ属の1種でも、合弁のものはなく、片殻のものも完全に外形をとどめていなかった。海産種の貝殻片は、断片的かつ強く磨耗ないし溶融していることから、貝の死後かなり水流により運ばれたり、堆積の前に殻の溶けやすい環境下にさらされていた可能性が高い。

貝類化石の産出した22層は、考古学的所見に基づくと、河道跡の堆積物と解釈されている(木川2001)。貝類化石の産状からは、河道にすんでいたものではないことを示している。貝類化石の産

出した地層の標高が2.74～3.03mであることから、当時の志賀公園遺跡の場所は、海に近く、海水の影響を受けやすい場所であったことがうかがえる。仮にそうであれば、潮の干満、高波などにより海産種の遺骸が、遺跡のある場所まで河道を伝わって運ばれ、再堆積することも十分に可能である。

文献

木川正夫 2001「志賀公園遺跡」『平成12年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター、p8-9。

謝辞

本報告を書くにあたり、試料の提供と執筆の機会を与えていただいた愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭剛氏、愛知県明和高等学校の森勇一博士に感謝申し上げます。

* 豊橋市自然史博物館

(4) 箱状遺物の材質分析

佐藤昌憲*

箱状遺物を光学顕微鏡で観察したところ、滑らかな表面層が観察されたので約1mg以下の微量試料を採取し顕微赤外分析 (FT-IR) 法で材質を調査した。試料は金属台上でプレスして薄層とし、そのまま装置に取り付け透過法で赤外スペクトルを測定した。図の縦軸は透過率 (%) であり、物質が特定の赤外光を吸収するとスペクトル (曲線) は下に下がり、下に凸状のピークになる。横軸は波数 (単位は cm^{-1} (カイザーと呼ぶ)) で赤外エネルギーに比例し、左方向ほどエネルギーは大きい。スペクトルのパターンは各物質に固有であるため材質の同定ができる。図21の(1)は試料のスペクトル、(2)は現代産の漆のスペクトルである。比較すると漆の特性的な吸収ピーク (約3000 カイザーより少し下の鋭い2本の吸収、約

1700 カイザーの強い吸収、約1400 カイザーの吸収、約1100カイザーの吸収など)は良く一致しており試料は漆であると言える。試料は明るい色調であり、漆層に無機顔料などが含まれている可能性はあるが明確な赤外吸収は見られない。しかし試料スペクトルの約1000 カイザー以下の領域にある数本の小さい鋭い吸収は無機顔料に由来する可能性はある。無機顔料の同定には他の方法による調査が必要である。漆の下層 (母体) の材質は、漆の強い吸収に隠されているのでわからない。恐らく植物性物質と考えられるがこれも他の分析方法による調査が必要である。

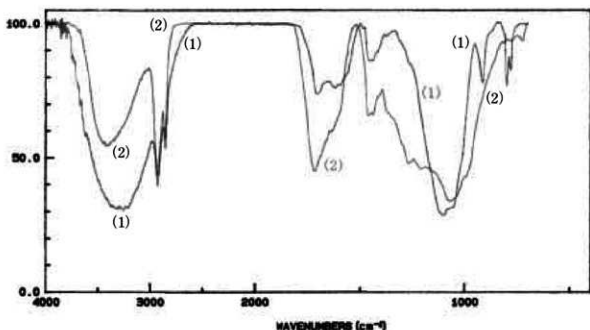


図21 志賀公園遺跡箱状製品のFT-IR分析結果

*奈良文化財研究所／客員

(5) 志賀公園遺跡出土木製品の樹種同定

植田弥生*

1. はじめに

ここでは、古墳時代(5世紀)の農具・杭・板など8点、古代(主に7世紀)の主に流路NR01から出土した農具・板・曲物・斎串・杭・下駄など160点、中世の曲物底板・杭など4点、合計177点の樹種同定結果を報告する。

前回の調査地区からも、7～8世紀の木製品が多く出土し、その樹種が報告されている(松葉2001)。今回さらに樹種同定試料数が増えた事により、当遺跡で利用されていた木製品の全体的な樹種選択性が、より明瞭となり、その特徴について若干の考察をおこなった。

2. 試料と方法

木製品から材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用いて各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロールで封入し、永久プレパラート(材組織標本)を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定結果の一覧(001～177)を、表1-1～1-3に示した(添付CDに収録)。また表8では、古代と時期区分され、主に7世紀の遺物と考えられている木製品を、器種別にその利用樹種を集計した。表9では、古墳(5世紀)と中世に関して、同様に集計した。046・050・052の木製品は、付属品がありその樹種も調べたので合計数は木製品数177点より多くなっている。

検出樹種は、マキ属・モミ属・アカマツ・コウヤマキ・スギ・ヒノキ・アスナロ・ヒノキ科の針葉樹8分類群、ヤナギ属・アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・シイノキ属・ケヤキ・エノキ属・ムクノキ・クワ属・ナシ亜科・ヤブツバキ・サカキ・ヒサカキの広葉樹13分類群、ユウガオ属の双子葉類のツル性草

本1分類群であった。

主な樹種利用傾向は、次のようであった。全体的にヒノキが圧倒的に多く検出され、斎串・板・曲物・棒・下駄など様々な製品に幅広く利用されている。ヒノキ以外の樹種が選択的に利用されていたと思われる製品もある。燃えさし(火鎖杵)は、アカマツが多い。丸棒は、ヒノキ以外にマキ属・コウヤマキ・スギなどの針葉樹材とケヤキ・ヤブツバキの広葉樹材も利用されていた。杭は、針葉樹はアスナロ1点だけであり、コナラ節・クヌギ節・サカキなど広葉樹材がほとんどであり、特にコナラ節とクヌギ節が多い。杭材のコナラ節とクヌギ節には、丸木芯持ち材で樹皮が残っているものが多く、その最終年輪は晩材で終わっている杭がほとんどで、1点だけ孔圏が1層形成されているものがあった。従ってこれらの材は、秋から早春に伐採されたことが判った。鉾・鋤・堅杵・背負子・柄などは、アカガシ亜属・クヌギ節・クワ属・サカキなどの広葉樹材が多く利用されていた。

時期による利用樹種の変化は、古代の試料数がほとんどであり、古墳時代(5世紀)と中世の試料数が少ないので断定はできないが、全期間を通じてヒノキの利用が多く、目だった変化は見られなかった。

4. 考察

様々な製品から圧倒的に多く利用されていたのは、針葉樹のヒノキであった。これは、前回の調査結果(松葉2001)とも一致し、7～8世紀の志賀公園遺跡では恒常的にヒノキの木製品が利用されていた事が確認された。

当遺跡より更に庄内川上流に位置する勝川遺跡においても、8世紀後半や9世紀後半～10世紀の木製品に占めるヒノキの割合は、非常に多い事が報告されている(樋上2002)。樋上(2003)は、勝川遺跡は立地環境からして、庄内川を通じて上流の山地からコウヤマキ・スギ・ヒノキ科の針葉樹材を入手し、遺跡が展開している鳥居松段丘上に成立していたアカガシ亜属を主体とする照葉樹林とコナラ節・クヌギ節が主体の二次林化した森林から広葉樹材を利用していたのではないかと推測している。勝川遺跡より下流に位置する当遺跡は、庄

*株式会社パレオ・ラボ

器種	針葉樹										広葉樹										合計
	マキ	モミ	アカマツ	コウヤマキ	スギ	ヒノキ	アスナロ	ヒノキ科	アカガシ亜属	コナラ	クスギ	シイノキ	ケヤキ	エノキ	クワ	ナシ亜科	ヤブツバキ	サカキ	広葉樹	ユウガオ	
板		1			1	23						1	1								27
倉庫		1				19															20
曲物底板・側板					1	13															14
曲物把手						2															2
曲物の木釘						4															4
下駄				1		11															12
角棒					1	8															9
残材			1	1		6															8
穿孔板(建築部材)					1	6															7
穿孔板						4															4
有快板						2															2
有快板(ヘラ未製品)						2															2
燃えさし(火鑽杵)			4			1															5
大足横板						1															1
穿孔有頭棒						1															1
火鑽臼						1															1
有快板(建築部材)						1															1
有快棒						1															1
有頭棒						1															1
松状						1												1			2
槽?						1														1	2
丸太						1	1			1				2							5
丸棒	1			1	1	3		1					1				1				9
杭							1			5	6				1	1		2			16
木鎌							1								1				1		3
一木四又鋤											1										1
堅杵											1										1
背負子																1					1
鎌柄?																1					1
木鎌状																1					1
クサビ										1											1
多又鋸(鋸)刃部										1											1
ナスビ形曲柄平鋸										1											1
斧柄(木)																		1			1
穿孔角棒(ボソ付き)																		1			1
縦杵子?													1								1
合計	1	2	5	3	5	113	3	1	3	6	8	1	3	2	5	1	1	5	1	1	170

表 8 志賀公園遺跡 古代の器種別の検出樹種比較

内川と矢田川の合流点より南約1kmの庄内川左岸に位置し、標高2.5m前後の沖積地に立地する。

従って当遺跡から出土した豊富な木製品を製造したヒノキ材を供給できたヒノキ林が遺跡周辺に成立していたとは考えにくく、やはり庄内川や矢田川の上流に広がる東濃地域の森林地帯から材を

供給利用していたと考えるのが妥当と思われる。東濃地域の山林はヒノキが豊富であることは良く知られているが、ヒノキ以外にも利用可能な針葉樹としてサワラ・モミ・スギ・コウヤマキも生育している。

モミやスギはヒノキより標高が低い所から生育

しており、ヒノキが尾根筋に多いのに対しスギやモミは溪谷沿いや斜面に多いので、ヒノキよりもモミやスギの方が先に伐採運搬しやすいと思われる。しかし、当遺跡や勝川遺跡からは、モミやスギの出土は非常に少ない。当時は現在の生育状況とは異なりヒノキが入手容易な立地にも豊富に生育していたか、またはヒノキ材を入手することが強く選択されていた可能性がある。現に古代においては、勝川遺跡からは律令祭祀に関する木製品が出土し勝川廃寺が造営されており、当遺跡は地方官衙的性格を帯びていたと考えられている。このような遺跡の性格から、水系上流域にヒノキの豊富な生育地があり入手可能または容易であった事と、ヒノキの材を選択的に必要とした地方都市としての樹種選択的要求があったと思われる。鈴木(2000)は、全国の古代やその前後の時期に最も多く利用されていた針葉樹材に注目し、スギ・ヒノキ・モミ・サワラのどの樹種が多く利用されていたのかにより、スギ圏・ヒノキ圏・モミ圏・サワラ圏の4つの木材利用文化圏を提唱した。勝川遺跡や当遺跡は、鈴木が提唱するサワラ圏とヒノキ圏の境界付近に位置し、データが少ないので破線で引かれた付近であり、ヒノキが多く利用されていた事が確認されたとと言える。

その一方で、杭材は主に複数の広葉樹材であり、多くは樹皮付きの丸木芯持ちである事から、遺跡周辺の、おそらく名古屋台地北端に成立していた森林から入手したと推測される。そして二次林要素であるコナラ節やクヌギ節の杭材の多くは、最終年輪部位から晩秋から早春に伐採された材が多い事が読み取れた。杭材など広葉樹材は、勝川遺跡と同様に当遺跡でも、広葉樹材は身近な森林を利用していたことを、連想させられた。

引用文献

- 松葉礼子 2001 「志賀公園遺跡出土木材の樹種同定」『志賀公園遺跡』p115-125、愛知県埋蔵文化財センター。
- 樋上 昇 2002 「樹種からみた尾張地域の木製品」『考古学フォーラム』15、p2-28、考古学フォーラム。
- 樋上 昇 2003 「春日井市勝川遺跡出土木製品の再検討」『研究紀要』第4号、p10-33、愛知県埋蔵文化財センター。
- 鈴木三男 2000 「木材」『考古学と植物学』p151-187、同成社。

	樹種	針葉樹				広葉樹				合計
		スギ	ヒノキ	アスナロ	ヤナギ属	アカガシ垂属	クヌギ節	ムクノキ	ヒサカキ	
器種										
古墳	曲柄二又鍔刀部					1				1
	有挾板(機織具?)	1								1
	杭			1	1					2
	板		1					1	1	3
	残板		1							1
中世	有挾板		1							1
	曲物底板		2							2
	杭						1			1
	合計	1	5	1	1	1	1	1	1	12

表9 志賀公園遺跡 古墳と中世の検出樹種比較

(6) 志賀公園遺跡から産出した

昆虫化石について

森 勇一*・上田恭子**

1. はじめに

先史～歴史時代の遺物包含層から発見された昆虫化石を用い、植生や古環境、人為による自然改変などについての情報を得るための研究は、これまでに多数行われてきた(森1994a、1997、1998、1999)。本論は、志賀公園遺跡の遺物包含層より産出した昆虫化石とその意義について述べる。

2. 試料および分析方法

志賀公園遺跡は、名古屋市北区中丸町二丁目に位置する弥生時代から古墳時代、および古代・中世を中心とした複合遺跡である。本遺跡は庄内川の形成した沖積平野内に所在している。

昆虫分析試料は、志賀公園遺跡00C区の南壁断面から、愛知県埋蔵文化財センター科学分析室の鬼頭剛調査研究員により採取されたものである。試料は、遺跡をほぼ南北に貫流する庄内川水系の自然流路(NR01)を埋積する河道内堆積物から得られた。分析試料は、河道内堆積物の最下層(ⅡKS00CP-2の1層;試料1)と、これより約0.5m上位に堆積した地層(同4層;試料2)の計2サンプル採取されており、堆積物の層相は、試料1については暗緑色粘土質シルト層、試料2では黒褐色粘土層であった。両試料の相対年代は出土遺物より7世紀後半と推定されている(愛知県埋蔵文化財センター2001)。昆虫化石の抽出は、同一試料についてブロック割り法と、水洗浮遊選別(フローテーション)法を併用して実施した。浮遊選別にあたっては、径200mm、500 μ mの篩を使用した。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

3. 昆虫化石の分析結果

A. ブロック割り法

志賀公園遺跡の分析試料中よりブロック割り法により抽出された昆虫化石は、217点であった(表10)。試料ごとにみると、試料1が84点、試料2が133点であった。試料1および試料2について分析結果に有意な差が認められなかったので、ここでは一括して述べる。なお、産出した昆虫化石のうち、主なものについては、図22に実体顕微鏡写真を掲げた。

昆虫化石を分類群ごとにみると、目レベルまで同定したもの2目2点、科レベルまで分類できたもの12科82点、亜科レベル3亜科7点、族レベル2族2点、属レベル6属30点、種まで同定できたものは20種72点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が21点存在する。検出部位別では、上翅(Elytron)が最も多く、このほか前胸背板(Pronotum)、腿脛節(Legs)、腹部(Abdomen)点などが目だった。

生態別では、陸生の食植性昆虫が58点、水生昆虫が55点、食肉性ないし雑食性の地表性歩行虫および食糞・食屍性昆虫が計72点確認された。

特徴的な種についてみると、まず地表性歩行虫では、人為度の高い裸地の環境下の人糞や獣糞に集まるコバマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* が計11点検出され、これ以外におそらく同種かこの近縁種に同定されるエンマコガネ属 *Onthophagus* sp. が計3点発見された。その他の食糞性昆虫では、獣糞に多いマグソコガネ *Aphodius rectus* が3点、同じく獣糞に多く人糞にも来るコマグソコガネ *Aphodius pusillus* が1点など、食糞性昆虫4分類群が計18点確認された。

また、食屍性の歩行虫では、人家周辺の畑作地・ゴミ捨て場などに多く、動物の糞に集まるハエのサナギや腐肉などを食するエンマムシ科 *Histeridae* が2点、屍体や腐肉などに多いシテムシ科 *Sillphidae* が計2点発見された。これに、同様の環境下に生息することが多いハネカクシ科 *Staphylinidae* が12点伴われた。

食糞性および食屍性昆虫以外の地表性歩行虫では、属および種名が未同定のオサムシ科 *Carabidae* が計29点産出した。本分類群は、腿脛節(10点)

生類	和 名	学 名	IKS00C P-2 1層	IKS00C P-2 4層	小計
水生性	ゲンゴロウ科	Dytiscidae	P1	P1, E1, A1	4
	ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i> Sharp	P1	P1, E1	4
	ヒメゲンゴロウ亜科	Colymbetinae	T2	P1, T1	4
	キベリクロヒメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	E4	E1	5
	オオモスズマシ	<i>Dicranota orientalis</i> Mulsant	E2	E1	3
	ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp		E1, T1	2
	ガムシ科	Hydrophilidae	E2, A1, L2	P2, E3	10
	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky		A1, L1	2
	コガムシ	<i>Hydrochus affinis</i> (Sharp)	E2, L1	L1	4
	ヒメガムシ	<i>Synedra rufipes</i> (Fabricius)		L1	1
水生性	マメガムシ	<i>Regimbatus attenuatus</i> (Fabricius)	E2	E1	3
	セマルガムシ	<i>Coleostoma caelum</i> (Walker)	P1, E3	P1	5
	イネネライハムシ	<i>Donacia proceris</i> Fairmaire	E1	S1, E2	4
	エンマコガネ属	<i>Oedrophagus</i> sp.		A2, L1	3
	コブマルエンマコガネ	<i>Oedrophagus artemisiae</i> Waterhouse	P3, E3, T4	T1	11
	マツコガネ	<i>Aphidius rufus</i> (Motschulsky)	E1, T1	E1	3
	ユマダコガネ	<i>Aphidius rufipes</i> (Fabricius)		E1	1
	エンマムシ科	Histeridae		E1, A1	2
	シデムシ科	Staphylinidae		A1, T1	2
	オサムシ科	Carabidae	H1, E2, T2, A2, L2	P1, E4, T1, A5, L8, Q1	29
水生性	トクリゴミムシ属	<i>Lachnocrepsis</i> sp.	P1, E1	P1	3
	ミズワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.		E1	1
	ツヤツヤゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.	E1	E3	4
	ヒラタゴミムシ属	Platynini			1
	キマワリ属	<i>Plesiophthalmus</i> sp.		E2	2
	ハマカラン科	Staphylinidae	P2, A1	P1, E3, T1, A4	12
	コガネムシ科	Scarabaeidae	E2		2
	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	P1, A1, L5	P2, E2, A2, L4	17
	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope		P1, E1	2
	アオドウガネ	<i>Anomala albopilosa</i> Hope	T1	P1	2
水生性	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	H1, S1, P2	P4, E2	10
	コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal	T1	T1	2
	ヒメカンシヨコガネ	<i>Apogonia amida</i> Lewis		E2	2
	クロコガネ	<i>Holotrichia kotoensis</i> Brenske		H1	1
	ハナムグリ亜科	Cetoniinae	E1	A1	2
	カミキリムシ科	Cerambycidae	L1	E1, L1	3
	コメツキムシ科	Buprestidae	E1	P1, E1	3
	ハムシ科	Chrysomelidae	E2, A1	E4, L1	8
	ノミハムシ科	Alicidae	E1		1
	サビキコガネ	Agrypnini		P1	1
水生性	イネノカサカサムシ	<i>Scotinophara lurida</i> Burmeister		S1, A1	2
	コメツキムシ科	Cerambycidae		E1	1
	アリ科	Formicidae	A1	H2, A3	6
	トンボ目	Odonata		T1	1
	蚊目	Diptera	C1		1
	不明等	Coleoptera	P1, E3, L1, Q1	E3, A1, Q1, L1	21
	合 計		84	193	217

(採出部位凡例)

H(Head)頭部 An(Antenna)触角 M(Mandible)大顎 S(Scutellum)小楕板 P(Pronotum)前胸背板 G(Chelys)胴縁

E(Elytron)小楕板 W(Wing)上翅 T(Thorax)胸板 A(Abdomen)腹部 L(Leg)脚部 O(Other)その他

表 10 志賀公園遺跡から産出した昆虫化石 (ブロック割り法)

をはじめ、上翅 (6点)・胸部 (3点)・腹部腹板 (7点) など、多数の部位が確認された。オサムシ科に所属する昆虫は、体節片のみによる種の同定はきわめて難しく、そのため、本分類群の多産だけから、生息環境や食性など詳細な情報を得ることはできない。雑食性の地表面性歩行虫では湿潤地表面上に多いツヤツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp. が4点、ほぼ同様の地表面環境に生息するトクリゴミムシ属 *Lachnocrepsis* sp. が3点、ミズワゴミムシ属 *Bembidion* sp. が1点、ヒラタゴミムシ属 *Platynini* が1点見いだされた。また、倒木や樹木付近の地表面上に多いキマワリ属 *Plesiophthalmus* sp. が2点確認された。

陸生の食植性昆虫では果樹や畑作物などを加害するヒメコガネ *Anomala rufocuprea* (10点)、および種を同定することができないものの同種と考えられていサクラコガネ属 *Anomala* sp. の体節片が計17点検出された。このほか、ドウガネブイブイ *A. cuprea* (2点)、アオドウガネ *A. albopilosa* (2点)、ヒメカンシヨコガネ *Apogonia amida* (2点)、コガネムシ *Mimela splendens* (2点) など、畑作地に多い昆虫が認められた。また、産出点数は少ないものの、稲作害虫であるイネノカサカサムシ *Scotinophara lurida* が計2点発見された。

水生昆虫では、食肉性のゲンゴロウ *Cybister japonicus* (8点)、キベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius*

apicalis (5点)、オオミズスマシ *Dineutus orientalis* (3点)、ミズスマシ *Gyrinus japonicus* (2点) などが発見され、また食植性の水生昆虫ではガムシ *Hydrophilus acuminatus* (3点)、コガムシ *Hydrochara affinis* (4点)、ヒメガムシ *Sternolophus rufipes* (1点)、マメガムシ *Regimbartia attenuata* (3点)、セマルガムシ *Coelostoma stultum* (5点)、および稲作害虫として知られるイネネクイハムシ *Donacia provosti* (3点) など多種・多様な昆虫が確認されている。

B. 水洗浮遊選別法

水洗浮遊選別（フローテーション）法により、試料中より検出された昆虫化石は計 86 点であった。うち、1 層が 64 点（表 11）、4 層が 22 点（表 12）であった。これらのうちのいくつかについては、図 22 に実体顕微鏡写真を掲げた。

水洗浮遊選別法の特性として、検出される昆虫片が小さいことがあげられる。そのため、種の同定までならず、科や属単位の同定にとどまったものも多かった。試料 1 と 2 では昆虫化石の産出傾向にともに差が認められないため、ブロック割り法同様一括して論ずる。

出現昆虫を分類群ごとにみると、目レベルまで同定したもの 2 目 4 点、科レベルまで分類できたもの 9 科 51 点、亜科レベル 1 亜科 1 点、属レベル 3 属 8 点、種まで同定できたものは 9 種 13 点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が計 21 点検出された。

主な出現種では、陸生の食植性昆虫で畑作害虫として知られるヒメコガネが 3 点、同じく陸生・食植性昆虫で畑作害虫の一種ドウガネブイブイが 1 点、両種より小型の食植性昆虫で主にマメ類を加害するマメコガネ *Popillia japonica* (1点)、果樹等の花粉を食するクロハナムグリ *Glycyphana fulvipes* (1点) など、人為度の高い畑作地、人間が介在した植生の存在を示す昆虫類が見いだされた。また、水生の食植性昆虫で水田指標昆虫の一種セマルガムシが 2 点、同じく水田をはじめ流れの乏しい水域を好む食肉性のコガシラミズシ *Peltodytes intermedius* (2点)、同様の止水域を好むミズスマシ (1点) などが検出された。

No.	昆虫名	目	科	属	種	発見	生態
1.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
2.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
3.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
4.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
5.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
6.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
7.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
8.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
9.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
10.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
11.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
12.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
13.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
14.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
15.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
16.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
17.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
18.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
19.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
20.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
21.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
22.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
23.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
24.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
25.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
26.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
27.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
28.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
29.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
30.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
31.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
32.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
33.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
34.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
35.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
36.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
37.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
38.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
39.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
40.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
41.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
42.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
43.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
44.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
45.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
46.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
47.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
48.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
49.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
50.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
51.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
52.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
53.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
54.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
55.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
56.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
57.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
58.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
59.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
60.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
61.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
62.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
63.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
64.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		

表 11 志賀公園遺跡 (P-2 1 層) 水洗浮遊選別法

No.	昆虫名	目	科	属	種	発見	生態
1.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
2.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
3.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
4.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
5.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
6.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
7.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
8.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
9.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
10.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
11.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
12.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
13.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
14.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
15.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
16.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
17.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
18.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
19.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
20.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
21.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		
22.	ハナムグリ	Chrysomelidae	上目	食植性	好樹性		

表 12 志賀公園遺跡 (P-2 4 層) 水洗浮遊選別法

属や科レベルまで分類できた昆虫では、食植性のヒメコガネやドウガネブイブイなどに由来する昆虫片と考えられるサクラコガネ属が4点、これらを含む分類群であるコガネムシ科が計8点発見された。このほか、地表性昆虫では食肉ないし雑食性のオサムシ科が19点、同じく食肉ないし雑食性昆虫のハネカクシ科が9点、食糞性昆虫であるエンマコガネ属が3点認められた。

4. 昆虫群集が示す古環境

志賀公園遺跡の河道内堆積物より得られた昆虫化石群集をみると、全体に地表性昆虫の出現率が高いことにより特徴づけられる。このことは、7世紀後半のころ、本遺跡周辺の地表環境が多様であり、彼らの生息を許す餌資源が遺跡内に豊富に存在したことを示している。試料中より多数検出されたエンマコガネ属やコブマルエンマコガネ・マグソコガネ・コマガソコガネ・エンマムシ科・シデムシ科などの食糞ないし食屍性の地表性昆虫は、従来、都市型昆虫（森 1994b・1997）とされ、人の集中居住や、人為による環境汚染を示すものとして注目される。

計2点産出したイネノクロカメムシは、体長8.0～10mm、半翅目異翅亜目カメムシ科（PENTATOMIDAE）に属する稲作害虫である。本種は、アッサムから中国・台湾・朝鮮南部より日本の南西部にかけての広い地域に分布し、北海道からは知られていない。年1世代でイネ単食性である。成虫態のままマツや雑木の落葉の下に潜って越冬する習性があり、越冬成虫は6～7月のころ本田に飛来して、口吻を茎に差し込み吸汁・加害する。イネノクロカメムシは周囲に丘陵地を控えた水田に生息しており、成虫越冬するため、排水の悪い湿田や強湿田に決して生息することのない乾田型水田の指標種である。また、計3点産出したイネネクイハムシは、幼虫がイネの根を加害する農林有害昆虫として著名である。セマルガムシやコガムシ・マメガムシ・ヒメガムシ・ミズスマシ・キバクリクロヒメゲンゴロウなどの水生昆虫も、水田内に多い昆虫（水田指標昆虫）である。このため、志賀公園遺跡の周辺には、一時期、水田が存在した可能性が高い。

また、ブロック割り法および水洗浮遊選別の両分析を通じ、多数検出されたヒメコガネ・ヒメカンショコガネ・マメコガネ・ドウガネブイブイなどの畑作害虫の出現結果からは、水稲耕作地背後の丘陵地や台地上にマメ類や各種畑作物・クワ・果樹などが植栽された人為度の高い植生空間が展開していたと推定される。

なお、同じ志賀公園遺跡の中世の井戸からカメムシとともに産出した昆虫化石の分析結果を調査する過程で、この時期の昆虫群集に、ヒメコガネ・サクラコガネ・マメコガネなどの畑作害虫が多数認められたことから、中世のころ、同遺跡周辺に人為度の高い畑作空間が存在した可能性について指摘した（森 2001）。今回の分析結果は、志賀公園遺跡が位置する濃尾平野北東部では、畑作地の出現がすでに7世紀にまで遡ることが示されたといえる。

5. まとめ

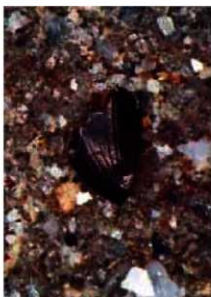
志賀公園遺跡の遺物包含層中より産出した昆虫化石を同定・分析し、その群集組成から当時の古環境を復元した。昆虫群集は、コブマルエンマコガネ・マグソコガネ・クロマルエンマコガネなど人糞や獣糞に集まる食糞性昆虫で多数が占められた。このほか、地表面上に存在するエサを求めて徘徊する地表性歩行虫が多く検出され、遺跡周辺は人為による環境汚染が進行していたことを示している。

植生環境に関する情報では、稲作害虫として著名なイネノクロカメムシやイネネクイハムシが検出されたことから、志賀公園遺跡周辺に水田（乾田タイプの水田）が存在したことが考えられる。このことは、水田指標昆虫として知られるセマルガムシやガムシ・コガムシ・マメガムシ・ゲンゴロウ・キバクリクロヒメゲンゴロウなどの水生昆虫の出現によっても示される。

また、イモ類やマメ・果樹等を食害するヒメコガネ・ヒメカンショコガネ・マメコガネ・コガネムシ・ドウガネブイブイなどの畑作害虫の出現からは、志賀公園遺跡付近に人為度の高い畑作空間が展開していたことが推定される。



1. ミズスマシ *Gyrimys japonicus* Sharp
右上翅 長さ $3.1 \times 1.7\text{mm}$
ブロック割り No.126



2. マメガムシ *Regimbartia attenuata* (Fabricius)
左上翅片 長さ $2.2 \times 1.2\text{mm}$
ブロック割り No.44



3. クロハナムグリ *Glycyphana fulviventris* Motschulsky
小胸板 長さ $1.2 \times 1.2\text{mm}$
ブロック割り No.54



4. コブマルエンマコガネ *Oedophaga crinitipes* Wächter
前胸背板 長さ $4.0 \times 5.0\text{mm}$
ブロック割り No.38



5. ヒメコガネ *Anomala urfasciata* Motschulsky
前胸背板 長さ $4.0 \times 7.0\text{mm}$
ブロック割り No.62



6. コガシラミズムシ *Pelodytes intermedius* (Sharp)
前胸背板 長さ $0.7 \times 1.8\text{mm}$
ブロック割り No.32



7. イトノクロカメムシ *Scotinophara lurida* Burmeister
小胸板 長さ $3.3 \times 2.6\text{mm}$
ブロック割り No.41



8. イネネクイハムシ *Donacia prevesti* Fairmaire
右土腿 長さ $5.0 \times 1.3\text{mm}$
ブロック割り No.60



9. ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* Hope
右土腿片 長さ $10.0 \times 8.0\text{mm}$
ブロック割り No.86

図 22 志賀公園遺跡で算出した昆虫化石の顕微鏡写真

文献

愛知県埋蔵文化財センター2001『愛知県埋蔵文化財センター年報 平成12年度』、p8-9。

森 勇一1994a「昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元」『第四紀研究』33(5)、p331-349。

森 勇一1994b「都市型昆虫の起源－愛知県朝日遺跡における昆虫群集について－特集 考古遺跡の昆虫遺体」『昆虫と自然』29(8)、ニューサイエンス社、p4-12。

森 勇一1995「静岡県川合遺跡（八反田地区）より得られた昆虫群集について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書（第63集）川合遺跡（八反田地区Ⅱ）』静岡県埋蔵文化財調査研究所、p327-329。

森 勇一1996「第2トレンチ3号井戸から産した昆虫群集」『高崎市文化財調査報告書（第145集）下中居条里遺跡、都市計画道路下中居矢中線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』。

第5章 総括

(1) 中世・戦国の遺構群と景観

地表面に人為的な改変がなければ、本来は現地表からでも埋没旧地表が把握できるはずである。しかし、現在の地表面の多くは現代の土地改良・区画整理で様変わりし、旧地表の把握に困難を伴う。そこで頼りになるのが明治の地籍図である。

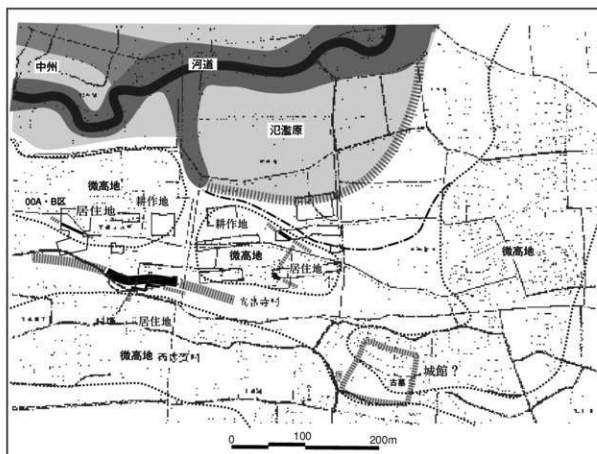
地籍図には畑や田、用水・道・宅地などが表現されており、とくに畑や田は旧地表の起伏に対応している場合がある。中世城館も、この方法で濠や土塁の位置が推定されているように、信頼度は高い。これに発掘調査成果が加われば確度も高まる。

図23は志賀公園遺跡周辺の地籍図に調査成果

を描き加えたものである。図24は調査成果の全体図である。調査の結果、微高地相当部分の水田は旧地表を大きく削平していることが判明した。中世・戦国と古代の地表面が同一か異なるのか直接判断する資料は無いが、00A区のSD01から10世紀代の遺物が出土しており、古代地表面の継続は窺える。00B区古代河道上面の埋没がそれほど進行していないことを考慮すれば、古代から中世にかけて大幅な地表の更新はなかった可能性がある。

要点のみ述べる。北には河道と氾濫原があり、北東の97B区で縁辺が見つかった。氾濫原に沿って微高地が逆L字状にのびる。微高地上には複数の居住지가展開し、その周囲や居住地区間には空閑地がある。空閑地には土坑が溝が掘削

図23 地籍図と主要遺構の合成図（14世紀後半から16世紀の景観）



される。96A 区の溝は古代の河
道群に重複し、この部分が中
世にも低地であったことを窺
わせる。00B 区では墓坑が群
生し、低地が墓地として利用
されていたことを示している。
98I 区・96D 区・96C 区では土
坑以外検出されていないが、
門間沼遺跡の調査所見を参考
にすれば島であった可能性が
高い。畠も通路など低い部分
に墓坑が展開する場合があり、
参考になろう。00A 区は池沢遺
跡の存在から、当初は畠が展
開し、後に居住地になったと
考えられる。居住地は15世紀
前半に終息し、それ以後は96A
区の南や97F 区・98J 区・98K
区付近で大溝に区画された内
部に移る。大溝で区画された
屋敷数が展開する集落地が
形成される。

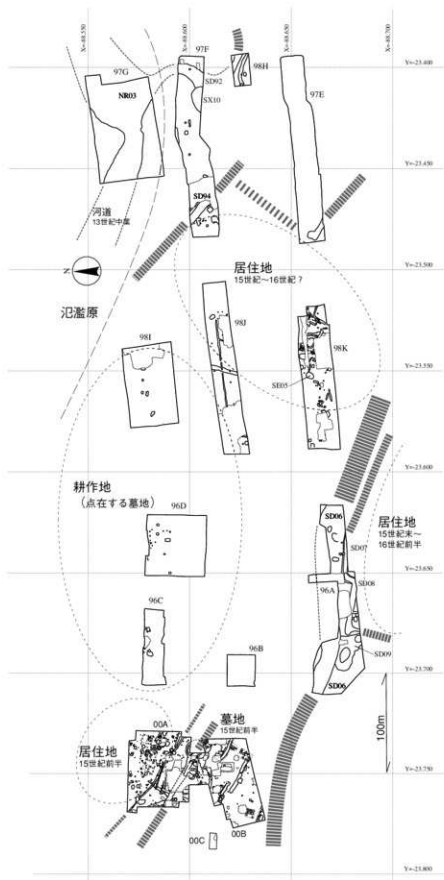


図24 中世・戦国遺構全体図

(2) 古代の木製品について

今回の調査では、古墳中期・古代・中世の木製品が多数出土し、うち177点を報告した。各時期の木製品を器種分類し、それぞれの使用樹種をまとめたのが図27である。

古墳中期・中世は点数が少なく、器種組成を復元するにはいたらない。古代は165点の木製品を掲載した。うち、86～95の杭以外はすべて自然流路NR01からの出土である。共伴する須恵器の所属時期はおおむね東山50～岩崎17号窯式期に属する。今回、そのうち5点についてAMS法による年代測定をおこない、それぞれA.D.540(30)、650(71)、435(82)、545/550/555(101)、655(161)の年代値を得た。前述の須恵器の推定年代を大きくはずれる3点をのぞくと、A.D.650年前後に2点集中することから、須恵器の実年代もほぼ650年前後(7世紀中葉)とみてよいのではないと思われる。

次に器種組成をみると、祭祀具以下、ほぼひと通りの器種が揃っている。なかでも斎串と曲物底板、下駄の出土量が多い。図27のうち、

火鑽臼以下の器種をはぶいた器種を円グラフにし、前回報告分のNR07下層黒色土層(7世紀後半)・黒色土層(7世紀末)と比較したのが図26である。今回のNR01出土木製品は、掘削具・工具を含み、斎串を主体とする祭祀具・下駄が多い点ではNR07下層黒色土層と共通するが、NR07下層黒色土層では1点も出土しなかった曲物容器が全体の4分の1近い割合を占める点が大きく異なる。

使用樹種では、前報告と同様にヒノキが全体の4分の3近くを占めているが、掘削具・農具・杭が比較的多いためか、広葉樹も4分の1近くみとめられる。特にNR01の底で確認された土坑群の杭にはすべてコナラ節・クヌギ節がもちいられていることから、遺跡の付近(名古屋台地の北縁辺部か)にはこれらの樹種を主体とする雑木林が存在したと考えられる。

また、丸太や加工途中の板、残材が多く出土していることから、今回の調査区周辺には、前回想定したブレ郡街段階の豪族居宅に付随する木製品の加工施設が存在していた可能性が指摘できる。

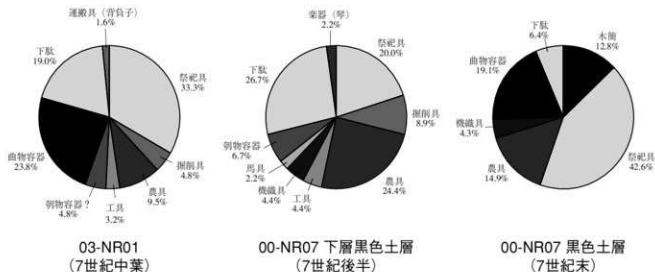
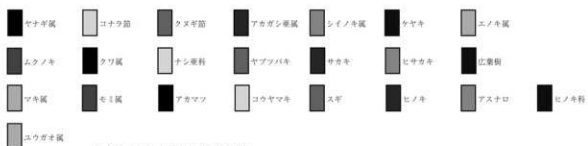
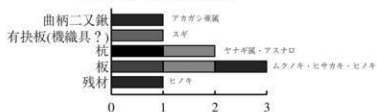


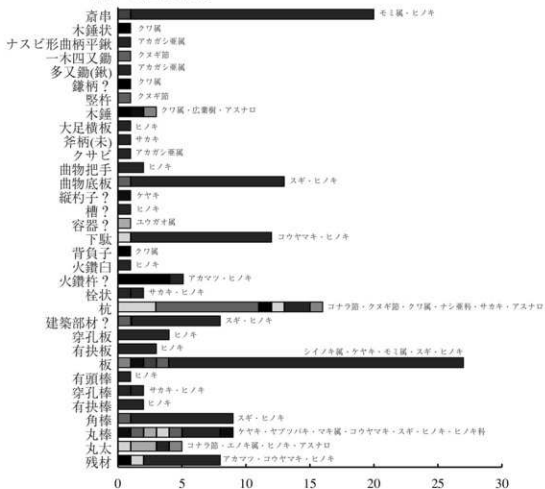
図26 古代の木製品器種組成比較グラフ



古墳中期 (5世紀前葉)



古代 (7世紀中葉)



中世



図27 志賀公園遺跡 00A・B・C区出土木製品時期別器種・樹種組成グラフ

抄録

ふりがな	しがこうえんいせき
書 名	志賀公園遺跡Ⅱ
副書名	
巻 次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター報告書
シリーズ番号	第121集
編著者名	石黒立人（編著）・樋上 昇・鬼頭 剛・堀本真美子 森 勇一・上田恭子・植田弥生・松岡敬二・佐藤昌憲
編集機関	愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 2004年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° 分 秒	東経 ° 分 秒	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
しがこうえん 志賀公園遺跡	なごやしきたく 名古屋市北区 ちゅうりまなちよう 中丸町2丁目	23102	2015	35 度 12 分 15 秒	136 度 54 分 30 秒	200010～ 200103	2,030㎡	都市整備公団 アーバンニア志 賀公園建設に伴う事前調査

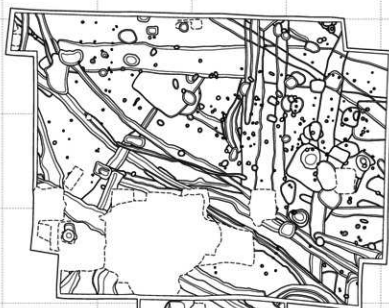
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
志賀公園遺跡	集落	古墳前期	水田	土師器	
		古墳中期	水田	土師器・木製品	水田面から出土した薬
		古代	竪穴住居・自然流路	須恵器・土師器 木製品	
		中世戦国	掘立柱建物・井戸・ 池状遺構・溝・土坑	灰輪系陶器 施釉陶器	

図版

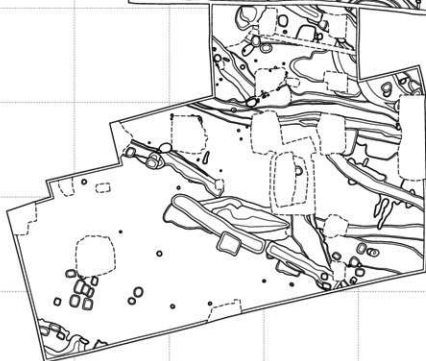
遺構

遺物

写真



00A区



00B区



00C区

1 : 400 調査区全体図

Y=23720

図版 2

X=28550

Y=23725

X=28555

X=28570

X=28575

X=28580

X=28585

X=28590

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

Y=23755

Y=23760

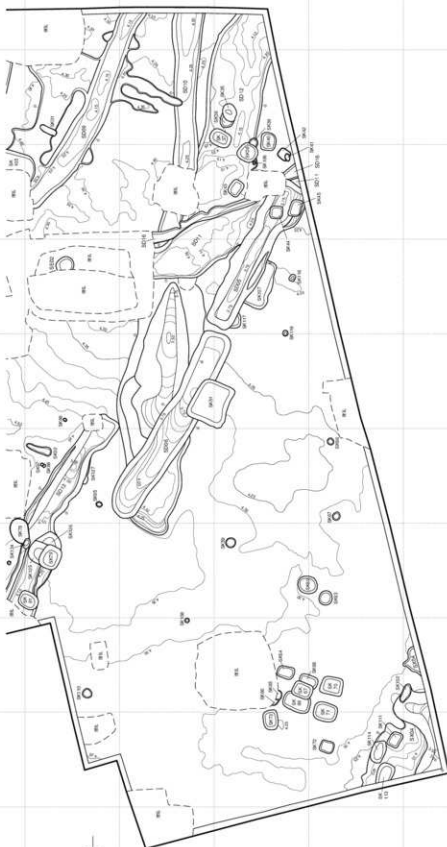
Y=23765

Y=23770

Y=23775



図版 4



X=48815

X=48820

X=48825

X=48830

X=48835

X=48840

X=48845

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

Y=23755

Y=23760

Y=23765

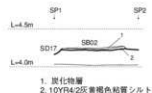
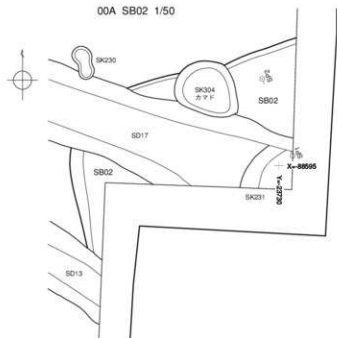
Y=23770

Y=23775

Y=23780

00A区SB

00A SB02 1/50



00A区SD

00A SD01 1/50



1. 10YR2/1黒色粘質シルト マンガン斑あり
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト マンガン斑あり
3. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 砂質シルトに近い マンガン斑あり
4. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 10YR6/2砂質シルトが混じる SD01下層
5. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘土に近い

SD01上層

#

SD02上層

#

SD02下層

#

00A SD06 1/50



1. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
10mm大の炭化物わずかに含む
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
3. 10YR6/1褐色砂質シルト
4. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり
5. 10YR4/1褐色砂質シルトと
10YR7/1灰色砂質シルト互層状に混合

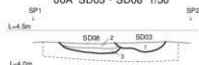
SD06上層

#

SD06下層

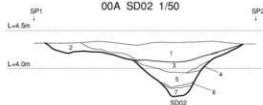
#

00A SD03・SD08 1/50



1. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり
2. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト マンガン斑あり
3. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト

00A SD02 1/50



1. 10YR4/1褐色粘質シルトと10YR5/2灰黄褐色砂質シルトの混土
マンガン斑と沈渣あり
2. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルトと10YR5/2灰黄褐色砂質シルトの混土
沈渣あり
3. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
5~10mm大の炭化物少々含む
4. 10YR4/1褐色砂質シルト
5. 10YR4/1褐色粘土
6. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
7. 10YR4/1褐色粘土 極軟質

SD02下層

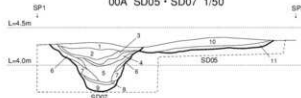
#

#

#

#

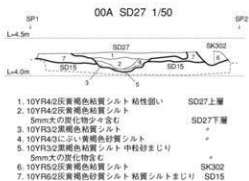
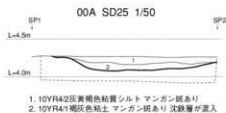
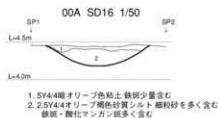
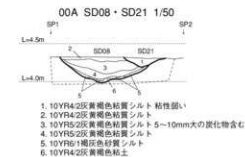
00A SD05・SD07 1/50



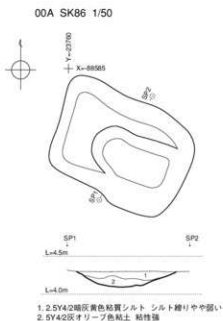
1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性強い
マンガン斑あり
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
3. 10YR4/1褐色粘土
4. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
5. 10YR3/2黄褐色粘土
6. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 砂質シルトまじり
7. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘質シルトまじり
8. 10YR4/2灰黄褐色粘土 砂質シルト少々まじり
9. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘土まじり
10. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
最下層に沈渣
11. 10YR5/1褐色砂質シルト
マンガン斑あり

図版 6

00A区SD



00A区SK

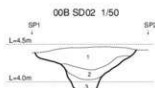


00A区SK



1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い 炭化物が下層に層状に堆積
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強い 炭化物が下層に層状に堆積 (主に西部)

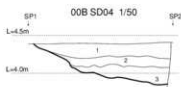
00B区SD



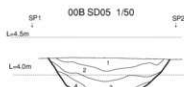
1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い 第1層
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘土まじり 第2層
3. 10YR4/2灰黄褐色粘土



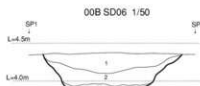
1. 10YR3/2黒褐色粘土
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト



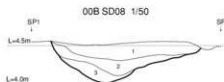
1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 粘性極弱い マンガン斑・沈着層あり 第1層
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強い
3. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂と 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強い互層 第2層



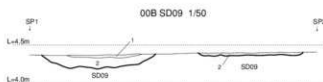
1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強い マンガン斑・沈着層あり
2. 10YR5/2灰黄褐色粘土 粘性強い
3. 10YR5/2灰黄褐色粘土 粘性強い 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトが混入
4. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトに 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂が混入 沈着層あり



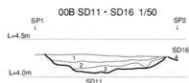
1. 10YR4/2灰黄褐色粘土 上層にマンガン斑あり
2. 10YR4/1褐灰色粘土 粘性やや強い
3. 10YR4/1褐灰色粘土 粘性やや強いに 10YR6/2灰黄褐色 中粒砂が混入



1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱い
2. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
3. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルトに10YR6/2灰黄褐色 砂質シルトが互層状に混入



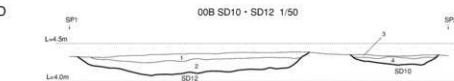
1. 10YR3/1黒褐色粘土 炭化物少々含む
2. 10YR4/2灰黄褐色粘土 粘性強い 炭化物少々含む



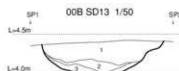
1. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト 沈着あり
2. 10YR3/1黒褐色粘土
3. 10YR5/1褐灰色粘質シルト
4. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト 沈着あり

図版 8

00B区SD



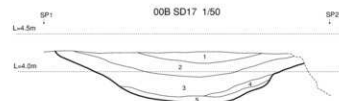
1. 10YR3/2黒褐色粘土 粘性やや強い 沈鉄あり
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
3. 10YR3/2黒褐色粘土 粘性やや強い マンガン斑あり
4. 10YR4/2灰黄褐色粘土 沈鉄あり



1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルトに
10YR2/2黒褐色粘土ブロック(径15cm大)が密に混入 第2層
2. 10YR3/1黒褐色粘土 粘性やや強い
3. 10YR3/1黒褐色粘土 粘性やや強いに
10YR5/2灰黄褐色粘質シルトが混入

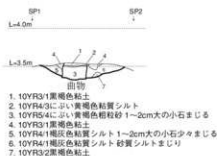
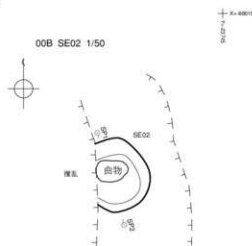


1. 10YR4/1褐灰色粘質シルト 粘性やや強い マンガン斑あり 第1層
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト マンガン斑・沈鉄あり
3. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 第2層
4. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
5. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト



1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 第1層
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 上層は沈鉄層
3. 10YR3/2黒褐色粘土 第2層
4. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルトに
10YR6/2灰黄褐色粗粒砂まじる
5. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト

00B区SE



1. 10YR3/1黒褐色粘土
2. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
3. 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂 1~2cm大の小石まじる
4. 10YR3/1黒褐色粘土
5. 10YR4/1褐灰色粘質シルト 1~2cm大の小石少々まじる
6. 10YR4/1褐灰色粘質シルト 砂質シルトまじる
7. 10YR3/2黒褐色粘土

00B区SK



1. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強い
20mm大の骨片・炭化物多く含む

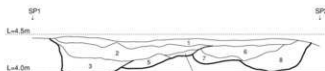
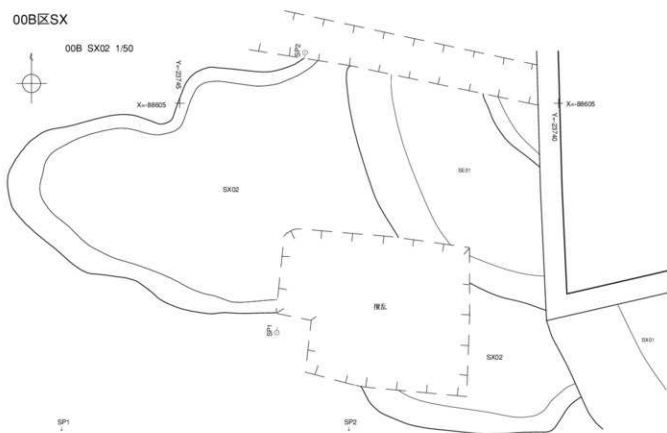
00B SK02 1/50



1. 10YR3/2黒褐色粘質シルト
20mm大の骨片十数点と20mm大の炭化物多量に含み
10YR6/6明黄褐色砂質シルトからなる20~30mm大の
焼土塊(しまり性)数十点含む

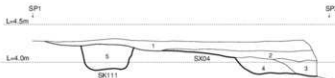
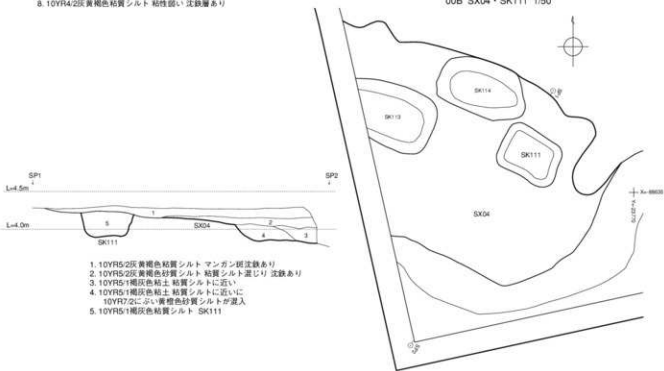
図版 10

00B区SX



1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルトに10YR3/2黒褐色粘土ブロックを少々含む
2. 10YR4/1褐色粘質シルトに10YR7/3に黄褐色細粒砂と10YR3/2黒褐色粘土ブロック混入
沈積層あり
3. 10YR4/1褐色粘質シルトに10YR5/4に黄褐色細粒砂と10YR3/1黒褐色粘土ブロック混入
沈積層あり
4. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
5. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルトに10YR2/1黒色粘土ブロック混入
6. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 砂質に近い 沈積層あり
7. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性強い
8. 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性強い 沈積層あり

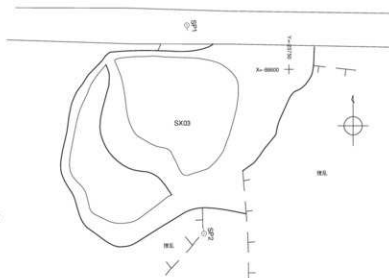
00B SX04・SK111 1/50



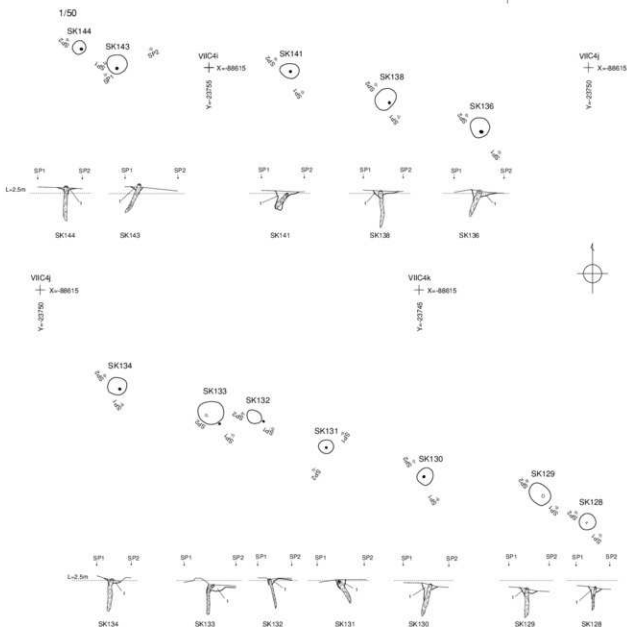
1. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト マンガン斑沈積あり
2. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 粘質シルト混じり 沈積あり
3. 10YR5/1褐色粘質シルト 粘質シルトに近い
4. 10YR5/1褐色粘質シルト 粘質シルトに近い
10YR7/2に黄褐色細粒砂が混入
5. 10YR5/1褐色粘質シルト SK111

00B区SX

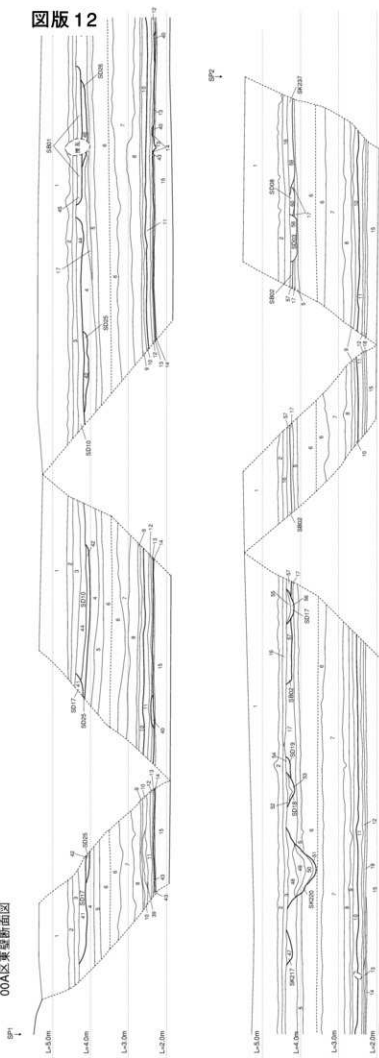
00B SX03 1/50



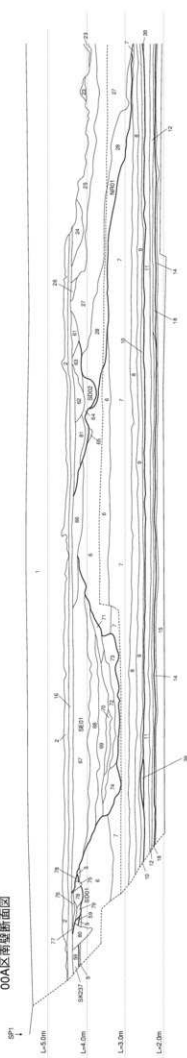
00B区 杭列



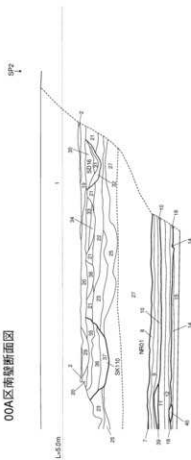
00A区東壁断面図



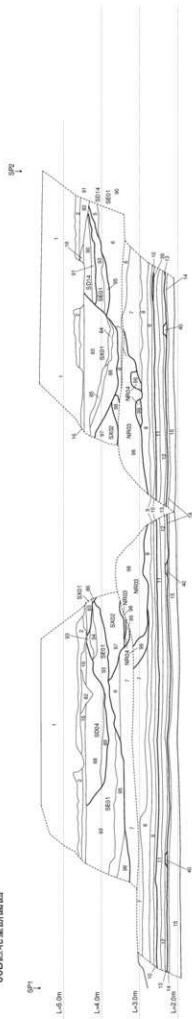
00A区南壁断面图



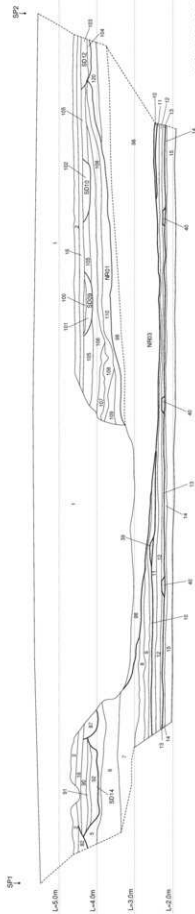
00A区南壁断面图



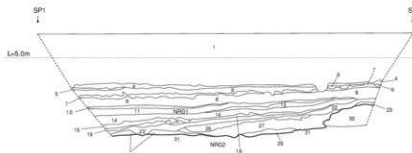
00B区北壁断面图



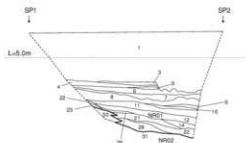
00B区东壁断面图



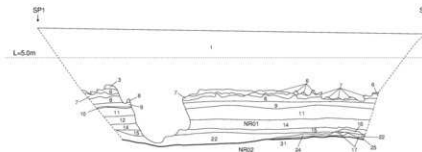
00C区北壁断面図



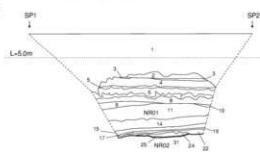
00C区東壁断面図



00C区南壁断面図



00C区西壁断面図



調査区壁面断面図-3 1:100

00C区壁面断面図土層注記

1. 表土 (神戸製鋼建設時の土砂) または覆土
2. 7.5GY4-1暗緑灰色シルト 耕作土
3. 5GY5-1オリーブ灰色シルト 露分多い 床土
4. 10YR5-2反黄褐色粘質シルト 礫
5. 10YR5-1暗灰色シルト NR01第1層
6. 5YR3-1黄褐色粘土 NR01第1層
7. 7.5YR4-1暗灰色粘土 NR01第2層
8. 10YR4-2反黄褐色粘質シルト NR01第2層
9. 10YR3-1黄褐色粘土 NR01第3層
10. 5YR3-2暗黄褐色粘質シルト 植物遺体層 NR01第3層
11. 2.5Y3-2暗褐色粘土 植物遺体を多く含む NR01第3層
12. 5Y4-1灰色粘土 植物遺体を多少含む NR01第3層
13. 2.5Y4-1灰色シルト NR01第3層
14. 7.5Y3-1オリーブ灰色粘土 植物遺体を多少含む NR01第3層
15. 10Y4-1暗緑灰色粘土 植物遺体を多少含む NR01第3層
16. 10YR6-1灰白色 粘粒砂2cm以下の礫を含む NR01第3層
17. 2.5Y3-2暗オリーブ褐色 粘粒砂植物遺体を多く含む NR01第3層
18. 10YR3-3暗褐色粘粒砂 植物遺体層 NR01第3層
19. 2.5GY3-1暗オリーブ灰色粘土
- 第15層と第16層の間に数ミリの厚みの5Y6-2反オリーブ色粘粒砂が部分的にみられる NR01第4層
20. 10YR4-1暗灰色粘粒砂 1cm以下の小礫と植物遺体を含む NR01第4層
21. 10YR4-1暗灰色中粒砂—粘粒砂 1cm以下の小礫を含む NR01第4層
22. 5Y3-2オリーブ黄褐色粘質シルト 2cm以下の小礫を多く含む NR01第4層
23. 2.5Y3-2反黄褐色粘粒砂 0.5cm以下の小礫を含む NR01第4層
24. 10YR6-1灰色粘粒砂 NR01第5層
25. 2.5Y3-1黄褐色粘質シルト NR01第5層
26. 10YR5-1暗灰色中粒砂—粘粒砂 2cm以下の小礫を多く含む NR01第5層
27. (1) 7.5YR4-1暗灰色シルトと(2) 5Y4-1灰色シルト
(3) 5YR1-7-1灰白色粘粒砂と(4) 10YR6-2反黄褐色粘粒砂の混成層 NR01第5層
28. (1) 7.5YR4-1暗灰色シルトと(2) 5Y7-1灰白色粘粒砂と
(3) 10YR7-1灰白色粘粒砂の混成層 1cm以下の小礫を多く含む NR01第5層
29. 10YR6-1暗灰色中粒砂—粘粒砂 2cm以下の小礫を多く含む NR01第5層
30. (1) 10YR3-1黄褐色粘粒砂と(2) 10YR1-1灰白色粘粒砂と
(3) 10YR6-6明黄褐色粘粒砂の混成層 NR02
31. 10YR6-6明黄褐色中粒砂—粘粒砂 3cm以下の礫を多く含む NR02

図版 16

Y=23725

X=88570

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

Y=23755

Y=23760

Y=23765

Y=23770

Y=23775

X=88575

X=88580

X=88585

X=88590

X=88595

X=88600

X=88605

00A2・00B3(1) 1/200



X=48825

X=48810

X=48815

X=48820

X=48825

X=48830

X=48835

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

Y=23755

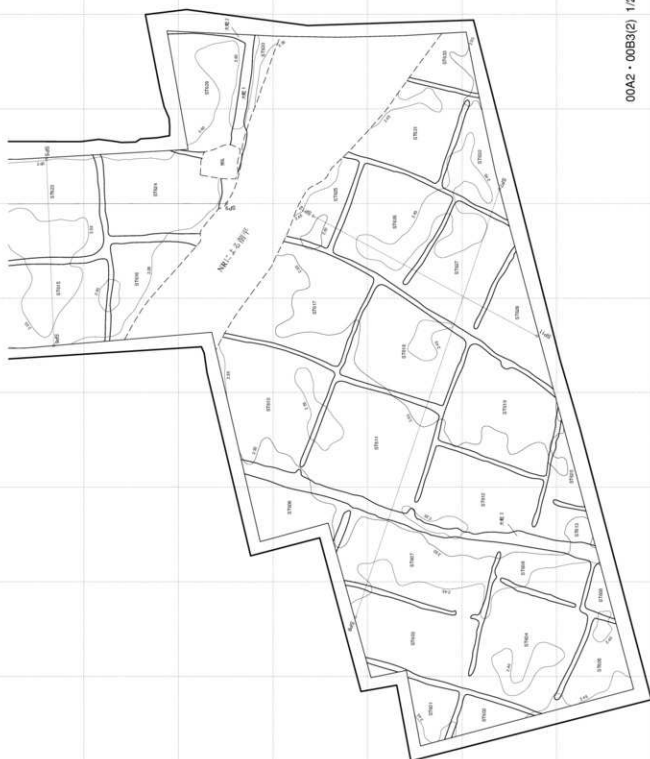
Y=23760

Y=23765

Y=23770

Y=23775

00A2・00B3(2) 1/200



Y=23725

X=23670

X=23675

X=23680

X=23685

X=23690

X=23695

X=23700

X=23705

Y=23730

Y=23735

Y=23740

Y=23745

Y=23750

Y=23755

Y=23760

Y=23765

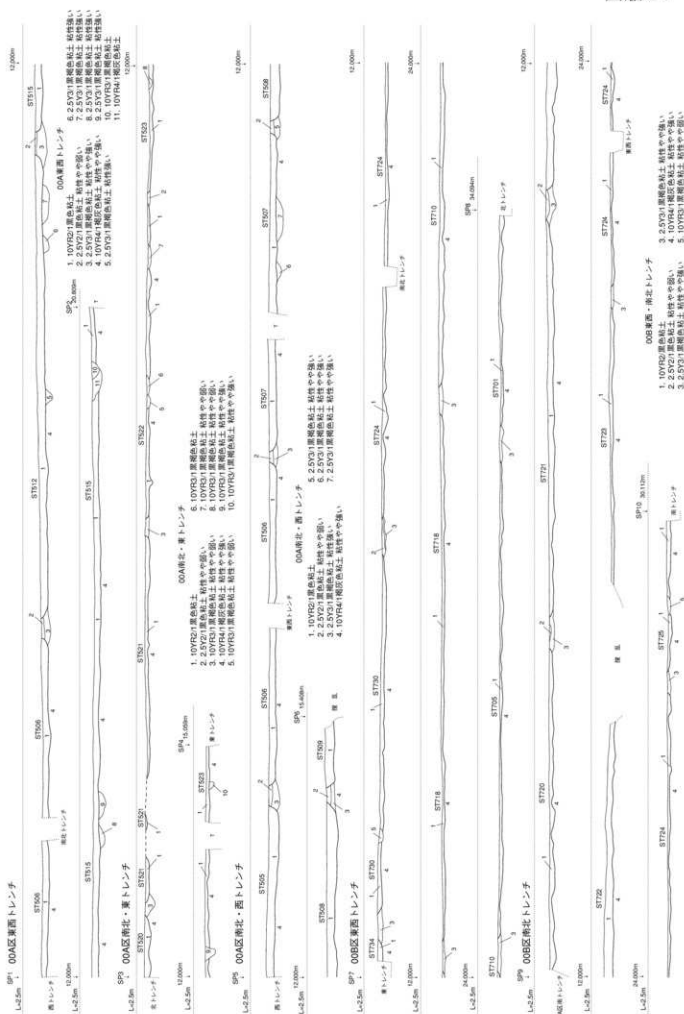
Y=23770

Y=23775





00A3 - 00B4(2) 1/200



X=88570

Y=23780

X=88580

X=88590

X=88600

X=88610

X=88620

X=88630

X=88640

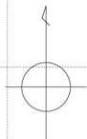
Y=23770

Y=23760

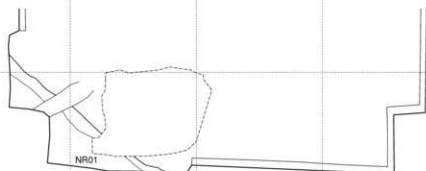
Y=23750

Y=23740

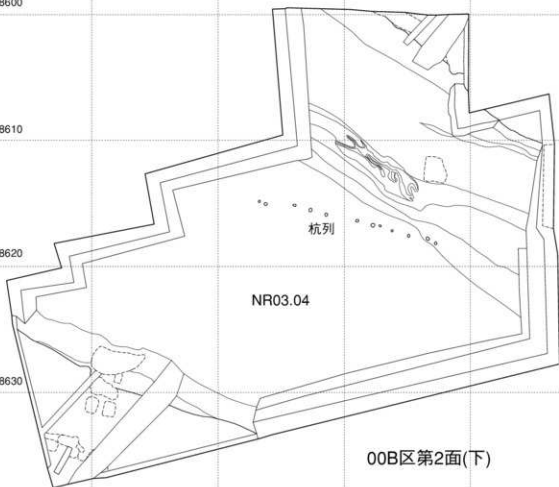
Y=23730



00A



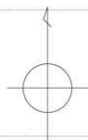
NR01



杭列

NR03.04

00B区第2面(下)



Y=23790

Y=23780

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

Y=23730

X=88570

X=88580

X=88590

X=88600

X=88610

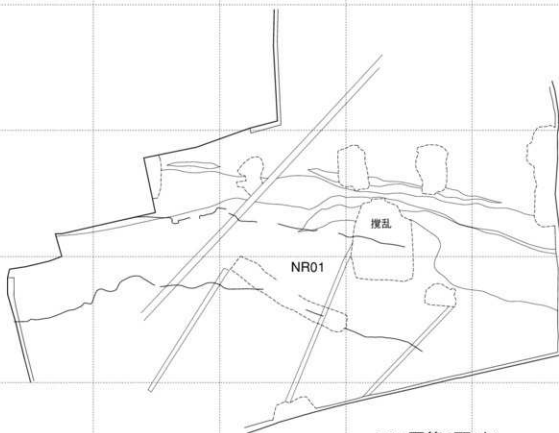


00C2(上)

X=88620

X=88630

X=88640



00B区第2面(上)

1 : 300

Y=23780

Y=23770

Y=23760

Y=23750

Y=23740

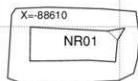
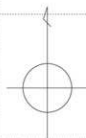
Y=23730

X=88570

X=88580

X=88590

X=88600

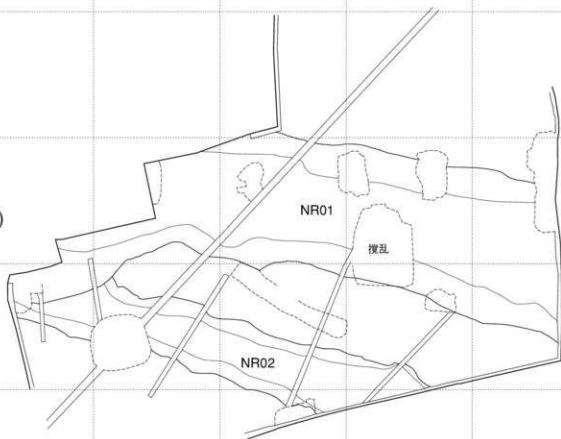


00C区第2面(下)

X=88620

X=88630

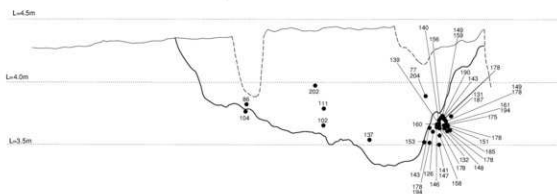
X=88640

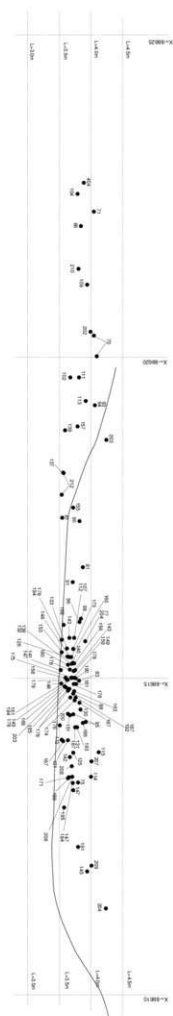


00B区第2面(中)

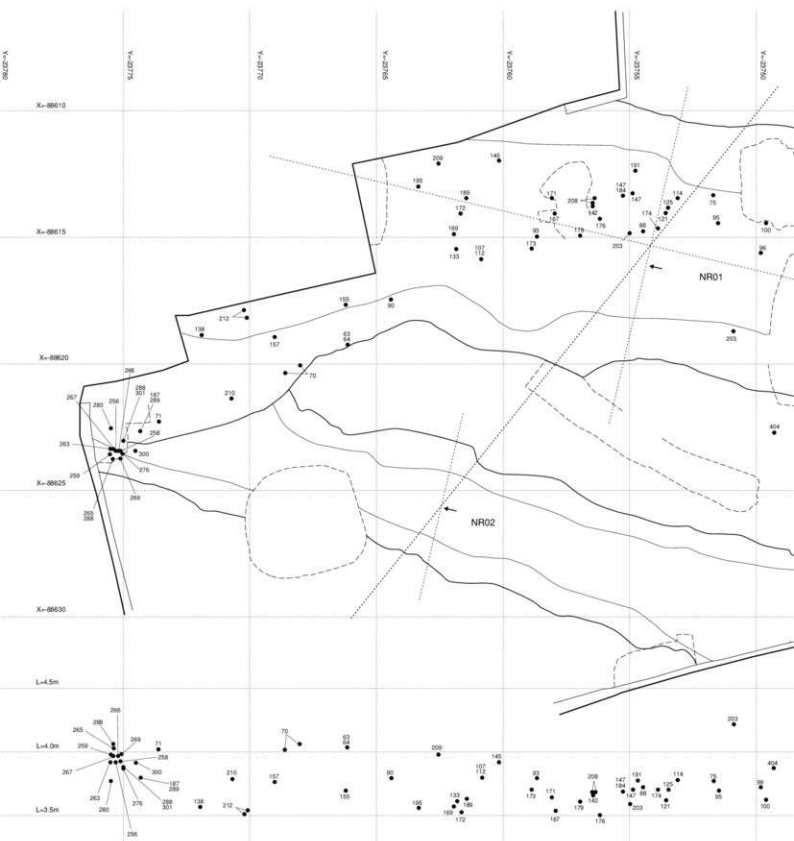
1 : 300



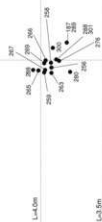
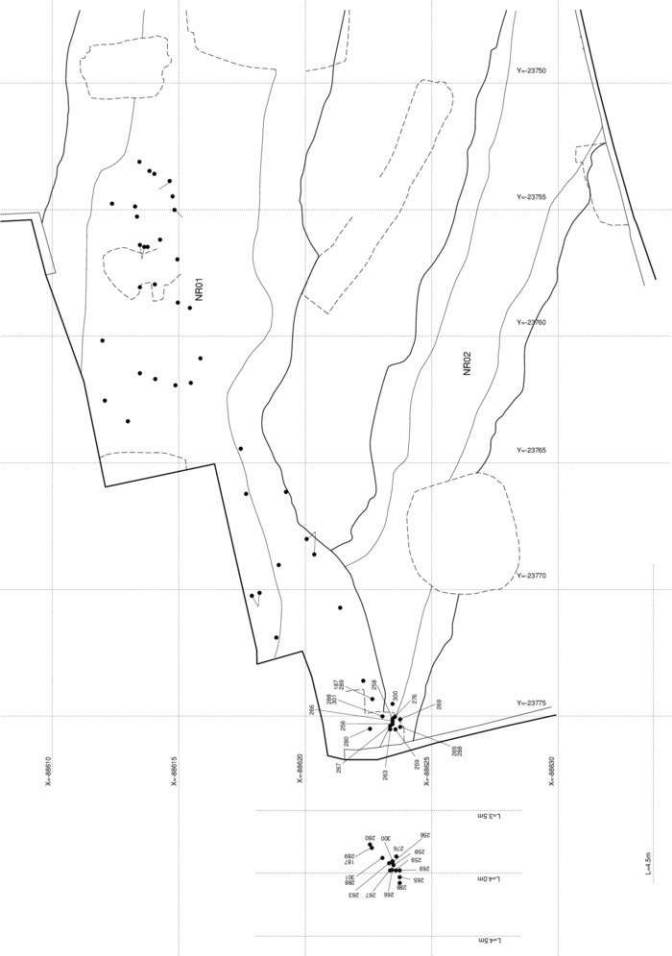




NR01 1/50土層柱上体図

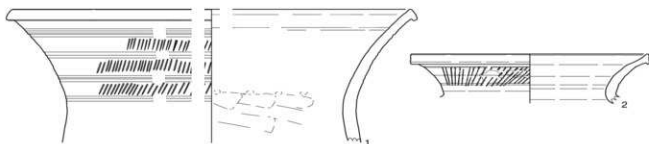




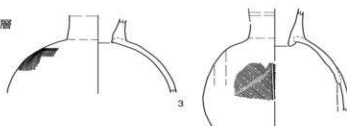


00A区

SD01

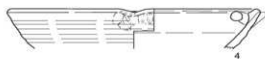


SD01/SD01下層



0 10cm

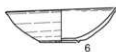
SD16



SD26



SD02上層



6

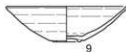
SD02下層



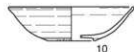
7



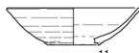
8



9



10



11



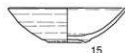
12



13



14



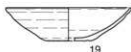
15



16



17



19



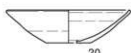
21



22



18



20



23

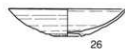


24

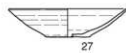


25

SD02



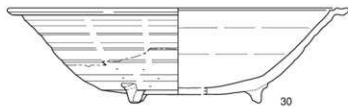
26



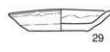
27



28



30



29



32



31

SD02/SD02下層

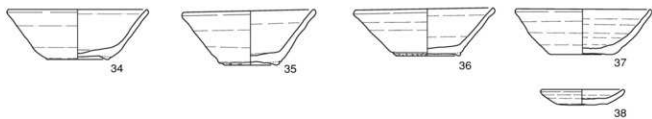


33

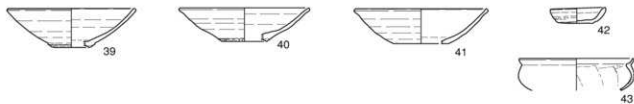
0 10cm

図版 34

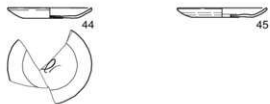
SE01



SK206



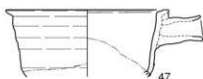
SK292



SK13



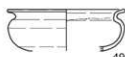
SK86



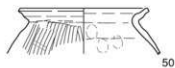
SK168



SK195



ST411下



0 10cm

陶丸

SD02下層

SK206

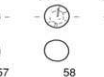
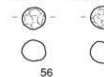
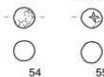
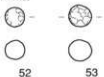
SK231

SK261

西下

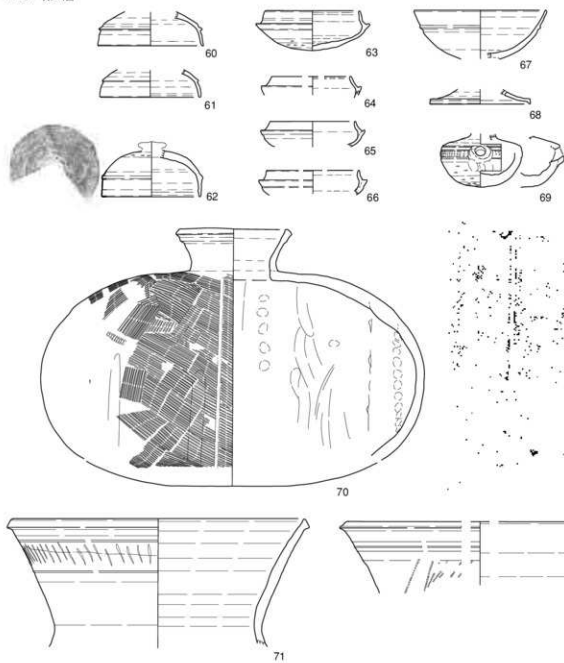
検出。

0 5cm



00B区

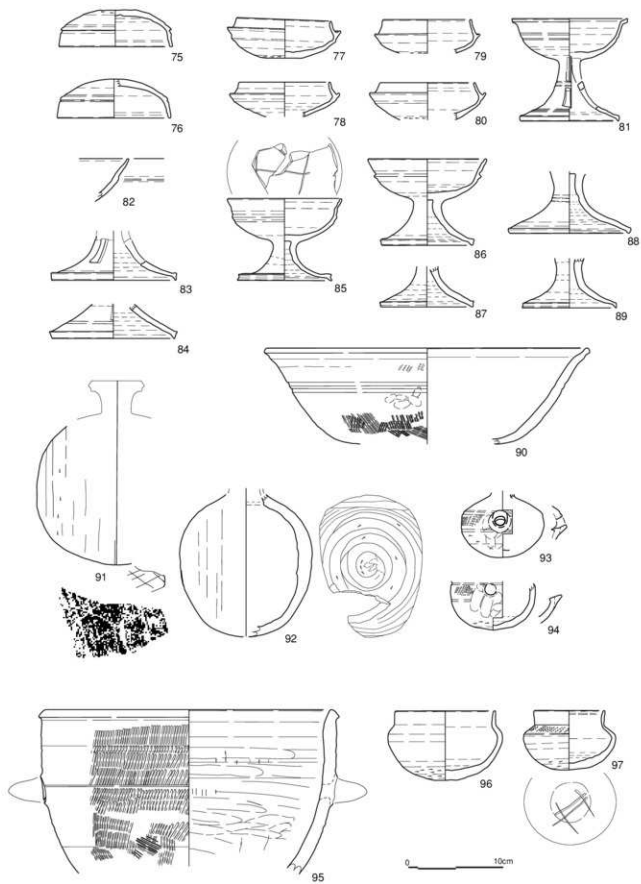
NR01-第1層



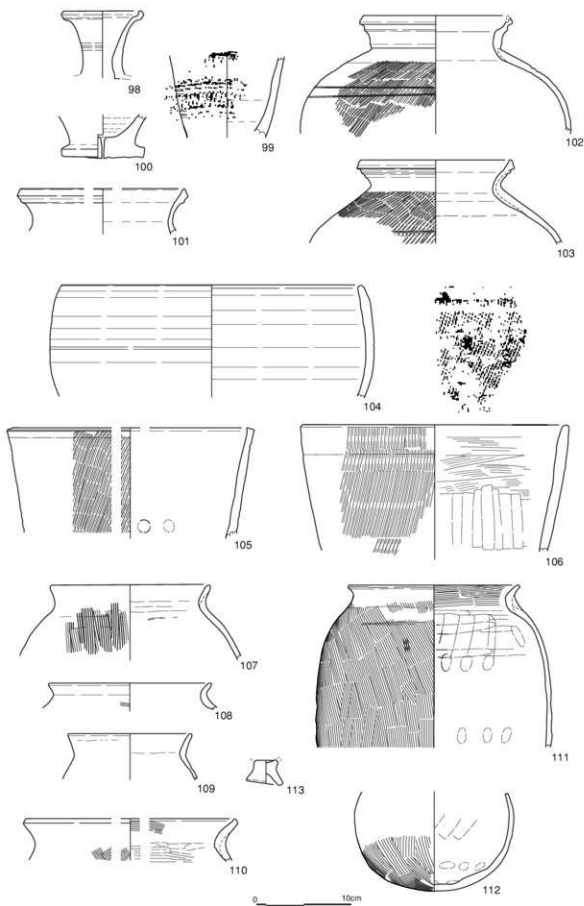
NR01-第2層



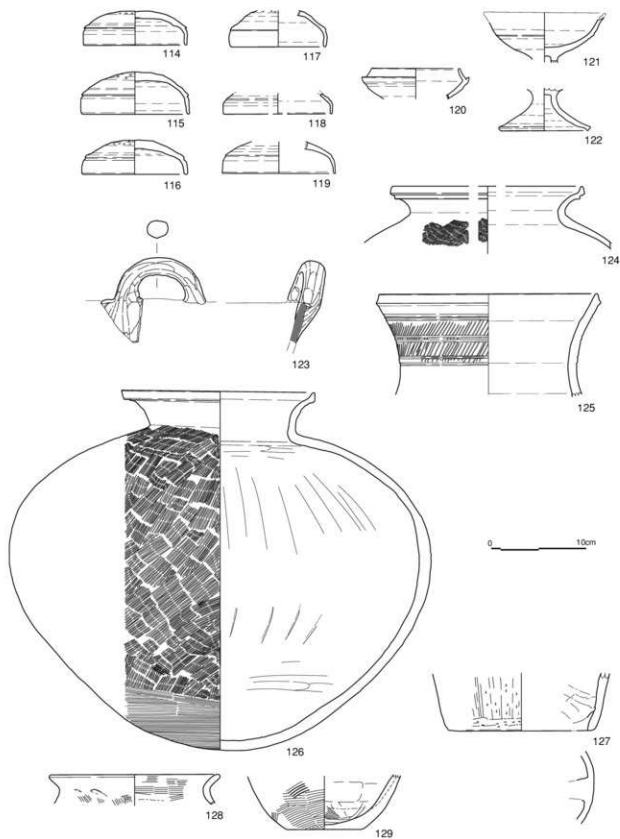
NR01-第3層



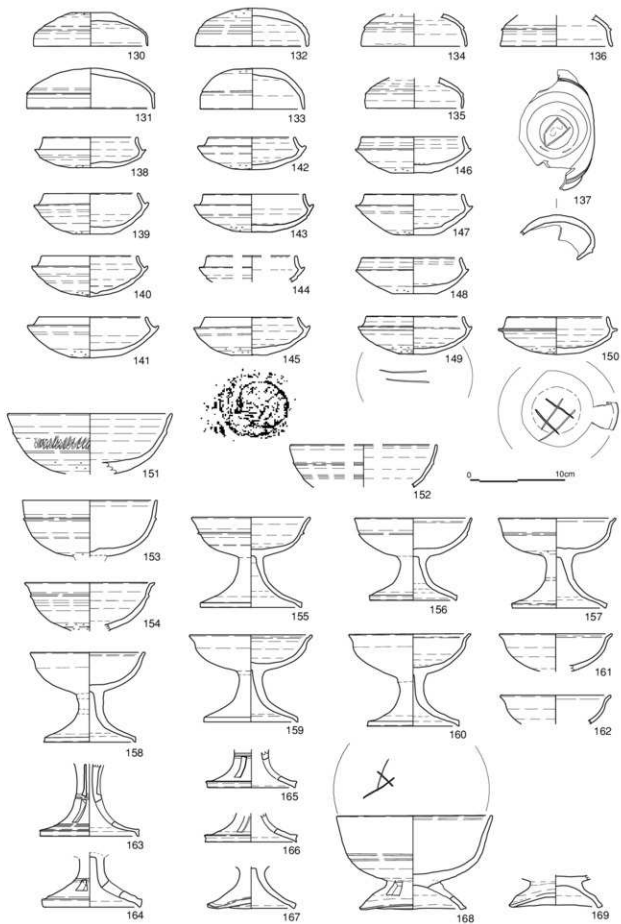
NR01-第3層



NR01-第4層

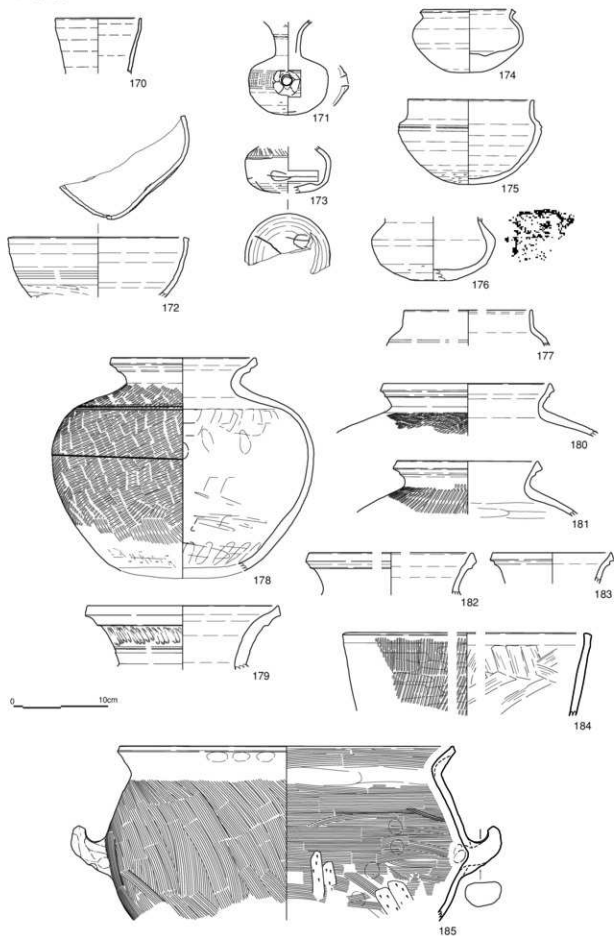


NR01-第5層

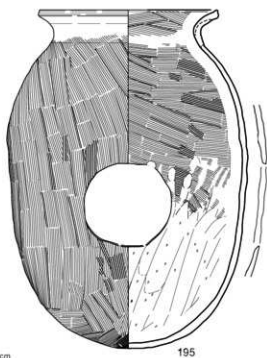
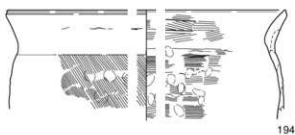
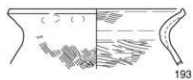
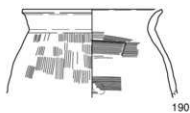
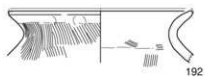
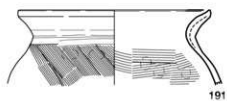
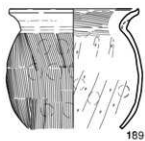
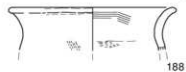
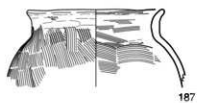
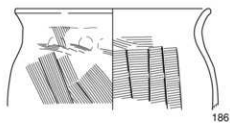


図版 40

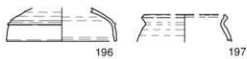
NR01-第5層



NR01-第5層

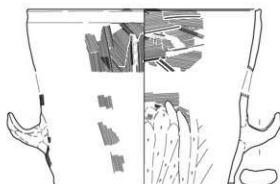


NR01-第6層



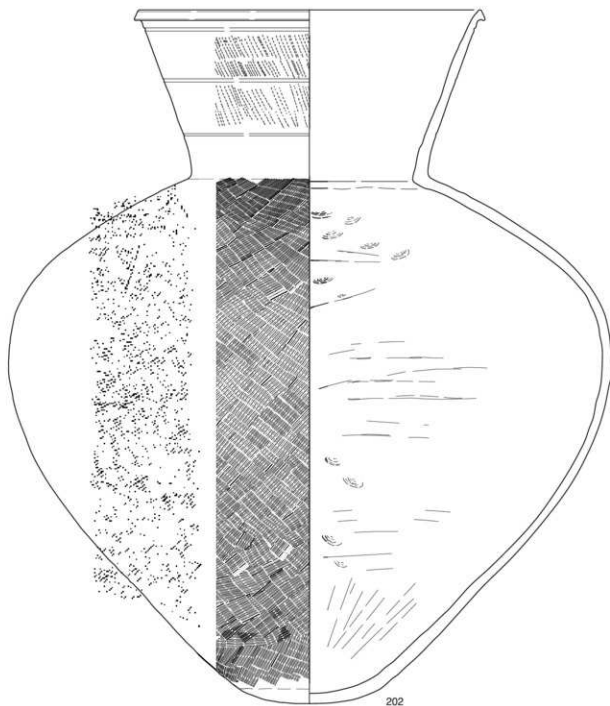
0 10cm

NR01



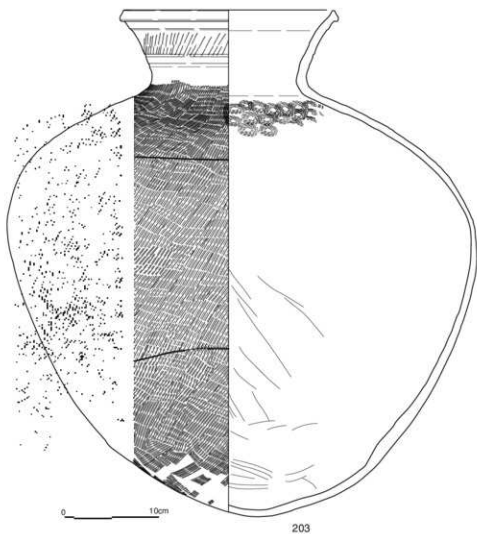
NR01-第1層/第2層/検出。

201

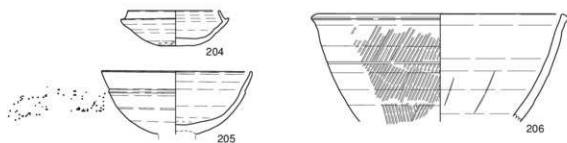


202

NR01-第1層/第5層/第6層



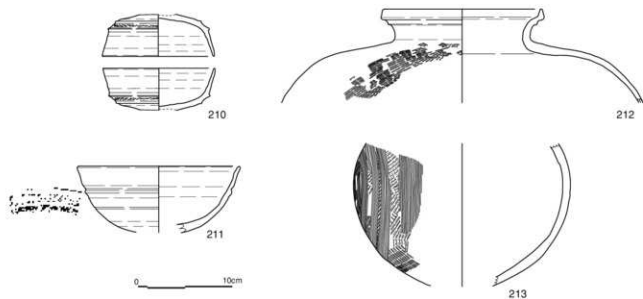
NR01-第1層/第3層/第5層



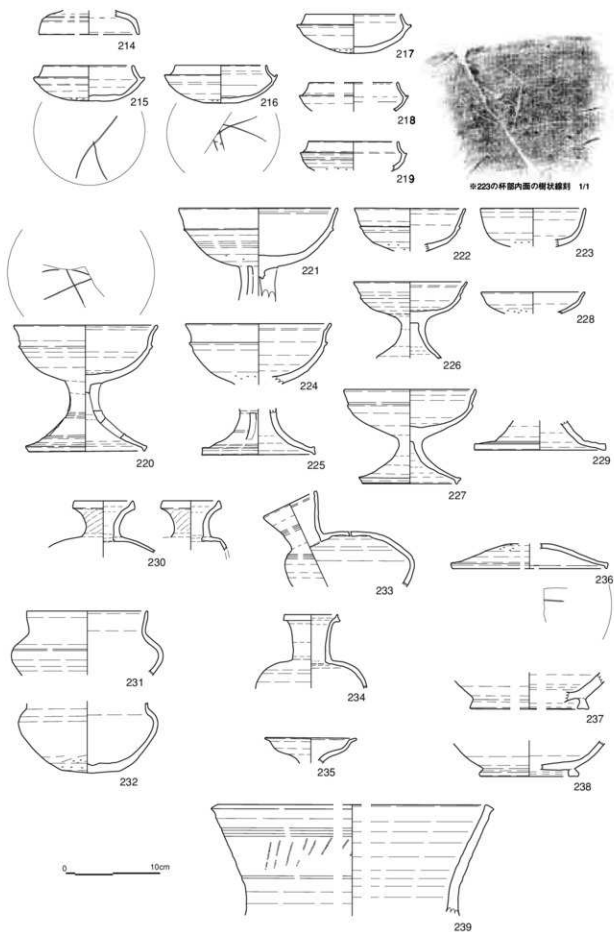
NR01-第4層/第5層



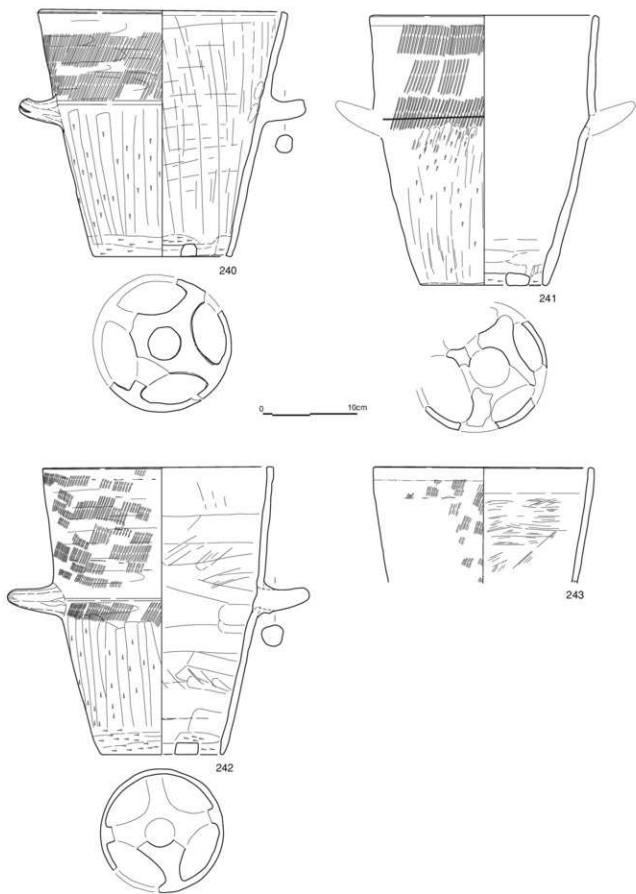
NR01/NR02



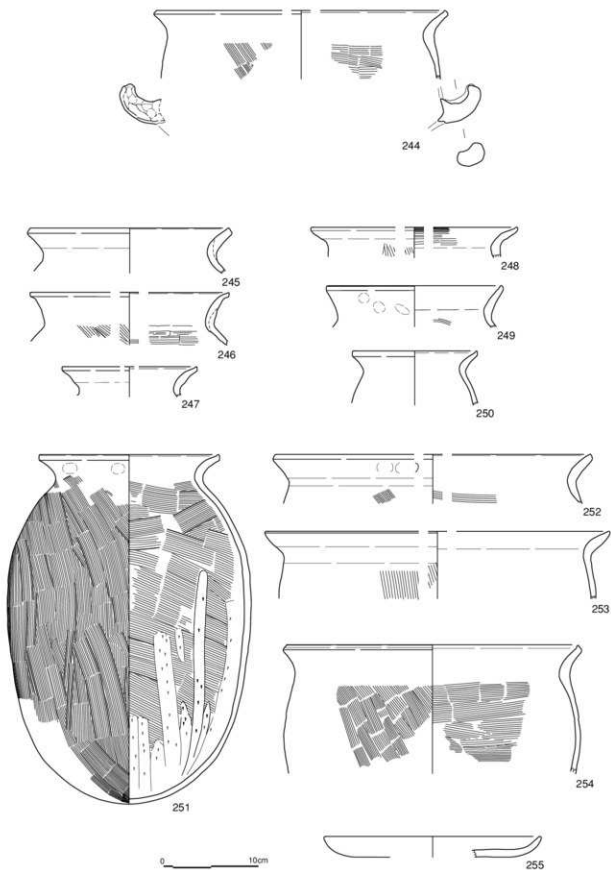
NR02-第1層



NR02-第1層

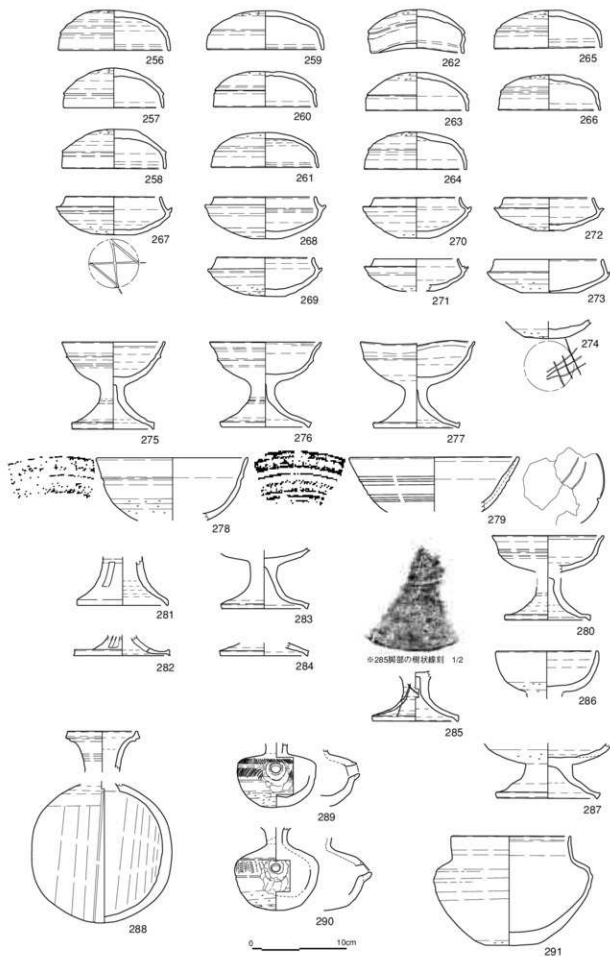


NR02-第1層

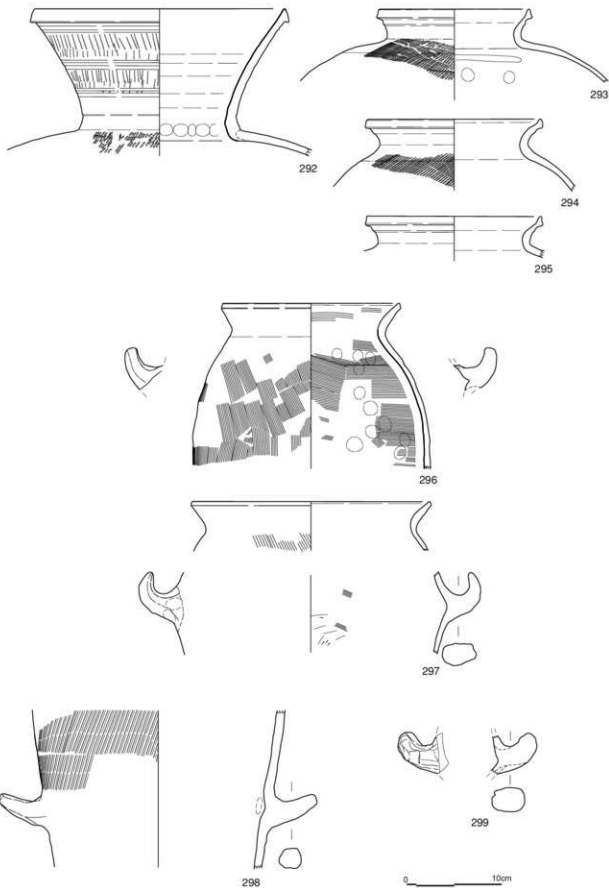


図版 48

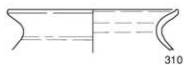
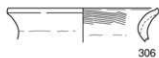
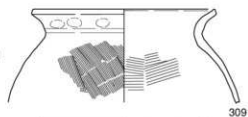
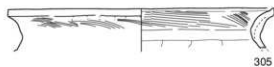
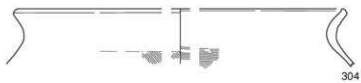
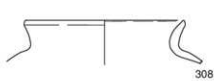
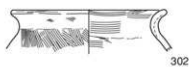
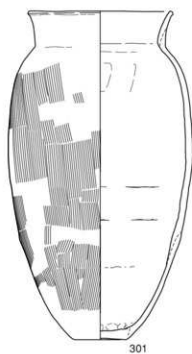
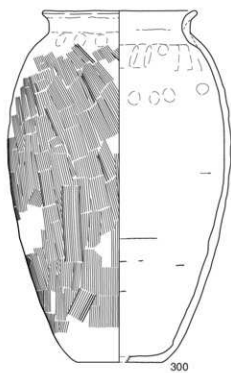
NR02-第2層



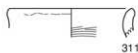
NR02-第2層



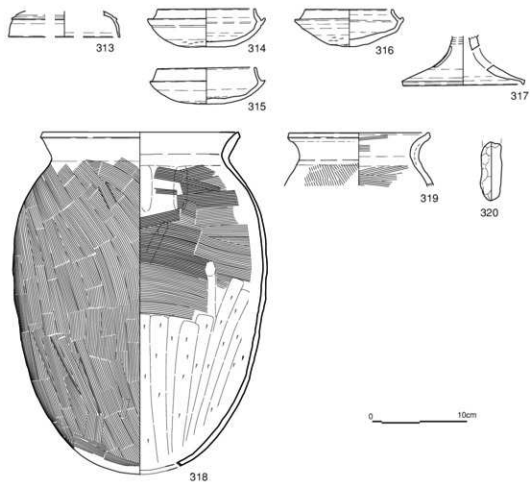
NR02-第2層



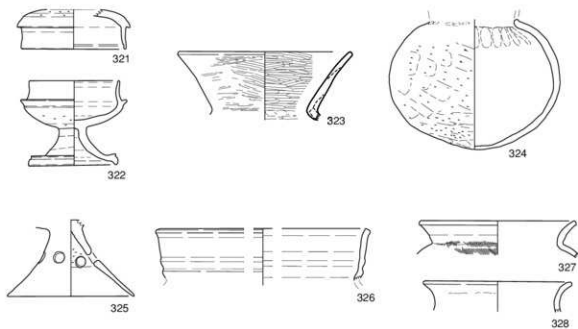
0 10cm



NR02-第3層



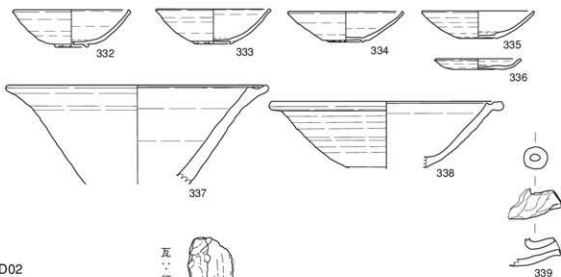
NR03



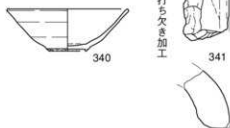
SD02-第1層



SD02-第2層



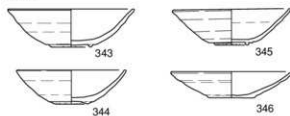
SD02



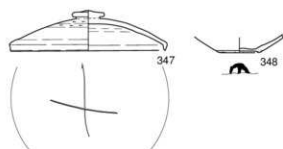
SD05



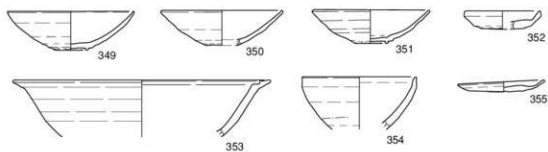
SD06



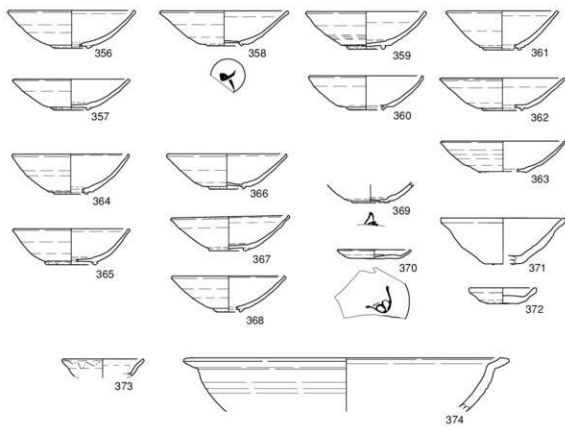
SD08



SD04-第1層



SD04-第2層



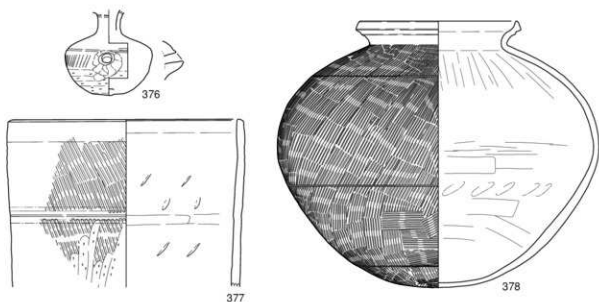
SD04



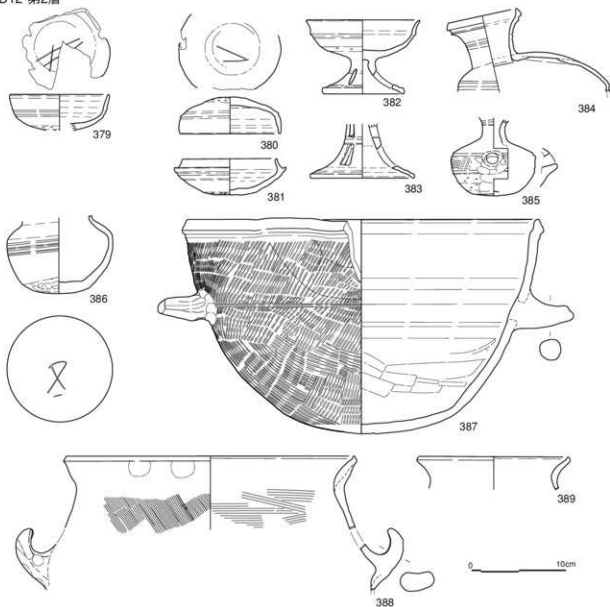
0 10cm

図版 54

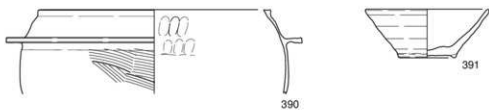
SD12-第1層



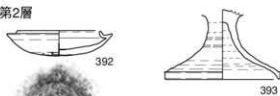
SD12-第2層



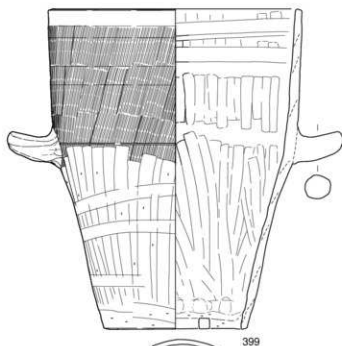
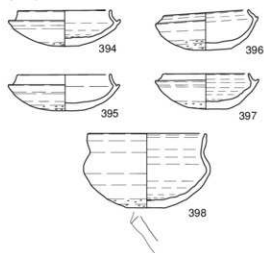
SD13



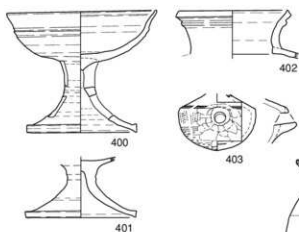
SD15-第2層



SD15

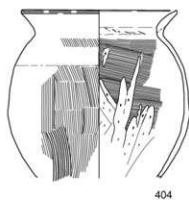


SD17-第2層



0 10cm

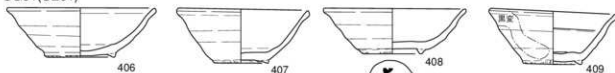
SD02/SD05



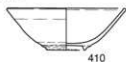
SD17-第1層/第2層

図版 56

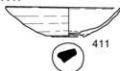
SG01(SE01)



SE02



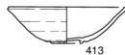
SK47



SK102



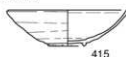
SK104



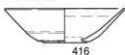
SK108



SK118

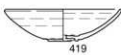
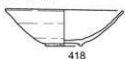


SX01-第2層

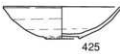


0 10cm

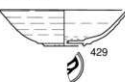
SX01-第3層



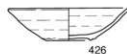
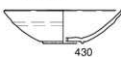
SX01



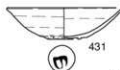
SX01-北壁



SX01-T



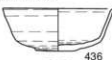
SX01/SX01-第3層



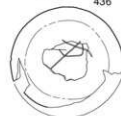
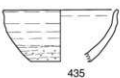
SX02

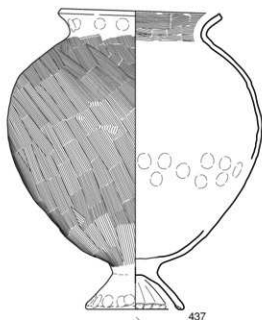


SX01/SD03

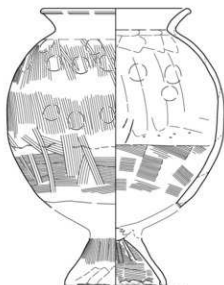


SX04

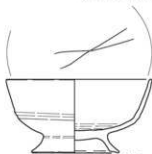




437



438



439



440

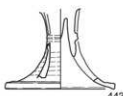
0 10cm



441



442



443



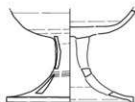
444



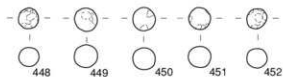
445



446



447



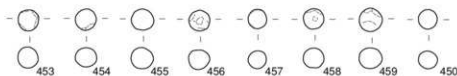
448

449

450

451

452



453

454

455

456

457

458

459

450

0 5cm

00C区

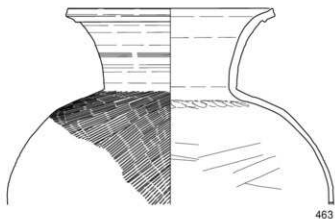
NR01-第3層



461

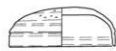


462

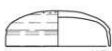


463

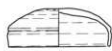
NR01-第4層



464



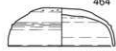
467



469



472



465



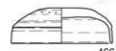
468



470



473



466



471



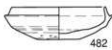
474



475



478



482



485



476



479



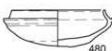
483



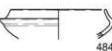
484



477



480



481



486



487



488



489



491



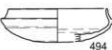
492

NR01-第4層/第5層

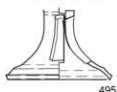
NR01-第5層



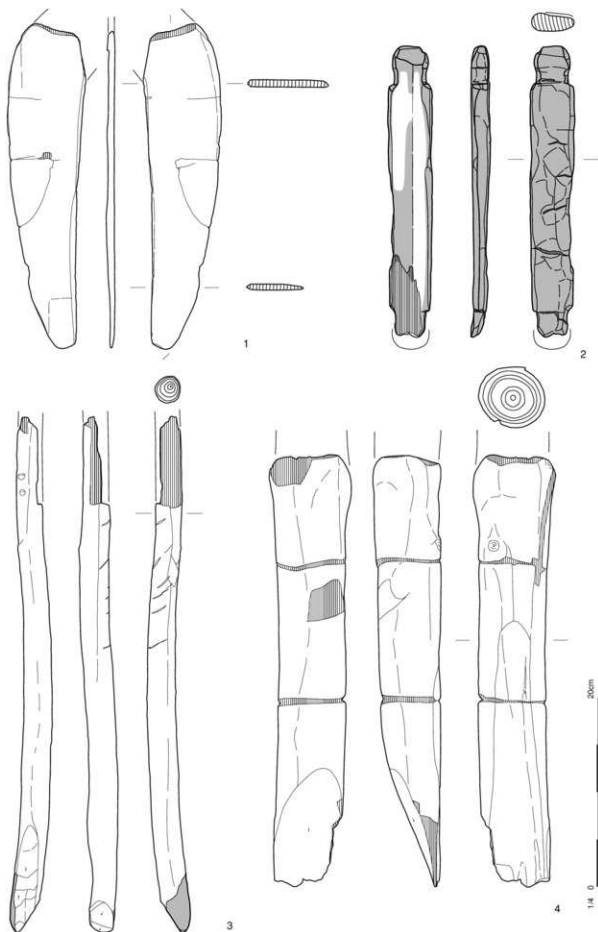
493

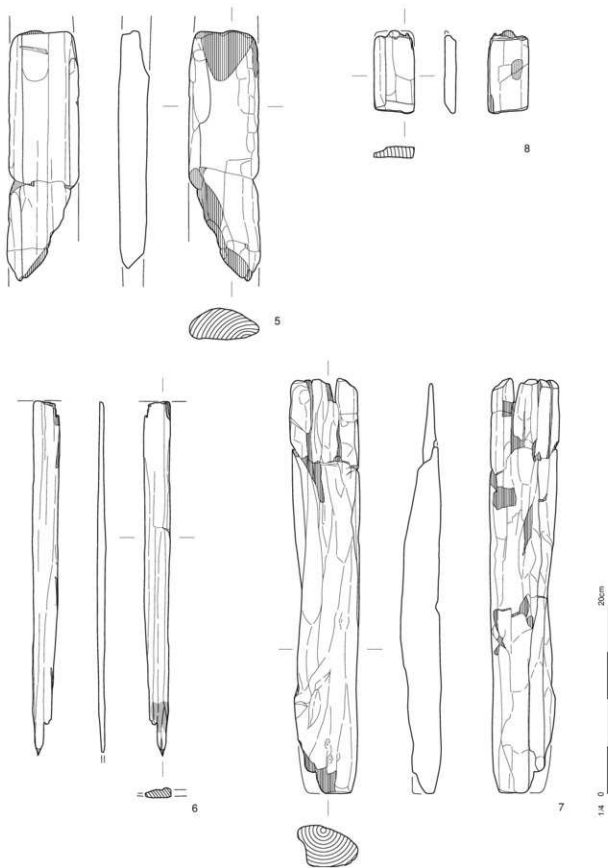


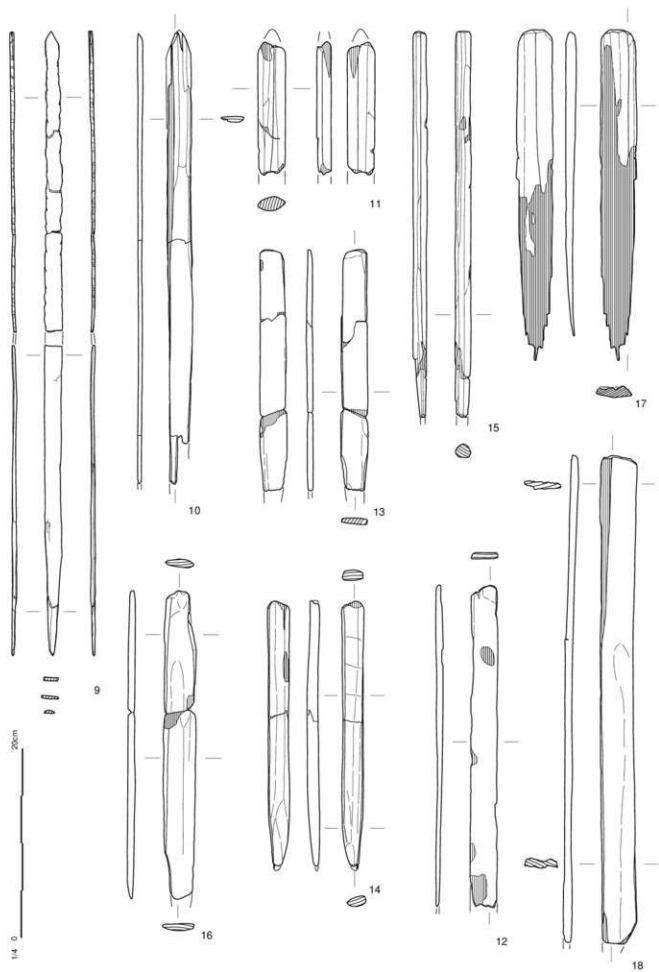
494

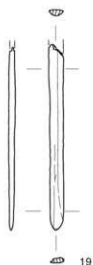


495

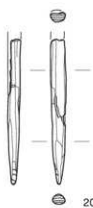




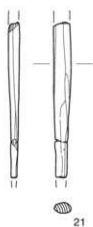




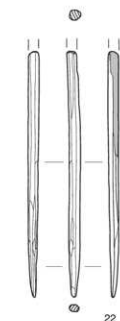
19



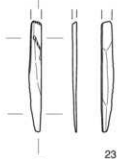
20



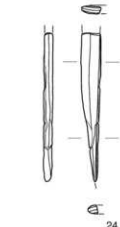
21



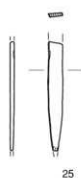
22



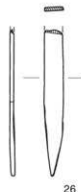
23



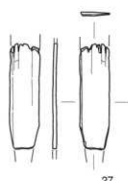
24



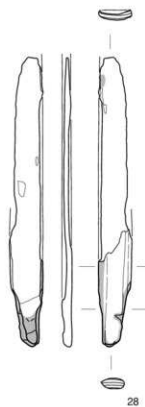
25



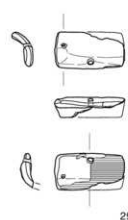
26



27

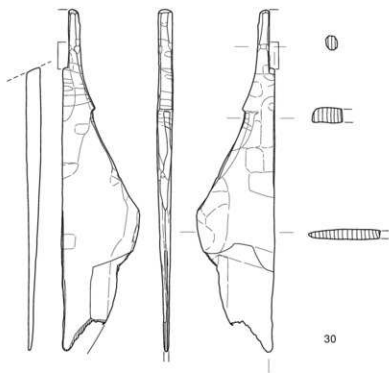


28



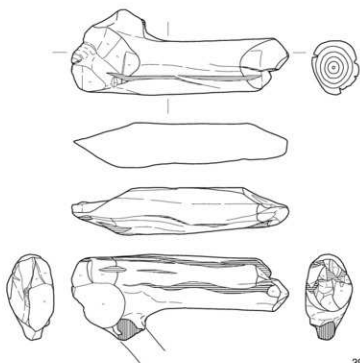
29

1/4 0 200m

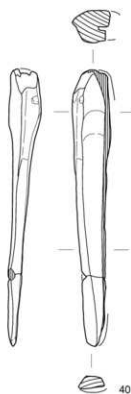


30

32

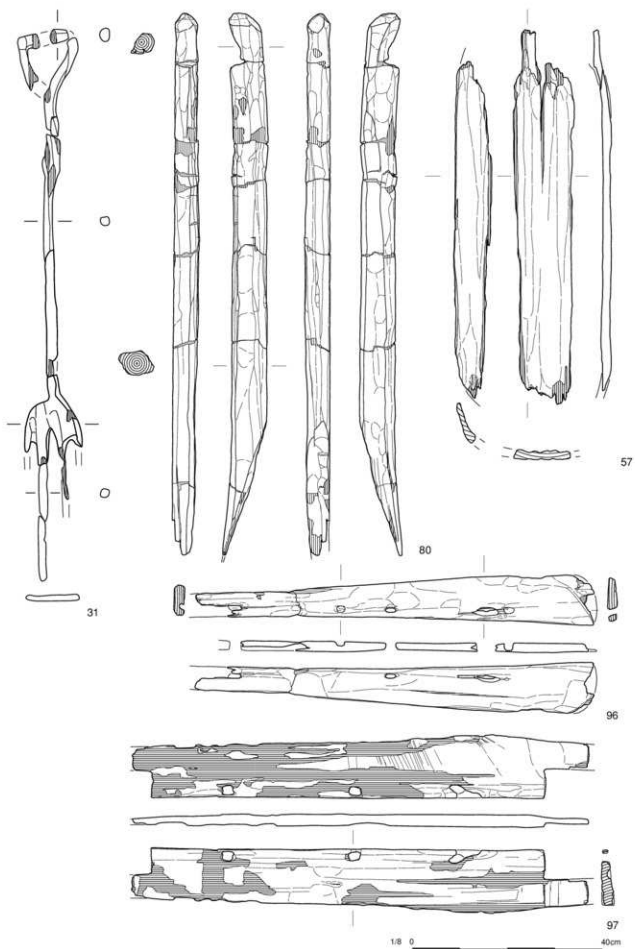


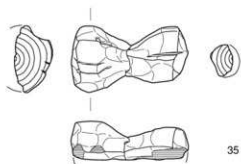
39



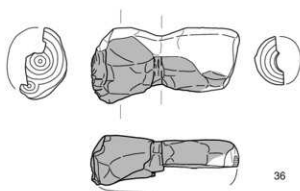
40

1:4 0 20cm

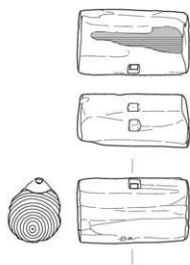




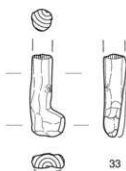
35



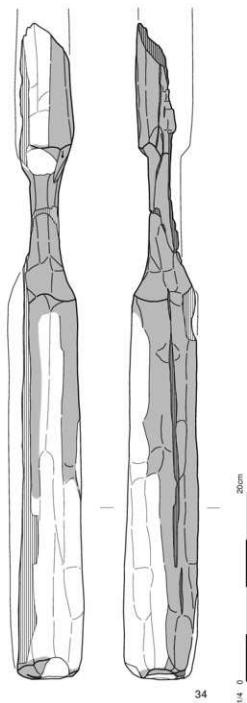
36



37

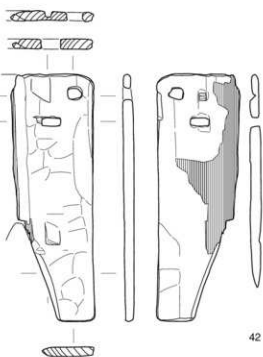
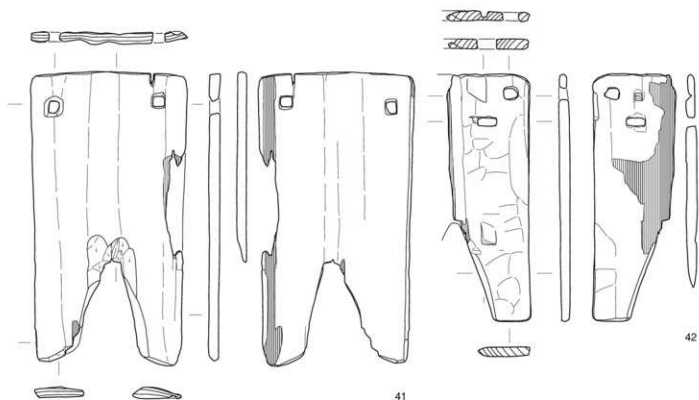
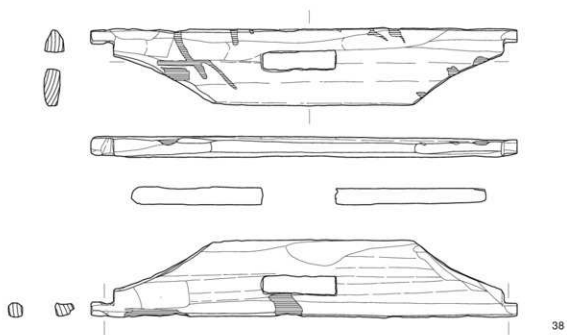


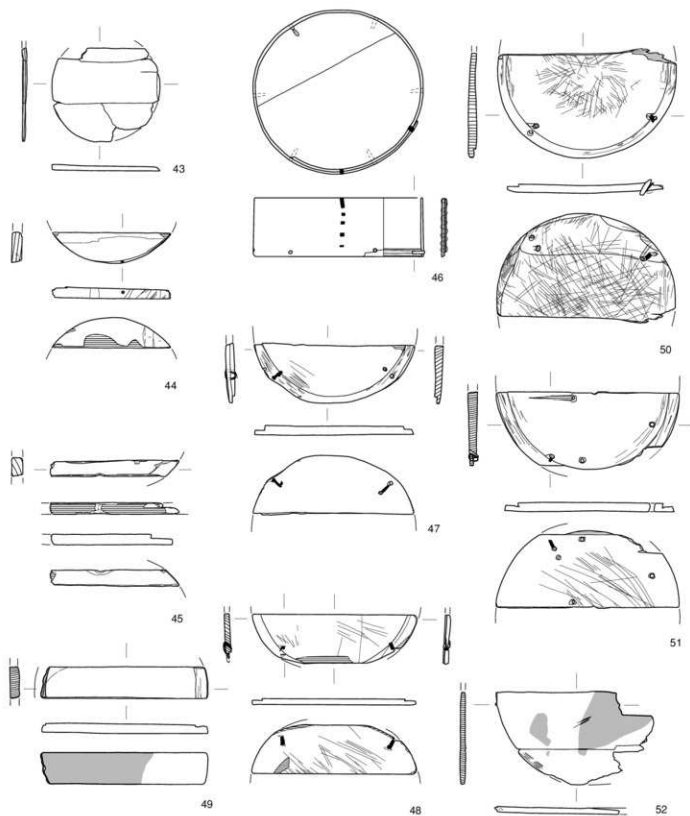
33

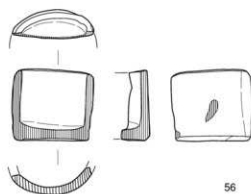
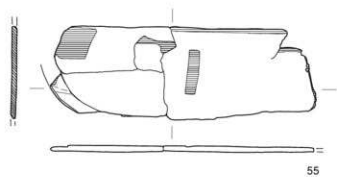
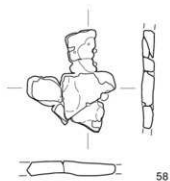
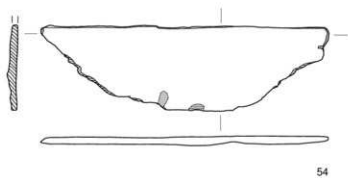
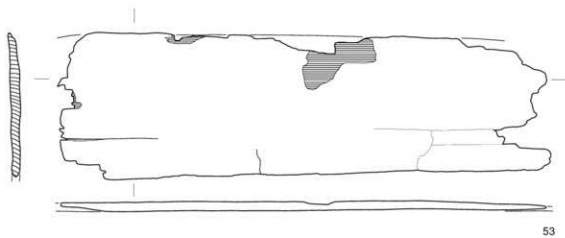


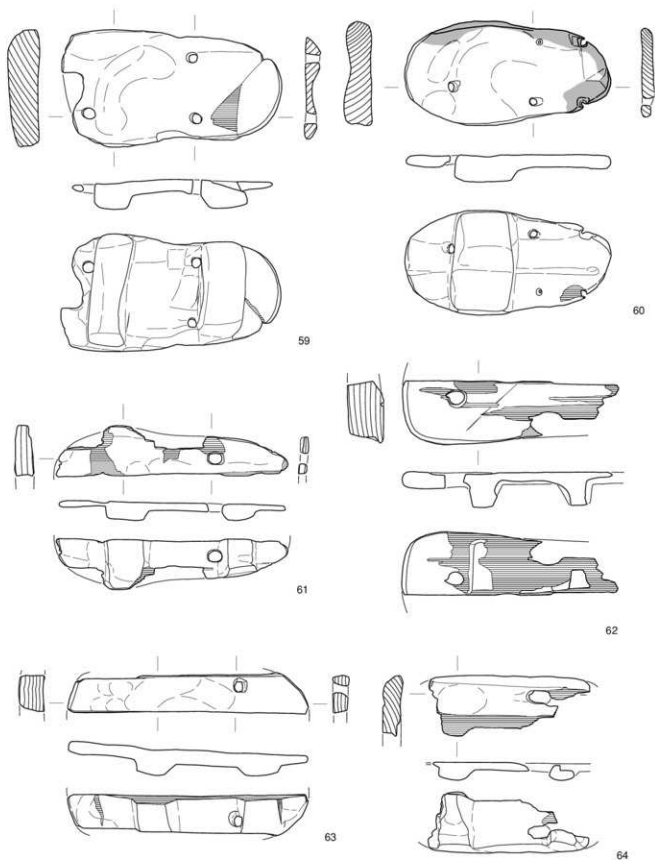
34

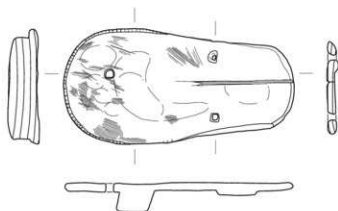
0 20cm



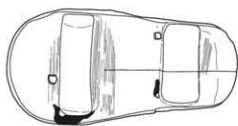








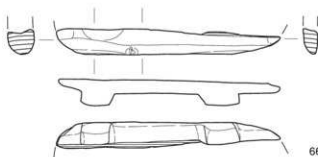
65



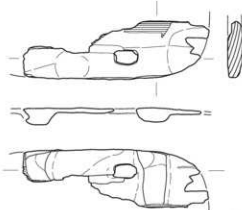
66



67



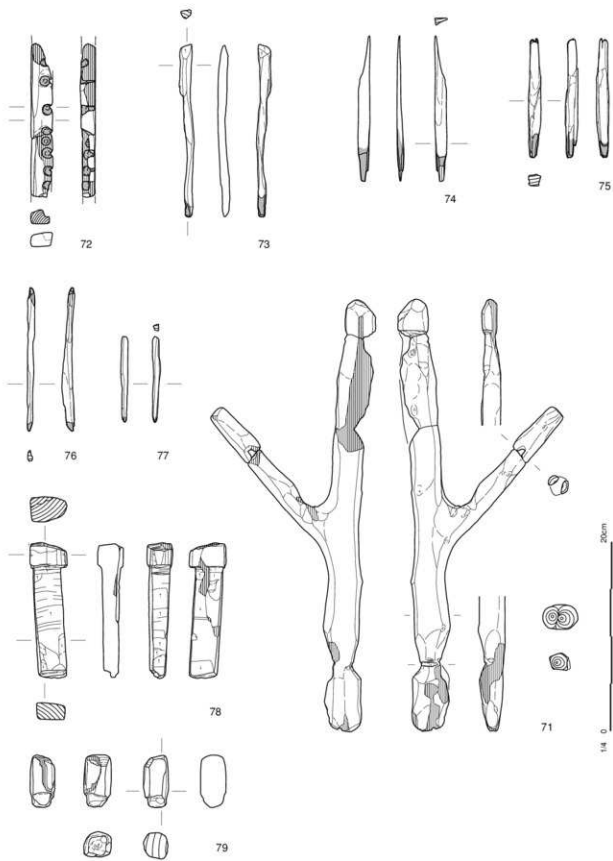
68

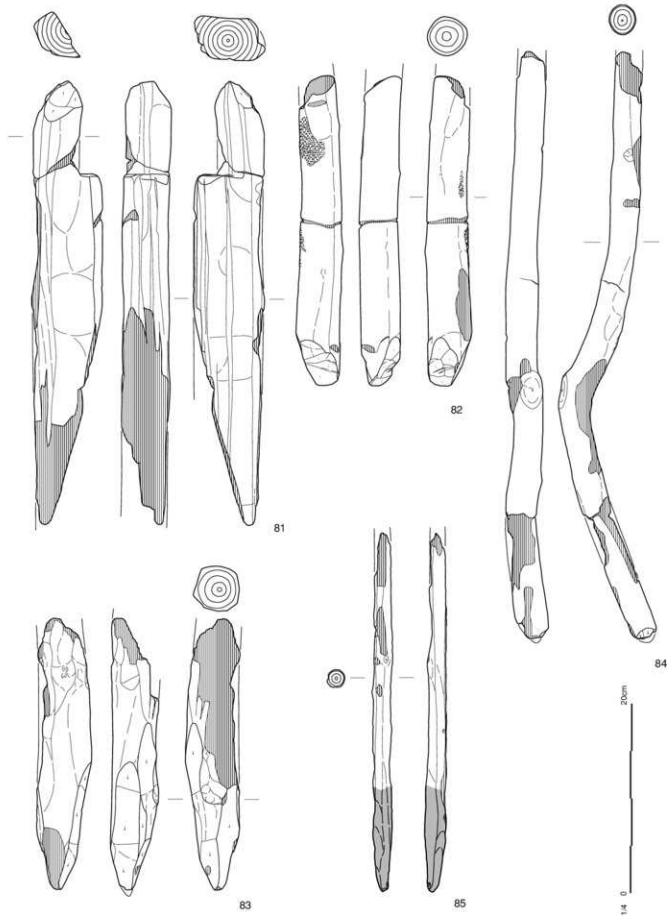


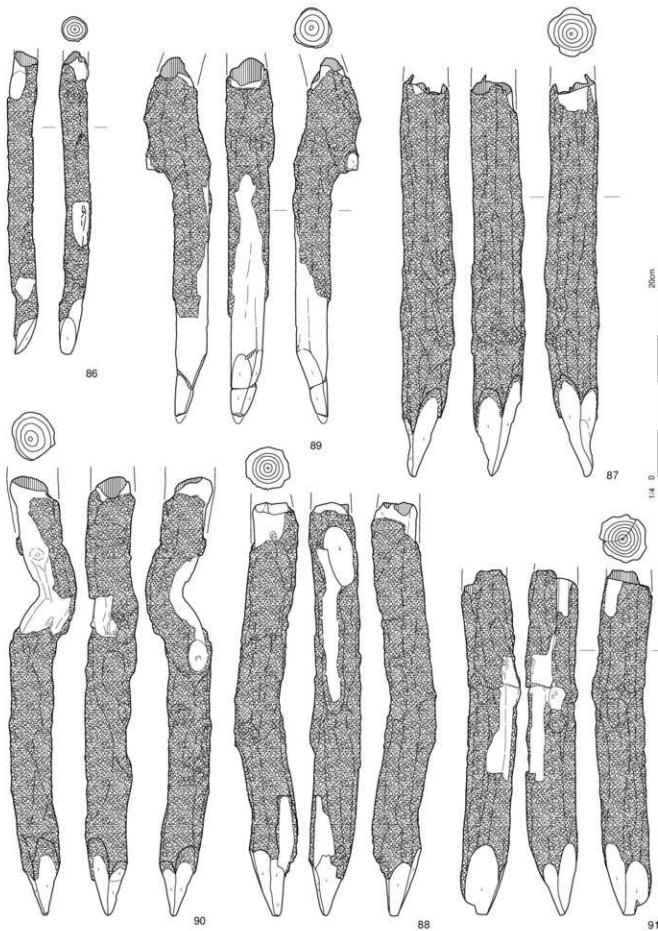
69

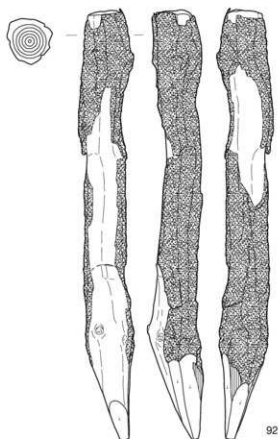


70

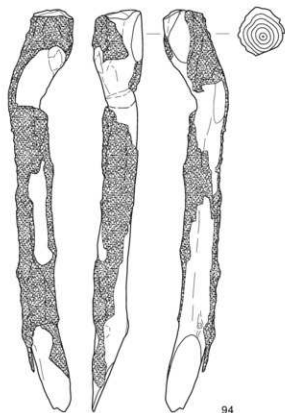




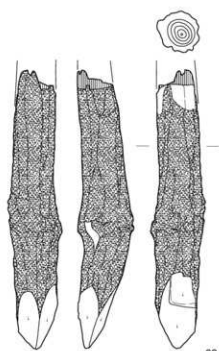




92



94

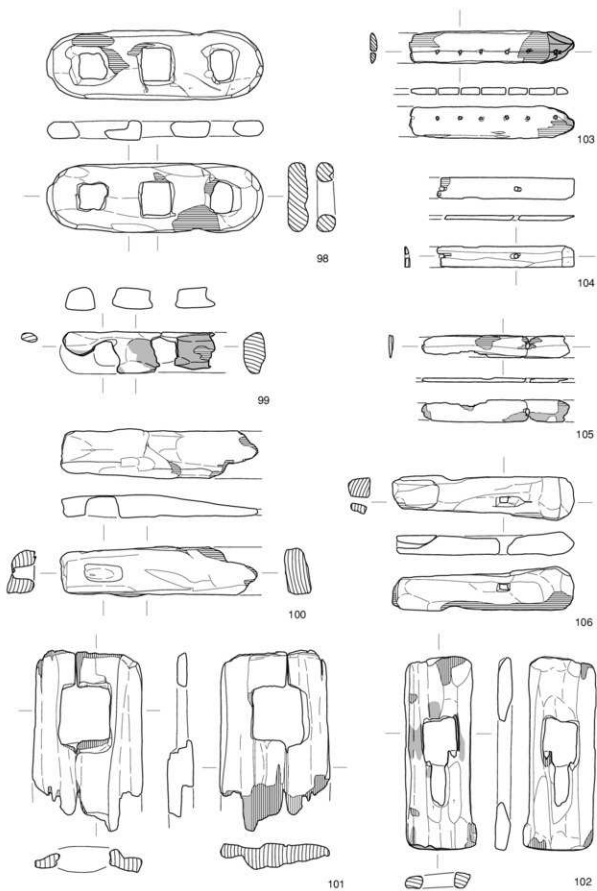


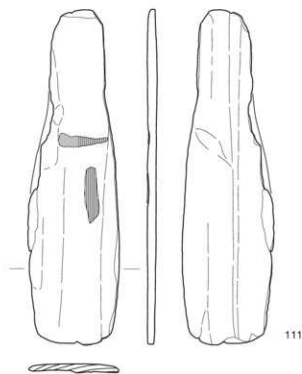
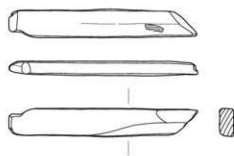
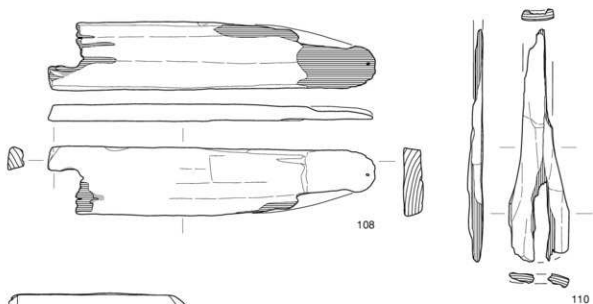
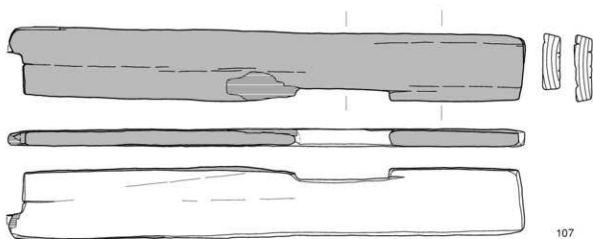
93

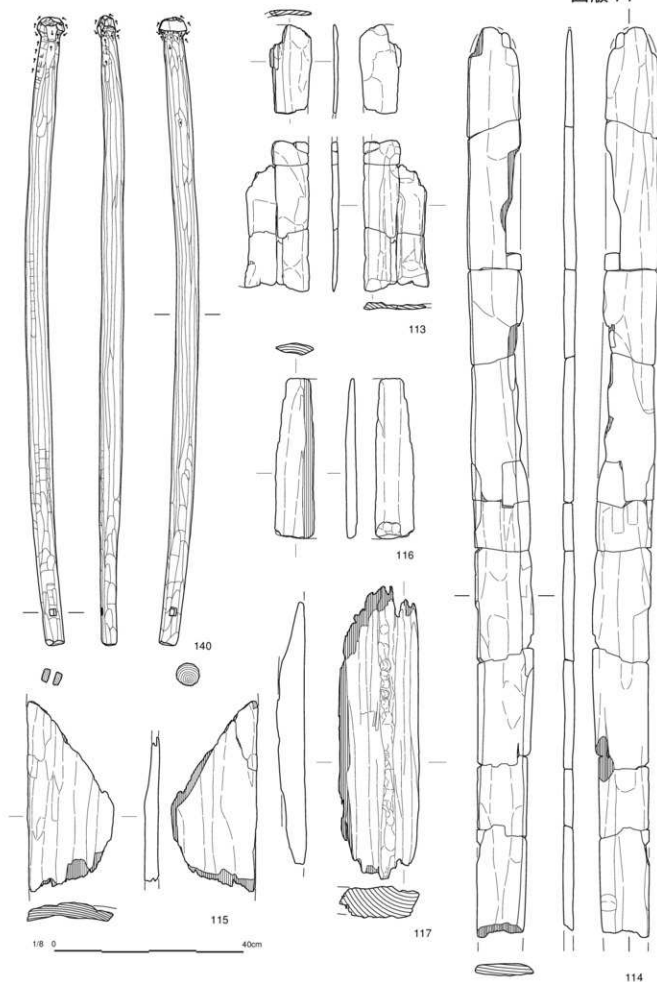


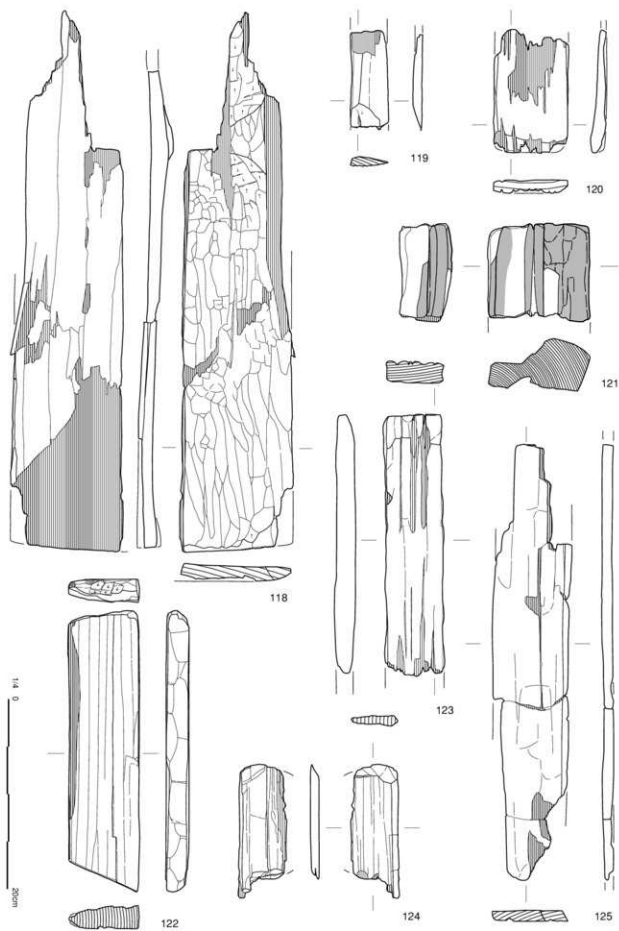
95

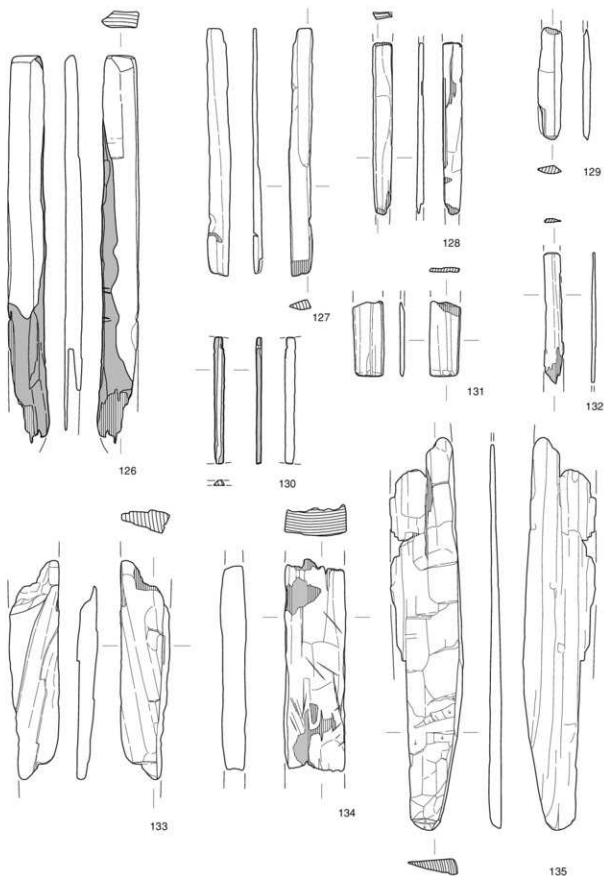
20cm
1:4 0

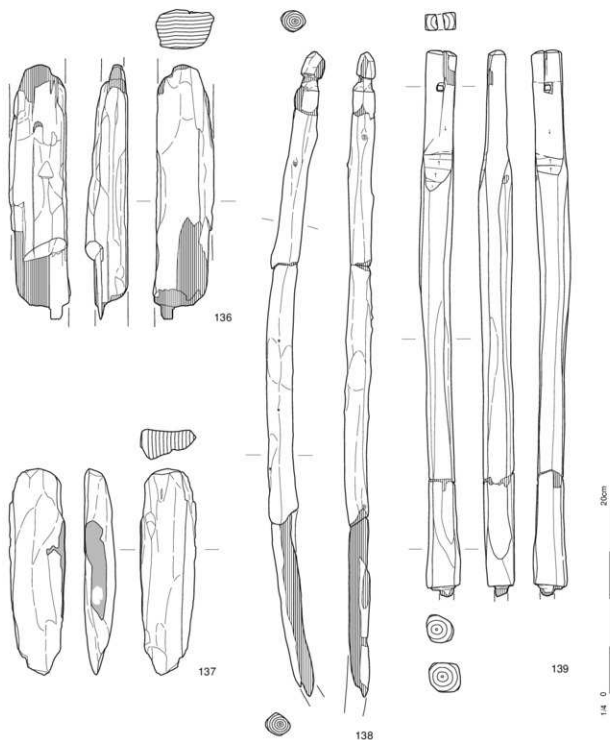


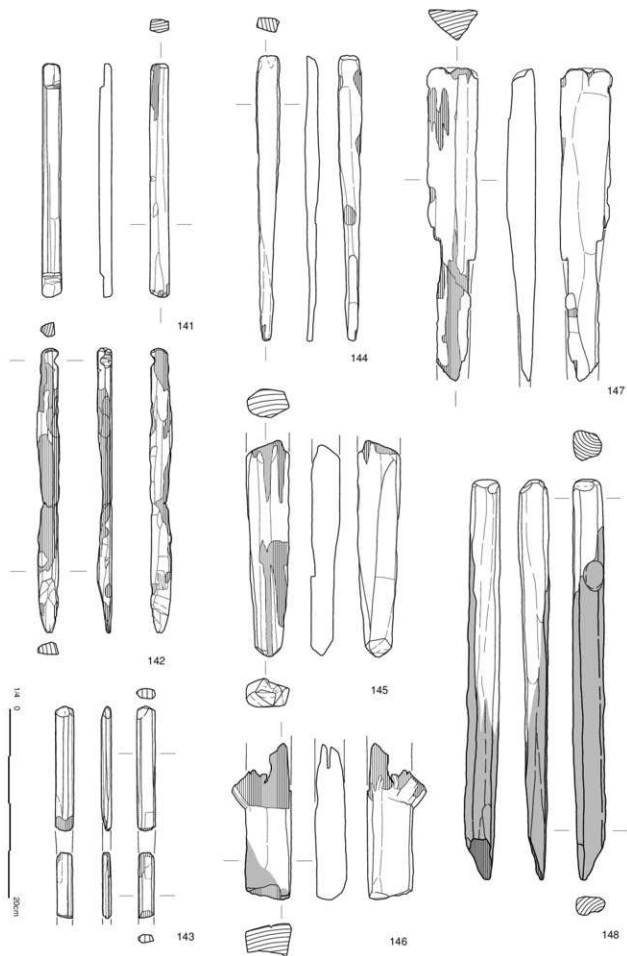


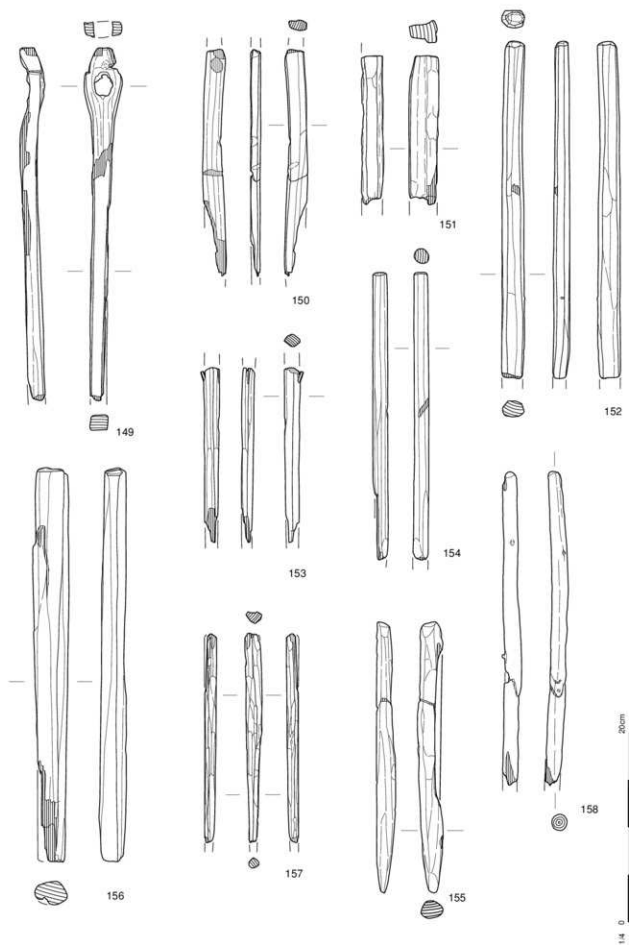


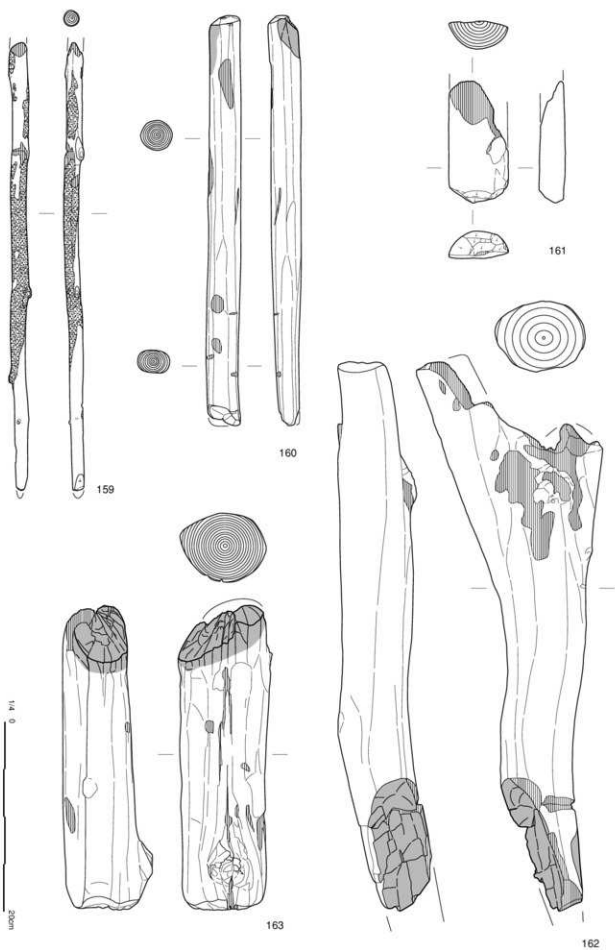


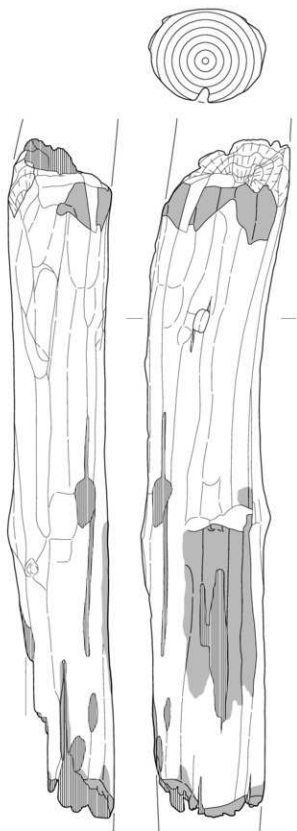




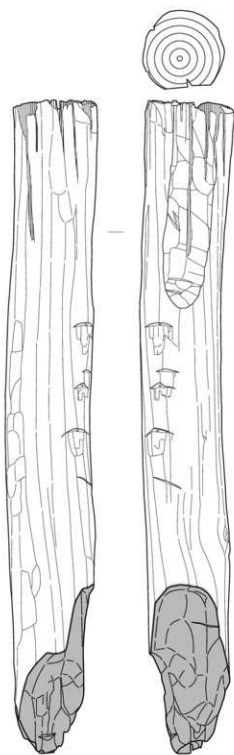






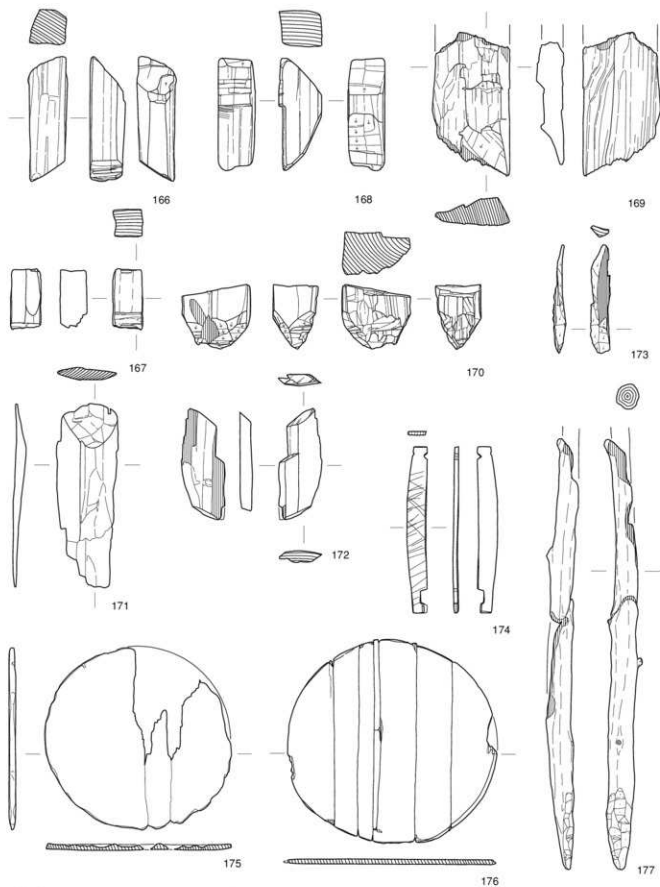


164



165

1:4 0 20cm



●調査前風景 南東から



● 00A区
上面全景
西から

● 00A区
上面全景
南から

● 00A 区
上面中景
西から



● 00A 区
SD02
西から



● 00A 区
SD02 遺物
北から



● 00A 区
SD08
箱状遺物
北から



● 00A 区
SD08
箱状遺物
北から

● 00A 区
SK292・305(1)
西から



● 00A 区
SK292・305(2)
西から



● 00A 区
SK305 曲物
西から



● 00A 区 SK168 北から

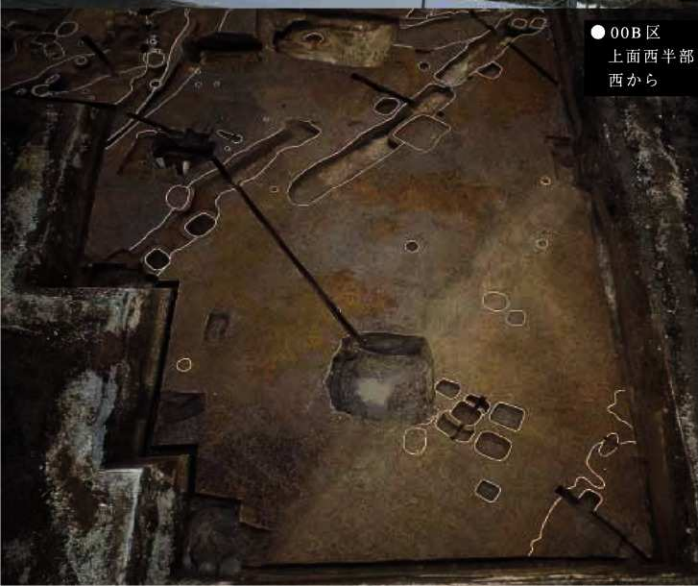


● 00B 区
上面全景
北西から





● 00B 区
上面全景
西から

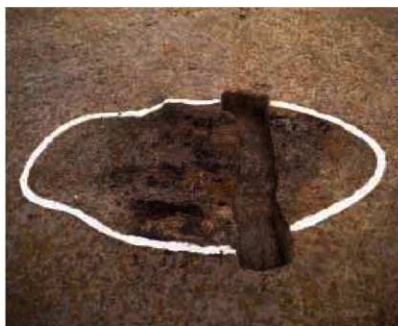


● 00B 区
上面西半部
西から





● 00B区
SK102
東から



● 00B区
SK102
西から



● 00B区
SK02
東から

● 00B 区
上層水田
西から

● 00B 区
下層水田
西から



6



21



22



23



24



15



29



31



30



18



7



34



35



37



38



48



46



47



49



62



63



70



76



77



81



85



93



96



95



97



111



126



132



137



138



139



140



141



143



145



157



158



160



168



171



175



347





215



216



220



240



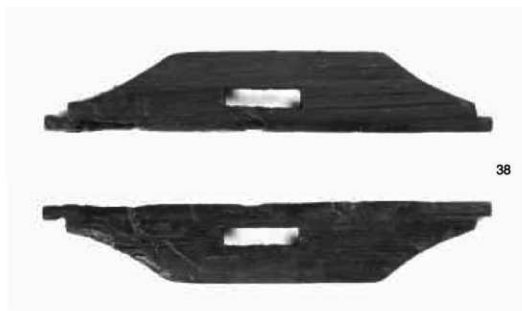
233



387









46



50



56



41



42

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第121集

志賀公園遺跡Ⅱ

2004年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社